

青鶴

CHEONGHAK 5

青鶴
5

巻頭言

公益財団法人韓昌祐・哲文化財団 韓昌祐 理事長

毎年、助成受贈者のその後の活動や活躍を検証する目的で財団誌『青鶴』を作つてきました。今年度から、時代のニーズに合わせ、電子ブックにします。電子ブック『青鶴5』の発刊に際し、本財団の歩みを少し振り返つてみたいと思います。財団の歴史を遡ると、これまで三度、名称が変わっています。

一九九〇年十二月、文部省（当時）から正式に認可を得て創設した「財団法人 韓国文化研究振興財団」が財団法人の始まりです。この財団は一五年続き、朝鮮半島の歴史・文化・日韓関係の研究に携わる多くの研究者を支援し、育てました。

その後、助成分野を文化・芸術・歴史・社会・スポーツに広げ、二〇〇五年に名称変更したのが「財団法人 韓哲文化財団」です。韓哲は天逝した長男の名前をとつて命名しました。彼は、一九七八年八月二十一日に滞在先の米国・ヨセミテ国立公園で事故に遭い、一六歳の若さで生涯を閉じました。その後、小学生の時に遺した作文集が発見されます。内容は以下のようなものでした。

「ぼくは、町のためにやくだつ。ぜつたいに。たとえば小学校を作る、そしてどうきょうを作る、こうみんかんをたてる。小学校中学校にプール50mを作る。（中略）こうえんを作る、町えいぐランドを作る…」

作文には社会貢献の原型のようなものが見て取れます。「財団法人 韓哲文化財団」には、夢叶わずして天逝した彼の願いが込められています。

新しい公益法人制度の大改革の下、内閣府の公益財団法人認定を取得するまで、「財団法人韓哲文化財団」は六年間活動を続けました。

そして二〇一二年四月一日に「公益財団法人 韓昌祐・哲文化財団」としてスタートし、三年目を迎えようとしています。回顧すると時代とともに名称を変えながら、かれこれ二三年間、日本と韓国を繋ぐ助成事業を継続してきたことになりました。

さて二〇一〇年五月に生まれ故郷の韓国慶尚南道泗川市シウグンに発足した「韓昌祐 祥子ナガコ 教育文化財団」(韓裕理事長)の報告もおきます。この財団の事業目的は大きく四つあります。一つは奨学金の支給。二つには読書の奨励。三つには地域の学力向上。四つには芸術・文化の直接体験です。

例えば昨年十一月十六日に、「家族読書ゴールデンベル大会」という読書奨励事業を実施しました。これは子どもたちだけでなく家族全員で本を読む独創的なイベントです。泗川市内の地域全体の読書力の向上と家族愛を深めることを目的に行いました。各初等学校(小学校)の予選を勝ち抜いた泗川市内の七〇家族が、クイズ形式で読書の成果を競い合ったのです。

入賞した子どもたちと奨学金を支給された子どもたち 一一名には日本文化を学ぶ副賞(研修旅行)が贈られ、三泊四日の東京見学を満喫したようです。

そして家族読書大会の翌日、泗川市市庁舎前広場にて泗川市地名制定六〇〇周年記念式典があり、「韓昌祐 祥子 教育文化財団」が寄贈した「泗川市民大鐘」の打鐘式が行われ、併せて泗川市側が返礼として私の胸像除幕式を執り行ってくれました。市民約六〇〇〇人が参加する一大行事になり、晴れやかな祝日となりました。

私を生んでくれたのは韓国です。育ててくれたのは日本です。財団法人活動を通じて社会貢献を实践し、日韓両国に恩返しをするつもりです。

5

巻頭言 韓昌祐	2
写真集『青鶴——存在する夢』より 柳銀珪	6
公益財団法人 韓昌祐・哲文化財団 第5回助成受贈者それぞれの道	
姜杏理 ピアニスト	10
ロシアで学んだ「ファンタジー」のようなピアノ	10
河明樹 ソヘグム演奏家	26
ソヘグムの音色に安らぎと希望を込めて	26
青木鉄仁 日韓演劇交流センター専門委員・俳優(劇団青年座・翻訳家)	42
演劇交流で日韓の「もどかしさ」をとまほぐす	42
川村 湊 法政大学国際文化学部教授	58
韓国映画史を俯瞰できるライブラリーを	58
西垣安比古 京都大学大学院人間・環境学専攻科教授	74
遠くて近い日韓の茶文化を比較研究	74
古澤義久 長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室	90
土器から読み解く、韓半島と東北アジアの交流	90
楊原泰子 詩人尹東柱を記念する立教の会代表	106
詩人尹東柱がうたう民族の誇りと祈り	106

下川正晴 NPO法人日韓次世代映画祭代表・大分県立芸術文化短期大学教授

映画がつなぐ日本と韓国の次世代交流……………122

宣元錫 中央大学総合政策学部兼任講師

国境を超え、朝鮮族が拓く東アジアの未来……………138

有光健 韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議副代表

朝鮮半島由来の、文化財の返還問題を考える……………154

安栞 日本女子体育大学体育学部運動科学科

「身体で表現すること」に魅せられて……………168

青鶴学術論文集

新石器時代の韓半島と東北アジアの関係……………186

長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室 古澤義久

朝鮮文人茶を育んだ書齋の淵源……………206

京都大学大学院 人間・環境学研究科教授 西垣安比古

韓国の移民政策と、中国朝鮮族……………216

中央大学総合政策学部兼任講師 宣元錫

日韓関係「最悪」時代に、「次世代映画交流」は何かできるか？……………228

表紙題字／金周會
装丁・本文デザイン／大石一雄
編集／大田由紀江
校閲／小関恵

青鶴洞 (チョングドン)

青鶴洞とは、古くから朝鮮半島に伝わる理想郷のことです。神仙が青い鶴に乗って遊ぶ地上の楽園、そこは世俗のいかなる混乱とも隔絶した平和な村として朝鮮民族の心に伝承されてきたユートピアです。

写真 柳銀桂





公益財団法人
韓昌祐・哲文化財団
第五回助成受贈者
それぞれの道

姜杏理

河明樹

青木鉄仁

川村湊

西垣安比古

古澤義久

楊原泰子

下川正晴

宣元錫

有光健

安栞

ロシアで学んだ「ファンタジー」のようなピアノ

姜杏理

ピアニスト

「ロシアの色は赤」

激しくてバカ正直だと姜は自分を振り返る。

留学先のロシア人の気質もよく似ていた。

情熱に満ち、生活の中に音楽が深く溶け込んでいる。

ロシアでの濃密な日々は、ピアノで自分だけの

「声」を表現する姜に、大きな力を与えてくれた

文 〓 千葉望

写真 〓 渡辺誠



夢だった海外留学のために助成金を申請

日本でクラシック音楽を学ぶ学生の多くが夢見る留学。それぞれ渡航先はさまざまだが、姜杏理が望んだ留学先はロシアだった。桐朋学園大学音楽学部演奏学科ピアノ専攻時代に師事した同じ在日の朴久玲が、旧ソ連時代のロシアに留学していたことも影響していたし、桐朋学園にやってきて指導する世界の音楽家の中でも、ロシア人の教授法がしっくりきたのである。

「それぞれの国には特徴があるのですが、ロシア人の先生のレッスンはとても印象的でした。どうしてこういう音が出るんだろうと思うほど、ファンタジーのような音楽なんです。曲の最初から最後まで物語のように弾く。それを学びたいと思いました」

なかでも、名門モスクワ音楽院の中で綺羅星のごとく人材を輩出していたのが、名ピアニストでもあるヴォスクレセンスキーだった。自分もぜひヴォスクレセンスキー門下で学びたい。問題となったのは、その費用と、モスクワを拠点として各種コンクールへ参加する渡航滞在費だった。

姜の両親はともに音楽好きで、娘を4歳のときからヤマハの音楽教室に通わせた。特に朝鮮舞踊家の母はかつて自分もピアノを習っていたため、娘の教育に熱心だったという。毎日の練習の面倒を見、レッスンやコンクールへ参加するときには必ず付き添った。高校は地元・静岡県常葉学園橋高校音楽科に進んだが、コンクールやレッスンのため、ほとんど学校へ通うことはなかったという。桐朋学園大学に合格した後は、大学からの奨学金のほか、朝鮮奨学会からも奨学金を受けて勉強を続けることができた。だがとにかくクラシック音楽を学ぶにはお金がかかる。これ以上両親に負担をかけるこ



姜杏理



カン・ヘンリ◎1984年生まれ。静岡県出身。4歳からピアノを始め、ピアニストを目指して桐朋学園大学音楽学部演奏学科ピアノ専攻卒業。モスクワ音楽院に留学し、大学院を修了。現在はロシア国立アカデミー専属ピアニストとして音楽活動に従事する

とは避けたかった。

そんなときに、(財)韓哲文化財団(当時)の助成金のことを知る。モスクワ音楽院の学費、滞在費、さらに主にヨーロッパで行われるコンクールへの渡航滞在費などを計算し申請したところ、助成が決まった。姜はそれが本当にありがたかったと語る。好きな音楽が最高の環境で続けられるのだ。

最悪の練習環境と最高の音楽環境

めでたくロシアに留学したものの、現実の「最高の環境」は「最高の練習環境」とはとうてい言えなかった。

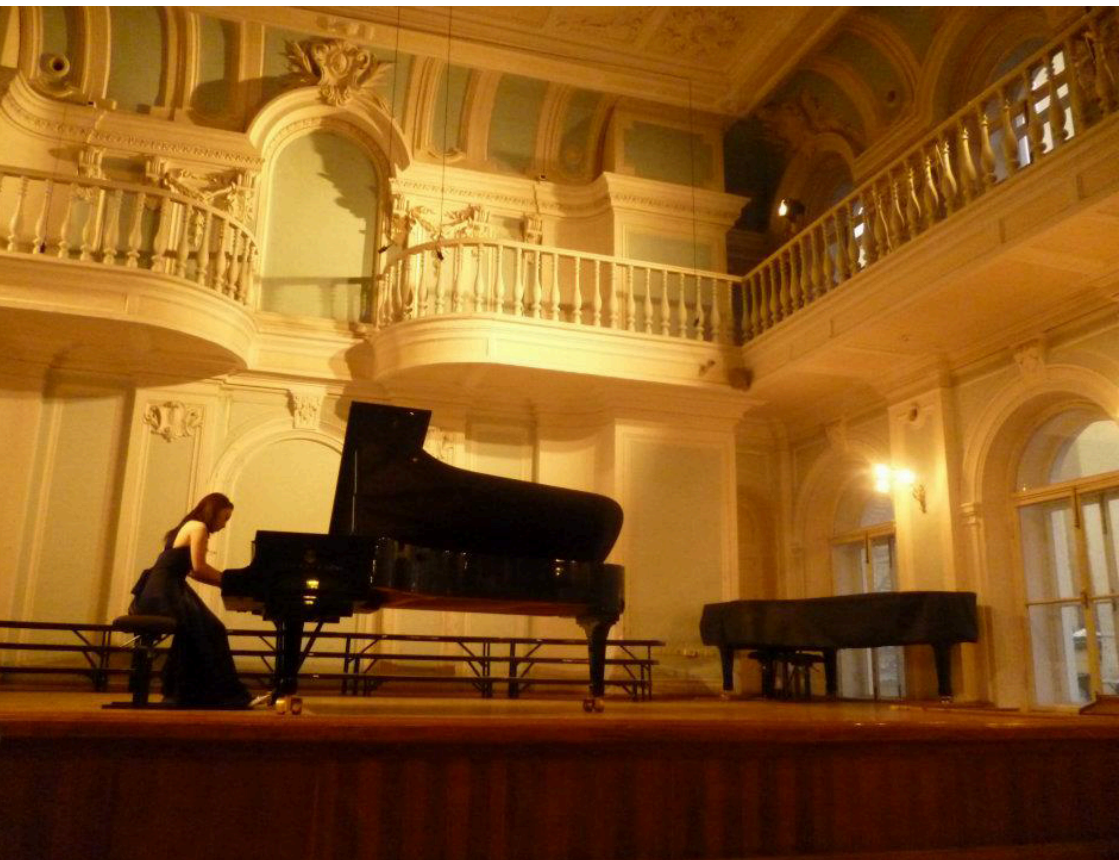
「ロシアでの留学生活はまずロシア語の勉強から始まって、その後研究科で学び、成績次第で大学院に進めるかどうかが決まるんです。私は費用を節約するため寮に入りました」

その寮は、桐朋学園の環境とは雲泥うんねいの差だった。部屋は6畳の広さに3〜4人が一緒に生活する。800人もの寮生がいるのに、地下練習室のピアノはわずか50台。調律が行き届かないとか、弦が切れているものならマシなほうで、一部鍵盤のないものさえあるという。練習室は朝7時に鍵が開けられ、その日の予約をするために朝5時から寮生が長蛇の列を作る。前の晩も寝るのは1時過ぎである。みなパジャマ姿で顔も洗わず、眠さのあまり立っただまま寝ていたりする。

「1時過ぎに寝るのはシャワー室が1時で閉まるから。それまでは勉強です。シャワー室も床が信じられないくらい汚いので、着替えもできない。裸の上にガウンを羽織り、そのまま自分の部屋に駆け込むんです(笑)」



姜杏理



モスクワ音楽院のホールにてリサイタルを開く。耳の肥えた聴衆の多いロシアで大いに刺激を受けた。(写真提供 姜杏理)



情熱的なコリアの血を象徴する色は「赤」だという。そしてロシアもまた「赤」。共通点の多い国で学べたことはラッキーだった





モスクワ音楽院の仲間たちと。彼らは小さな頃から専門教育を受け、自然にクラシック音楽が身体にしみ込んでいた。率直な意見交換が刺激になった。(左下共、写真提供 姜杏理)

8 ЯНИ

Московская государственная консерватория имени П.И. Чайковского

КОНЦЕРТНЫЙ ЗАЛ ИМЕНИ Н.Я. МЯСКОВСКОГО

Антрактный концерт

КАН ХЭН ЛИ
фортепиано

А.С. СТРУКОВ

РАХМАНИНОВ
Продвижение, соч. 23
М. 12, соч. 32

БАХ - БЮЗЕНИ
Листово

ЛИСТ
Тринадцатый этюд
М. 18, 5, 119

БРАМС
Интермеццо, соч. 119

СКРЯБИН
Фантазия, соч. 28

НАЧАЛО В 19 ЧАСОВ - ВХОД СВОБОДНЫЙ - ☎ (495) 629-94-01
WWW.MOSCOWCONCERTS.RU

ロシアの作曲家スクリャーピンが遺した自宅で、リサイタルを開催したときのポスター。3万円で借りられたというから、恵まれた環境だった



2年目からは多少知恵がついて、列に並ぶときにはパイプ椅子を持参し、座って寝たり、勉強しながら鍵が開くのを待つようになった。そのような環境にもかかわらず、留学はよい思い出いっぱい。環境に恵まれていた日本より、取り合ったピアノで練習する1時間は貴重だったから、集中力も身についた。

寮で生活したため否応なくロシア語は上達するし、何より友人たちに恵まれた。ロシア人の学生たちは子どもの頃から英才教育を受け、レパートリーも豊富だった。日本育ちの姜は試験やコンクールで弾く曲を集中して練習することに慣れていたが、モスクワ音楽院はそれほど甘くなかった。

「彼らは常に20〜30曲は練習していたし、いつでもソロコンサートができる準備をしていました。しかも、彼らはピアノを自分の心を表現する『声』として演奏していたんです。私も週2〜3回あったレッスンのたびに、違う曲を持っていかなくてはなりませんでした。同じ曲だと『それは前回やったでしょう?』と先生に言われてしまいますから」

才能ある音楽家の卵とじかに触れ合えることも大きかった。特に印象に残っているのは、最近日本でも演奏活動を始めたニコライ・ホジャイノフだという。シヨパン国際ピアノコンクールの予選を一位通過した逸材である。

「エネルギーがあつて、音も本当に綺麗。鍵盤が鳴る音が生きているみたいなんです。彼のレッスンの直後に私の番が来てレッスン室に入るのは、本当にいやでした(笑)」

ただ美しく上手に弾くことが大切なのではない。プロの音楽家は自分だけの「声」を表現しなければならぬ。それを強く学んだ留学経験は、姜を大きく変えていった。

練習環境はよくなかったが、ロシアは音楽の本場であり、音楽が生活に溶け込んでいた。モスクワ

音楽院の3つのホールでは毎日のようにコンサートが開かれ、学生の催すコンサートもあった。チケットは高くても1500円程度だったし、タダのものも多い。姜も勉強のためできるだけ足を運ぶようにしていた。

日本の大都市、特に東京では毎日が音楽祭のようで、世界中から来日した音楽家や日本の音楽家のコンサートがあちこちで開かれる。それは世界的に見ても高いレベルだけれど、一步ホールの外に出れば音楽が生活に溶け込んでいると言いがたい。クラシック音楽を学ぶ学生が留学を目指すのは、本場の空気を吸うためでもあるのだ。

コリアンと似ているロシア人気質

姜はラフマニノフやショパン、スクリヤービンなどが好きだと言う。情熱に満ちていて、自分の感情を込めやすい。ロシアの作曲家スクリヤービンの場合、彼が暮らした家がすぐそばにあり、サロンコンサートのために借りることもできる。

「私も2013年の6月にここでコンサートを開きました。会場として借りる料金は3万円。そういう点でも音楽がやりやすいと感じます。100人程度は入れますが、お客さんもすぐに集まってくれました。モスクワには音楽好きな方が多いんです。近所のおじいさん、おばあさんが音楽院の学生のコンサートを楽しみにしていることも嬉しかったですね」

日本の学生が目指す留学先はいろいろあるが、姜は自分がロシア留学を選んだのは正解だったと感じている。共通点が多いのだ。



姜杏理



2013年夏にモスクワ駐在の日本人ビジネスマンと入籍。一時帰国して結婚式を挙げた後、夫の祖父が遺した信州の家でくつろぐ

「彼らは性格が激しくて、腹が立てばそれがむき出しになるし、喜びもあらわになります。色で言うと赤でしょうか。私もコリアンで、激しいところ、バカ正直なところは似ています。色で言うならば赤」

ロシア人は音楽に対する意見をはつきりと言う。たとえばコンサートやコンクールでの演奏を聴いてくれた後、まずは「コングラチュレーション」と言うが、それから歯に衣着せぬ批評が始まる。日本のようにとりあえず「よかったよ」と言うことはない。相手がたとえ恩師であつても意見を言うし、師もそれを当然のこととして評価する。

「意見がない人間は認められないんです」

コンクールにも盛んに挑戦した。コンクール自体は音楽の本質に直接関係するわけではないにせよ（コンクールを経ていない大ピアニストは何人もいる）、日本で音楽活動をしようと思えば、やはりコンクール入賞歴という「箔」は大切なのである。

「それに、コンクールに参加するとほかの参加者の演奏が聴けますし、審査員のコメントも勉強になりますから」

オストウーニ国際ピアノコンクール（イタリア）2位、スクリヤービン国際ピアノコンクール（フランス）特別賞、IBLA国際ピアノコンクール部門（イタリア）特別賞をそれぞれ受賞し、実績を積み重ねている。モスクワ、日本でのコンサートも企画・開催。そのためにも助成金を活用した。

モスクワに留学して5年。その中ではいろいろなことがあつた。11年3月11日に東日本大震災が起きたことは、姜にとつても大きなショックだった。モスクワで暮らす日本出身の留学生が集まって、



姜杏理



恩師の影響からロシア留学を選んだ姜。苦労はあったが音楽への理解と情熱が高まったと、助成金に感謝している

モスクワ音楽院のホールを借り、復興支援コンサートを開催。日本大使館や日本企業にも協力を仰ぎ、収益金は日本大使館に託して寄付した。その中で、さまざまな人たちとの交流も深まったという。

姜は大学院の課程を修了後、ロシア国立アカデミー専属ピアニストとして、声楽や弦楽器の伴奏をする仕事に就きながら、15人ほどの生徒に個人レッスンする立場になった。

13年にはモスクワ駐在の日本人ビジネスマンと結婚。駐在員なのでいつまでモスクワで暮らすのかは会社の辞令次第だが、今はひとまず二人の生活を楽しんでいる。

「夫も駐在したてのときはロシア語の家庭教師についていたらしいのですが、仕事で使うのは英語ばかり。もうロシア語は忘れてしまったので、どこかへ行くときには私が通訳です」と笑う。

夫は音楽が好きで、妻の活動にも理解がある。精神的な安定を得て、姜の表情も穏やかだった。だが自分で「ロシアの色は赤」と言い、かつて日本人の同級生の演奏を「おとなしすぎる。もつと表情を出せばいいのに」と思ったという激しさは、変わらぬ彼女の持ち味だろう。ロシアの血とロシアでの学びを生かした音楽活動を本格的に展開するのはこれからである。

(文中敬称略)

2011年の東日本大震災では、日本大使館、ロシア在住の日本人と力を合わせて、支援のためのチャリティコンサートを開催した



ソヘグムの音色に安らぎと希望を込めて

河明樹

ソヘグム演奏家

ソヘグムは、朝鮮半島の伝統弦楽器ヘグムから、
1960年代に生まれた情感豊かな民族楽器。

10代からその才能を謳われた河明樹は、

民族音楽にクラシック、ジャズ、ポップスと、

幅広い音楽シーンで、ソヘグムの可能性を拓いてきた。

深く繊細な響きに、奏者と聴衆の心が固く結ばれる

文 西所正道

写真 菊地健志



ソヘグム奏者・河明樹^{ハミヨシキス}には忘れがたい記憶がある。

東日本大震災が起きた2日後の3月13日のことだ。その日、ある女性団体の招きでコンサートを行う予定になっていた。震災直後からコンサートをキャンセルしたい旨の連絡が相次いだ、その団体は開催するという。果たして何人集まるのかと不安に思いながら、会場に向かった。やはり人数は少なかった。聴衆の表情もかたかった。ところが、河が演奏を始めると次第に表情が豊かになっていくのがわかった。そして終演後……

「演奏を聴いて救われました。来るのをどうしようかと迷いましたが、来てよかったです。希望が持てました」

「故郷は震災によって何もかも流されてしまいました。演奏を聴いて、のどかな故郷にヒバリが飛んでいる震災前の風景が思い浮かびました。心に響きました」

などという感想を複数の人から聞いた。

その翌日も、(財)韓哲文化財団(当時)の助成金授与式のパーティで演奏した。河自身、助成対象者の一人として出席したが、急ぎよ、チャリテイコンサートを行うことになった。

「地震直後は演奏活動が続けていけるのかという不安を抱^かえていました。そんな中、どちらの会でも、被災地の人たちのことを思つて、とても心のこもった演奏ができました。この演奏を機に、音楽つて何？」ということを真剣に考えるようになりました。それまで僕は、いい音を楽器から引き出すことを第一に考えていましたが、震災以降は魂のこもった演奏をし、聴いた人たちの心に安らぎを与え、希望を持てるようにしたいということを第一に考えるようになりました。目標が上がったというより原点に戻ったのです」



河明樹



ハ・ミョンス◎1977年生まれ。韓国・全羅南道光州チリョラナムドクワンジユに故郷を持つ在日コリアン4世。8歳からソヘグムに親しみ、主要なコンクールで受賞。朝鮮大学校音楽科卒業後に入団した金剛山歌劇団に10年間所属。2006年、オリジナルCD「HIBARI」リリース、2009年、オリジナルCD「Asia monsoon」を、ルンヒャンとリリース。(同CDは2013年韓国でもリリース)



WORLD CULTURE EVENT
韓国フェア 11.30-12.1.
会場 羽田空港国際線ターミナル株式会社 会場力 春日井園大ホール 韓国文化館 韓国観光公社 大韓航空 アソシアテック

昨年11月30日、羽田空港と金浦空港を結ぶ直
行便就航10周年を記念したイベントで演奏。
隣は妻・尹慧瓊。羽田空港国際線ターミナルで



ソヘグムは4弦の弦楽器で、演奏するスタイルは同じ4弦のチェロのようで、音はヴァイオリンに近い。ただチェロやヴァイオリンとは違う音色が、時に感情の深くてやわらかい部分に浸み入り、時に揺さぶり、時に心に寄り添ってくれる。

学生時代から才能を開花。金剛山歌劇団のスター奏者に

ソヘグムを始めて30年近くになる。河にとってこの楽器はいまや体の一部と化しているが、出会いはやや意外なものだった。

河がソヘグムに最初に触れたのは、朝鮮初級学校3年のときだ。必修のクラブ活動があり、民族楽器部に入ったのだ。希望はチャンゴという打楽器だったが、先生から指示されたのはソヘグム。運命というべきか、その先生というのがソヘグムの名手、洪慶姫ホンギョヒであった。

「ソヘグムなど弾いたことのない自分になぜ？ 僕はチャンゴのほうがいいのに」と思ったが、従うしかなかった。

ソヘグムのように、弓を使って演奏する擦弦楽器は、楽器の中でも上達が難しいという。しかし高学年の先輩たちがソヘグムを楽しく弾いている姿がとても印象的で、早く自分も上手になりたいと思ひ、見よう見まねで練習するうちに、間もなく合奏曲の最初の部分を弾けるようになる。その修得の速さには洪も驚いたという。

ソヘグムの演奏がおもしろくなった河は、もともと音楽が大好きなこともあって、「もつと練習して有名な演奏家になりたい」と思うようになる。

ときどき在日の子どもや日本人女性にソヘグムを教えている。この日は韓流ドラマのファンでソヘグムに興味を持った主婦が生徒





ライバルとの切磋琢磨せつさくたくまもあり、めきめきと腕を上げ、コンクールでソロ演奏、さらに1位2位を争うレベルにまでなった。中学生になると、2歳上に尹慧瓊ユン、ヘギョンというコンクール優勝経験をもつスタープレーヤーがいたことも目標になる。彼女はのちに河の妻になるのだが。

高校時代には、ソヘグムの本場、北朝鮮に短期留学を果たす。入学したのは平壤音楽舞蹈大学通信教育学部。通信教育とは留学の意味だ。夏休み期間中だけの留学だが、全国の朝鮮高級学校の生徒がオーディションを受け、パスした生徒だけが留学を許される。そんな中、河は3年連続で留学した。大学ではソヘグム漬けの毎日だった。講師の実技指導はもちろん勉強になったが、ソヘグムが生まれた歴史を目で見て感じられたことは収穫だった。

ソヘグムの歴史は古くないが、ルーツを辿ると紀元前に行き着く。今の中国北部に住んでいた遊牧民族「奚」が使用していた2弦の楽器で、唐代に中国に伝わり、のちに「二胡」となる。朝鮮半島へは約1000年前、つまり高麗朝の中期に北宋から伝来し、「奚琴」となり、いまでも韓国で演奏されている。ソヘグムは、サイズ的にはヘグムと変わらないが、韓国にいるヘグム奏者が演奏できないほど違う楽器に改造されている。

河によれば、ヘグムの改造プロジェクトが本格的に行われたのは1960〜70年代、北朝鮮の経済が豊かだった頃である。当時は楽器もソ連の影響を受けることが多く、ヘグムをクラシックの楽器に匹敵するようなものに改造したい、オーケストラと一緒に演奏できるようにする楽器にしたい、という気運に満ちていた。

2本だった弦を、チェロやヴァイオリンのように4本に変更し、ボディ内に「魂柱」が加えられ、表面に「f字孔」様の孔が刻まれた。魂柱はボディの表板と裏板をつなげる棒で、音を裏板にも伝え、



楽器本体に響かせ、ボディの孔から音が出るように工夫されている。

そういう狙いで改造された背景もあつてのことだろう、朝鮮大学（音楽科）在学中、こんなことを言われた。

「壊れたヴァイオリンのような音ですね」

高校3年のとき、在日朝鮮学生中央芸術競演大会ソヘグム独奏部門で金賞を受賞し、当時はプロを目指していた頃だったので、悔しくてたまらなかつた。自分の技量の足りなさを思い知らされる言葉だつた。その悔しさをバネに河は、より良い音を追求して一段と厳しい練習を自らに課していく。その途上で心に決めたことがあつた。

「西洋のヴァイオリンにも東洋の二胡にも出せない『第三の音』があるはず。それを出したい」

大学を卒業後、河は在日コリアンのアーティスト集団「金剛山歌劇団」に10年間所属している。歌舞踊、楽器の3つのパートからなる70人のメンバーが観光バス2台に分乗、8トントラックに機材を積み全国のコンサート会場を回つた。音響、照明などの専門スタッフとともに、所属アーティストたち自身も会場設営を分担した。河は音響を担当することが多かつたが、演奏活動の傍ら、企画書を書いて、コンサートの売り込みをする営業も率先して行つた。年間約60公演。日本以外でも北朝鮮、韓国、アメリカなどでもコンサートを行つた。自宅に帰ると季節が変わつていることもあつた。

たくさんの方が親しめるソヘグムの普及版を試作

いつも会場は一杯で嬉しかったが、河は満足していなかつた。同胞に加えて、日本人やそれ以外の



ソヘダムは大きさと音域により、小^{ソヘ}奚^{ダム}琴、
中^{ソヘ}奚^{ダム}琴、大^{ソヘ}奚^{ダム}琴、低^{ソヘ}奚^{ダム}琴の4種がある



地元三軒茶屋の路地裏で
妻の尹慧瓊と2ショット。
2歳上の彼女はソヘグム
が抜群に巧く、中学時代
から憧れの存在だった



中国の木工職人に依頼してつくってもらった普及版ソヘグムの試作品。これ以外にも中国の楽器職人に発注している

人にもっとソヘグムを知ってほしかったからだ。その方法として考えたのが、ソヘグムに親しむ中でファンを増やすことだ。ルーツは同じなのに、二胡はテレビやラジオからもよく流れてくるし、全国展開の音楽教室のコースに入っている。

河はソヘグムに触れて、弾いてもらえば魅力は伝わるはずだと考えた。ただ、ソヘグムの価格は変動が激しく、安定的に入手できない状況にある。10万円前後のソヘグムをいつでも入手できるようになれば……。そこで河は普及版ソヘグムの開発をしようと決断する。2010年頃のことである。



しかし資金がなかった。プロジェクトに着手できないまま時は過ぎた。そんなとき、(助)韓哲文化財団からの助成が決まり、ようやく普及版づくりが緒に就いた。

河が抱くソヘグムの製作、普及の夢に興味を持つてくれる人たちがいた。楽器店のオーナー、三味線職人、中国・南京に木材工場を持つ人の3人で、以前から琉球楽器の復元作業などに携わるといった貴重な活動をしている人たちだった。その3人とともに「ソヘグム製作プロジェクトチーム」を立ち上げた。

南京の工場では、ギターや三味線をつくっており、そこでソヘグムを試作してもらった。それとは別に上海にいるヴァイオリン職人にも直接会いに行きソヘグムの試作を依頼した。

それぞれに対して手直しのオーダーを出し、それをまた送ってもらってチェック、改良点の提案……という作業を繰り返ししている。すべて手作業なので時間がかかるのだが、すでに試作品は3点ができている。かなりイメージに近づいてきており、2年以内にはひとつの完成型ができるだろうという。

聴く人の人生に寄り添う、心豊かな演奏を

ソヘグムを知ってもらうためには、地道なコンサート、ライブ活動も継続する必要がある。とにかく演奏を聴いてもらってファンを増やしたい。だから河は頼まれれば、いろいろなところに足を運び演奏をする。

震災から2年たった夏、思い出深いコンサートがあった。場所は宮城県気仙沼市けせんぬま。知人からの誘い

だった。最初は60人ほどが集まるだろうかというニュアンスだった。知人は懸命にコンサートの告知をしてくれた。しかし当日になっても「ごめん、何人集まるかわからないんだ。100人かもしれない」と不安そうだった。河はそれでもいいと思っていた。

しかし開場前になると、目を疑うほどの人が会場を目指して歩いてくるのが見えた。人波は途切れず、やがてロビーは一杯になり、「開場を早めて」という声が上がりが始めた。

〈思いはつながるんだな〉

そう思つて、河は胸が熱くなった。

演奏を始めると、いままで感じたことのない聴衆からの強い気持ちが伝わってきた。被災して重いものを抱えている400人が静かに聴き入る。河は聴衆の中に吸い込まれそうな感覚をおぼえた。

「誰が演奏者で、誰が聴衆なのか、わからない状況でしたね。ここに集まった人たちが音楽を通して気持ちを分かち合っていた。その場に一緒にいられることに大事な価値があるような気がしました。得がたい体験でした」

前記した、ヴァイオリンにも二胡にも出せない『第三の音』とは、もしかしたら、この気仙沼で奏でた音だったのかもしれない。

河は最近、ある確信を得たという。

「ひたすらテクニクを磨いて、いい音を出すことに執着しても、単調で薄っぺらい音しか出ないんですね。生きてきた中で得たいろいろな経験、たとえそれが嬉しいことばかりでなく、辛かったり悲しかったりしたことで、すべて音の彩りになったり、深みになって表れるんです」

ソヘグムは人生そのものなのである。

(文中敬称略)

最近イスラエルでコンサートをしたら、
ヴァイオリニストも興味を持ってくれた。
いろいろな国で演奏してみたいと言う



演劇交流で日韓の「もどかしさ」をほぐす

青木鉄仁

日韓演劇交流センター専門委員
俳優（劇団青年座）・翻訳家

人はどう生きていくのだろうか？

演劇が描き出す普遍的なテーマに、

国や民族の違いはほとんど意味がない。

感動と共感の中で、日韓演劇交流センターが発足。

人と人がじっくり向き合うステージで、

日本と韓国の新しい信頼関係が育っている

文 村尾国士

写真 菊地健志



184センチの長身に日本人離れしたイケメン、おまけに東京大学法学部卒。「天は二物を与えず」というが、二物も三物も与えられているのが俳優・青木鉄仁である。まずは「なぜ俳優に？」と尋ねてみた。

「東大の文1に入学したんですが、3年次の学部を選択するときに迷ったんです。文学や語学の研究も考えましたが、将来、ひとつの職業に縛られ、それしかできなくなることが怖かったですよね。今までやっていないことをやってみたいと思いました」

言葉を選びながら穏やかに語る口調に、東大卒の趣が漂う。法学部に進んだ青木青年は、ある劇団の俳優養成所に通い始めた。それまで演劇にはまったく無縁だったが、養成所で2度目の舞台に立ったとき、「客席と舞台の自分の呼吸が一体になっているという感覚を得ました。以来、病みつきに(笑)」。本格的な舞台俳優をめざし、主な劇団の研究生公演を見て回った。青木が惹かれたのは、俳優座や文学座など老舗の大劇団ではなく、中堅の劇団青年座だった。俳優座の準劇団員たちが「創作劇の上演」を旗印に結成したのが青年座。俳優の西田敏行や、かつては竹中直人らを擁し熱気に満ちていた。2年間の研究生を経て1993年入団、同年に舞台デビューした。

ここまで韓国との接点ほうがえないが、はるか遠くに根つこらしきものがある。

「幼稚園の頃、地図を見ると日本のすぐ隣に韓国と北朝鮮という国があるのに、テレビの話題には全然出てこない。どうして、と父親に聞いたんです。もとはひとつだった国が分断され、対立していると教えられました」

幼稚園児の脳裏に「変わった国だなあ」という印象が残った。中学、高校と長ずるにつれ、金大中拉致事件、朴正熙大統領暗殺事件などが報じられ、韓国は「怖い国」のイメージに変わっていった。



青木鉄仁



あおき・てつじん◎1967年生まれ。東京大学法学部卒業。93年劇団青年座入団、演技部に所属。2007年より1年間、文化庁新進芸術家海外留学派遣員として韓国に滞在。日韓の舞台に出演するほか、韓国劇の翻訳、日本での上演などを手がける

その韓国に関心を抱き始めたのは俳優になつてからだつた。

「林権澤監督の映画『風の丘を越えて』を観て感動しました。地味だけど、こんな面白い映画を作る国なんだと認識が変わり、さらに決定的だつたのが『シュリ』。韓国の文化的レベルの高さに驚きましたね」

パンソリの旅芸人を描いた『風の丘を越えて』西便制^{ソッピョシエ}は1993年公開、韓国の観客動員数新記録を作つた。その記録を大幅に更新したのが99年の『シュリ』。南北対立を背景にした男女の悲恋がテーマで、日本でも大ヒットし韓流ブームのさきがけとなつた。韓国が国をあげて文化産業支援に取り組んできた成果でもある。青年座の舞台を中心に映画やテレビにも出演していた青木のなかに「韓国で勉強したい」という思いがつのつてきた。

アジア最大の演劇街・大学路での日々

2006年9月、青木は青年座を休団し、韓国の延世大学^{ヨンセ}付属韓国語学堂に語学留学した。ほとんどゼロからのスタートだったが、半年間猛勉強に明け暮れた。その努力が実り、文化庁新進芸術家海外留学派遣員に選ばれた青木は、07年11月、改めて韓国に渡つた。1年間の派遣員生活は充実したもとなつた。ソウル市内で賄い^{まか}つきの下宿、ごく自然に韓国の人と暮らしの只中^{ただなか}に入り込んだ。

「初めて韓国へ行った頃は、私のなかに『怖い国』というイメージがまだ残っていました。全然そうじゃないということが、実際に生活してみてもわかりました。また日本では韓国イコール反日とらえられがちですが、一般の人はすごく親日的です。これも行ってみないとわからない。演劇は人と人



が向き合うことから始まりますが、同じことが日韓関係にもいえるというのを実感しましたね」

その演劇、派遣先の劇団サヌリムで研修を積む一方、青木はソウル中心部の大学路^{テハシ}へ通った。かつてソウル大学があつたことから名づけられた大学路は、アジア最大の演劇街である。07年当時で100館近く、現在では正式登録された劇場だけでも150を数える。同じく演劇街と呼ばれる東京・下北沢の11館と比べるとケタ違いだ。

小劇場が中心の大学路では連日、創作劇や翻訳劇、ミュージカルなどが上演される。韓国全土の多くの大学には演劇学部があり、卒業生たちがここでしごきを削る。映画界のスターが生まれる例も少なくない。当然ながらレベルも高い。大学路の中心的な劇場がアルコ劇場だが、派遣期間の半ば、青木はその舞台に立った。さらに、韓国国立大劇場の現代劇百周年記念公演にも出演した。日本人俳優は青木だけ、もちろん韓国語での出演である。精進ふりがうかがえるが、青木にとって最大の収穫は気鋭の女性劇作家・高蓮玉^{コヨノク}作品との出会いだつた。

「劇団サヌリムで上演された『月^{つき}が水面^{みなも}に忍び^{しの}来る^くがごとく』を観て、衝撃^{しうげき}を受けました。韓国であれ日本であれ、どこでも起こりうる殺人事件をめぐる、男女の愛とは何か、真実とは何かを強烈に問いかける舞台でした。韓国演劇の今を伝える第一弾として、ぜひともこの作品を日本で上演したいと思いました」

韓国劇を企画・製作・翻訳・出演で上演

海外派遣から帰国した青木は、青年座スタジオ公演として『月が水面に忍び来るがごとく』の上演



青年座稽古場にて。官僚や
弁護士になった母校の開成
高校・東京大学同期生たち
が「舞台を観に来てくれる
のがうれしい」





研究助成を受けた韓国劇の企画・翻訳を一人で行い、東京のコリアンタウンで公演のチラシを配って歩いた



公演中に作者の高蓮玉氏（中央）を韓国から招き、アフタートーク。司会は日韓演劇交流センター大笹吉雄氏（右）。(写真提供 青木鉄仁)



を企画した。企画だけではなく、製作・翻訳・出演までこなす1人4役である。「ひとつの職業に縛られたくない」という20歳の夢を実現したわけだ。翻訳者として名乗ったのが「浮島わたる」。島から島へ渡る。日本と韓国をつなぐ思いが込められていた。

公演は10年10月中旬の1週間、東京・渋谷区の青年座劇場で開かれた。青木の熱意に賛同した先輩・後輩の劇団員たちがキャストやスタッフ（演出・齊藤理恵子）として参加してくれた。150席が見下ろす形の舞台で、めまぐるしいほどの場面展開のうちに、愛し合う男女の信頼関係が変化していく。日本人の観客たちは「とくに韓国の演劇というのではなく、人間の普遍的なテーマを描いたものとして衝撃を受けた」という感想を寄せた。

公演2日目には、韓国から招いた作者の高蓮玉を囲むアフタートークも行われ、演劇評論家で日韓演劇交流センター会長の大笹吉雄おほささよしおが司会を務めた。感動した観客たちから作者への質問も活発で、高は「実際にあつた殺人事件にヒントを得て脚本を書いた。人はどうすれば救われるのかということを描きたかつた」などと誠実に答えた。ちなみに高は01年のデビュー、新進ながら数々の演劇賞を受けた注目の劇作家。青年座スタジオ公演後の東洋経済日報10年11月19日付で、インタビューにこう答えている。

「最近の作家は、私も含め、国や民族よりも、より身近な問題に焦点を当てて書くようになってきている。現代はヒーロー不在、人生の目的も見出しにくい。そういう中で人はどう生きるか、今後も見つめていきたい」

青木がめざしたところもそこにあつた。

「韓国人だから日本人だからというのではなく、みんな今を生きる同じ人間なんだよということをお



公演が行われた青年座劇場。150の客席が2面から見下ろす舞台は可動式で、密室劇の緊張感に満ちていた。(53ページ共、写真提供青木鉄仁)



青木鉄仁



出演者7名は劇団の先輩や後輩。
青木は主役夫婦を取り調べる検事
役を演じた。「稽古が進むにつれ、
戯曲のパワーを実感」したという

客さんに訴えたかったし、わかってもらえたとはいえず」

こうして公演は好評裡に終わったが、実は厄介な問題が残っていた。スタジオ公演は劇団員ならだれでも企画できるが、その代わりに出演料や舞台にかかる費用などいっさいの経済的負担を企画者が負うことになっている。つまり、チケット収入で足りない分は、青木個人が負担しなければならない。覚悟はしていたものの頭をかかえる青木に、スタッフの一人が(財韓哲文化財団(当時)の研究助成募集を伝える新聞を見せてくれた。

「公演が終わった直後で、無理かなと思いましたが、申請すると認めていただきました。助かると同時に、これからも韓国の演劇を日本に紹介していきたいという思いを後押ししてもらい、本当に感謝しています」

「もどかしさ」解消に日韓の演劇交流を

その後も青木は日韓の往来を繰り返しており、インタビューも日本への一時帰国中の慌ただしい日程のなかで行った。現在、青木は日韓演劇交流センター専門委員を務めている。

この交流センターは2000年、日本の7つの演劇団体を中心として発足、その2年後には韓国側で韓日演劇交流協議会が設立され、双方の共催による交流が始まった。主な活動として、日韓の優秀な戯曲を翻訳し、交互に隔年で紹介しあうドラマリーディングを開催している。また、それに合わせた韓国現代戯曲集の出版も行っている。

専門委員として青木は、イベントの通訳や韓国演劇の最新情報を伝えるほか、浮島わたるの名でド



青木鉄仁



青年座代表の森正敏氏（日韓演劇交流センター前事務局長）と。
「青木鉄仁は無類の勉強家。韓国語上達に驚いた」と森氏

ラマリーディングの翻訳も手がけている。その青木を突き動かしているのは「日韓の現状に対するもどかしさ」だという。

「たとえば日本でヘイトスピーチが起きたり、韓国の報道では日本批判が繰り返されています。両方の国を知る立場から見れば、無知や無理解がもたれている。そういう現状がもどかしくてしかたないんです。日韓関係は根が深くすぐには解決しないでしょうが、演劇交流を通して、私なりに少しでもそのもどかしさをときほぐしたいんです」

どこまでも穏やかな口調だが、強靱きょうじんな意思が垣間かいま見える。短期間で言葉をマスターし、俳優ばかりか翻訳家にまでなったこの人なら、やがて大きな仕事をするだろうと想わせるものがある。最後に、青木の演劇観と日韓観を合わせて表した文章を引用したい。

『演劇というものは実に不便なもので実際に人と人がその場に居合わせなければ成り立たないものである。しかし、その不便さは時としてお互いをじっくり向き合わせることににおいては最大限の効果を発揮することにもなる。日本と韓国がお互いにじっくりと向き合い、そのことが少しでも信頼関係につながっていければと願っている』

(文中敬称略)

「韓国演劇はレベルが高いが、日本での上演はまだわずか。今後も俳優や翻訳者として韓国劇を紹介していきたい」



韓国映画史を俯瞰ふかんできるライブラリーを

川村 湊

法政大学国際文化学部教授

韓流映画『シユリ』や『JSA』の大ヒットは、日本でも記憶に新しい。しかし50〜60年代の社会派リアリズムや、80年代のニュー・シネマなどにも名品がたくさんある。川村は10年前からビデオやDVDを徹底収集。資料も広く涉猟しやうりやうし、日本で唯一のコリアン・シネセンター設立を目指している。

文 〓 歌代 幸子

写真 〓 菊地 健志



映画の歴史を刻むソウルの坂道

ソウルの中心部から少しはずれた城北区安岩洞ソンブククアナムドンに、「アリラン・コゲ」と呼ばれる坂道がある。韓国映画を代表する名作『アリラン』のロケ地として知られるその一帯が洒落た「シネマ通り」となり、坂の頂上には「アリラン・シネ・センター」ができるという。そんな噂を耳にしたのは、2004年春のことだった。

10数年、法政大学に勤めた川村湊は2年間のサブティカル（研究休暇）を与えられ、2003年4月からソウルで暮らしていた。城北区で借りたアパートのすぐ近くにアリラン坂があり、川村はさっそくその通りを訪ねてみた。

地下鉄の駅を出て、緩やかに上っていく道をゆくと、ほどなく「アリラン坂のシネマ通り」へ。何気なく足もとを見ると、三角形のレンガを敷き詰めた歩道のところどころに浮き彫りのブロンズ板が埋め込まれていた。

着物姿の老いた夫婦が肩寄せあうのは『東京物語』、荒野に群れなす男たちは『七人の侍』……さらに『ベン・ハー』『理由なき反抗』『ゴッドファーザー』『スター・ウォーズ』『E. T.』『タイタニック』など、上り坂の右側には外国映画の名場面が青銅に刻まれている。そして、歩道の左側には『アリラン』はじめ『暁の頃』『愛を求めて』『聾啞の三龍』『主なき渡し船』……と、韓国映画のポスターを描いたブロンズ板が時代順に続く。

もはやフィルムも残っていない幻の名作から現代にいたる約80年間の作品が73本。さながら韓国映



かわむら・みなと◎1951年、北海道生まれ。法政大学法学部政治学科卒。80年『異様なものをめぐって——徒然草論』で群像新人文学賞受賞。日本の古典、近現代文学の批評活動を行う傍ら、82年、韓国の東亜大学校へ日本語教師として赴任。植民地文学、韓国現代文学、日韓比較民俗学などの研究を手がける。2000年、法政大学国際文化学部教授に就任。主な著書に『韓国・朝鮮・在日を読む』（インパクト出版会）、『アリラン坂のシネマ通り——韓国映画史を歩く』（集英社）など多数

画史をたどる想いで「シネマ通り」を歩きながら、川村はこう思い立つ。

「この映画を全部見よう」

もつとも韓国では、解放前後には映画フィルムの保存など考えることなく、植民地支配や南北分断、朝鮮戦争の戦火によって名作のフィルムも消滅してしまった。現存する最古の韓国映画は1946年に崔寅奎監督チュインギが手がけた『自由万歳』とされ、50〜70年代には「駄作」として棄すてられたものも多かったという。

川村はソウル滞在中に旧作を上映する映画館や韓国文化院での上映会、レンタルビデオ店へ足繁しげく通う。状態はひどくても廉価れんかで買える中古ビデオやDVD化された作品を探しては手に入れる。日本へ帰国後も年に何度か韓国を訪れては、こつこつ収集してきた。

韓国語を学ぶため、釜山プサンで映画館通い

そもそも韓国映画との出会いは、80年代にさかのぼる。当時、川村は4年ほど勤めた会社を辞め、失業保険をもらいながら文芸批評の原稿を細々と書いていた。その頃、韓国で日本語教師をしていた鄭大均ていたいきん（首都大学東京都市教養学部特任教授）が来日し、友人の誘いで会いに行くと、「韓国へ来ませんか。日本人の日本語教師を募集しているところはたくさんありますよ」と言われる。日本にいても評論家で身を立てることは厳しく、妻子を養う不安もつのる。渡りに船と、手を挙げた。

それから4年間にわたり、釜山の東亜大学校で日本語教師を務めたのである。

「最初は日本語を話せばいいという口約束で、『大丈夫です!』と受けたものの、日本語がわから



ぬ学生相手では韓国語ができないと通じない。韓国語を勉強しようと思ひ、〃ならば好きな映画を観よう〃と。それはものすごく甘い考えだと後にわかりましたけど……」

そう苦笑する川村は、当時の韓国映画事情を振り返る。

釜山には植民地時代に日本人がつくった古びた映画館街が残っており、早朝割引で2本立て500ウォンと格安で入れる映画館があった。朝から授業がない日は直行し、上映されているものを片端から観ていた。一年間に100本以上と数を重ねると、少しは言葉も理解でき、監督の良し悪しもわかってくる。韓国映画の観賞日記もつけ始めた。

「ところが学生たちは、僕が映画を観てきたと話すと、『私たちは〃国産映画〃なんて観ません』と言う。学生が観るのはハリウッド映画やインテリが好むような洋画で、韓国映画を観るのは労働者や教養のない人だけ。『先生は、本当に面白いと思つて観てるんですか?』とまで言われて。確かにくだらない作品もたくさんあつたけれど、〃国産映画〃を評する学生の言葉はどうも不満でした」

韓国の映画館でもハリウッドなど外国映画はヒットしたが、その輸入権を獲得するには国産映画を作らなければいけないという法律制度があり、質を落としても量産されていた。政治的な検閲も厳しく、自由に作品を生み出せない時代があつたが、80年代後半頃から韓国映画も大きく変容していく。国内の大学に映画学科が新設され、ハリウッドへ映画製作の勉強のため留学する学生も出てきた。

そうした潮流にあつて注目されたのが、韓国映画のニュー・ウェーブ（ヌーヴェル・ヴァーグ）を代表する映画作家、李長鎬、裴昶浩、林権澤といった監督たちである。80年代の「ニュー・シネマ」の中でも、川村が評価するのは李長鎬の『風吹く良き日』だ。

3人の若者たちが田舎から高度経済成長に沸くソウルへと上京する。中華料理店の出前持ち、理髪





外堀公園の緑と靖国神社を見晴らす法政大学・市ヶ谷キャンパスのポアンナード・タワー。20階に研究室があり、学生たちともここで映画について語らう

店の助手、旅館の下働きと、それぞれ都会で暮らすなかで、夢や希望を抱きながらもやがて挫折ざせつしていく。三者三様の物語が、風の吹き抜ける都会を舞台に鮮烈に描かれる。

「これはソウルの下町の青春を描いた李長鎬の初期の名作です。やはり良い映画というのは社会の底辺に目を据すえて、リアルに、しかもどこかに優しさをもって描かれている。そういう映画が好きでしたね」

自身もまた、かつては映画の世界を志した若き日々があった。

北海道の網走で生まれ育った川村は、幼少の頃から映画に親しんでいたという。正月の最大の娯楽といえば、網走の映画館で観る日活映画。5歳上の姉は石原裕次郎のファンで、小学校へ入る前から姉に連れられてよく見に行った。北海道では封切りから1年遅れで上映されることが多かったが、地元では『最新』映画を待つ客で立ち見の盛況だった。

高校を卒業すると上京して、予備校に通いながら浪人生活を送る。その1年間に100本以上の映画を観たという。

「東映の『仁義なき戦い』からエイゼンシュテインの『戦艦ポチョムキン』まで、網走では観られないような作品をいくらかでも観られる。もう嬉しくて名画座にも通いつめました」

実は大学へ進むときに「映画学科」を目指していたと明かす。だが、映画好きが高じて入試勉強もおろそかになり、夢は果たせずつ終わる。法政大時代も映画は欠かさず観ていたが、その頃から日本文学に傾倒していった。

卒業後はオイル・ショックの就職難で、転々と仕事を変わっていく。水産業界の業界紙記者に始まり、オリエンタル雑貨を扱う輸入販売店、教育雑誌の出版社、横浜の魚市場でも働き、その間も日本



文学の研究は続けていた。80年には『異様なるものをめぐって―徒然草論』で群像新人文学賞を受賞。いよいよ筆一本で生きようと決意するが、生活は立ち行かず、日本語教師の話を引き受けたのである。

韓国のさまざまな文化に関心を深める

82年3月、川村は小さなリユックに自分の荷物とオモチャを詰めた幼い息子二人と妻を連れて、釜山の金海国際空港へ降り立つ。街中のアパートに着くと、布団二組だけを買って新たな生活が始まった。教えることも初めてだけに戸惑うことは多かったが、折しも日本語ブームに沸く韓国で自身のテーマも自在に広がったという。

「大学の図書館へ行くと、片隅に古い日本語の本があった。それは植民地時代に韓国人が日本名で書いた小説で、『親日文学』として隠蔽されていたもの。そうした植民地文学を調べ始めると、さらに民族学、芸能など文化へと広がり、映画とも結びついて……」

朝鮮映画の傑作とされる『アリラン』は植民地時代に製作され、フィルムも現存しない『幻の映画』。当時の作品の数々は日本映画の影響を強く受け、解放後もしばらく続いた。やがて50年代から60年代にかけて、韓国でも社会性の濃い作品が作られていく。70年代には李長鎬、林権澤などの監督が登場し、80年代の「ニュー・シネマ」の潮流につながった。

「いわば原寸大の韓国社会が描かれている。ことに底辺層で生きている人たちの現実が見えてくるのです」

回想や郷愁が映画のテーマとなってきたのは、90年代に入ってからのこと。なかでも川村の心に残



韓国へ行くたびに映画館に通いつめ、旧作から新作まで観てきた。パンフレットやポスターの収集も欠かせない



近年は中国吉林省延辺朝鮮族自治州へ出かける。中国などで製作された北朝鮮映画の海賊版も店頭に並んでいる



法政大学の研究室にはビデオやDVDだけを収めた本棚があり、韓国でも稀少なフィルム映像から日本でも話題となった作品まで揃う



2013年11月、明治学院大学で開催された国際シンポジウム。若き日に日本で学び、朝鮮近代文学の“父”と称された李光洙^{イファンソ}について講演した



るのは『ペーパーミント・キャンデー』だった。

純真な工場労働者の若者とハツカ鉛工場の女性工員が抱く淡い恋心。だが、80年5月に起きた光州事件によって、その初恋の女性と別れ、兵役に就いた若者の人生は暗転していく。除隊後、警察官から実業の世界に転じた彼はバブル景気で商売を拡大するが、やがて家庭は壊れ、同業者の背信によって一文無しとなり…… 99年5月、20年ぶりに工業団地の仲間たちと集った彼は、河原でバーベキューをし、カラオケで歌い踊る仲間たちのなかで、一人、鉄道の高架橋に上がる。驀進してくる列車を前に両手を挙げると、声を限りに叫ぶのだった。「(昔に) 帰りたい!」と。

「韓国社会の激動の現代史を背景に、一人の男から失われたものを痛切に描いた作品。当時の映画にはそうした社会派的リアリズムが根底にあり、韓国では手を変え、品を変え、その時々青春や人生模様を描きあげた映画が出てきたのです」

90年代後半には、中流階級の恋愛を描いた『8月のクリスマス』が公開され、日本では『韓流』映画ブームの原点とされる。さらに『シユリ』に続き、2000年代には『JSA』『シルミド』『ブラザーフッド』など韓国映画史上最高の観客動員数を更新し、日本でも大ヒットをとばす作品が次々に登場した。

こうして韓国映画の変遷を知るほどに、川村のなかでは一つの夢がふくらんでいく。

「韓国でも映画に関する資料は少なく、ライブラリーもない。まして北朝鮮の映画史や在日韓国人の映像作家、在日問題をテーマにした映画の歴史的研究をする人もいなかったため、そのための資料をさちつと集めたいと思ったのです」


川村は(財)韓哲文化財団(当時)の助成金をもとに、ソウルや釜山で主要な作品を観たり、ビデオや

DVDなどを収集している。さらに北朝鮮映画については中国吉林省の延辺朝鮮族自治州^{エンペン}へ行けば、海賊版などのビデオが安価で手に入るともいわれ、現地へ足を運んだ。いずれは北朝鮮への調査旅行も目指しているという。

これまで収集したビデオやDVDなどの資料は800点以上。法政大学の研究室には、韓国のアニメやホラー、北朝鮮の怪獣映画まで稀少な作品も揃い、収めきれず自宅にも山積みらしい。新作も次々出るので「観るだけで忙しい」と目を細める川村。それでもいずれはリストをつけて公開し、観たい人が利用できるライブラリーにしたいと願っている。

かつて〈アリラン坂のシネマ通り〉を歩いたように、この日本にも、訪れる人たちがコリアン・シネマを楽しめる〈シネ・センター〉をつくれたら……と。

(文中敬称略)



「韓国、北朝鮮、在日を
テーマにした作品すべて
を集めるのが目標」とい
う川村は、フィルム・
アーカイブスの夢を描く

遠くて近い日韓の茶文化を比較研究

西垣安比古

京都大学大学院 人間・環境学研究科教授

朝鮮半島の古い住宅を研究テーマに据えていた西垣は、たまたま韓国の煎茶文化と出会う。18世紀の儒学者たちは、漢詩を交歓しながら茶会を楽しんでいた。同じ頃、日本の文人にも煎茶が流行していたことは興味深い。交流の軌跡を掘り起こす作業が進んでいる

文 〓 千葉望
写真 〓 渡辺誠



日本古代の住宅から朝鮮住宅研究へ

西垣^{にしがき}安比古^{やすひこ}が朝鮮半島との縁を結んだのは、それほど古いことではない。京都大学工学部の博士課程で建築を研究していた西垣は、自分のテーマを「日本古代の住宅」に定めていた。博士課程に進んだまではよかったが、そこで困ったことが起きた。なかなかよい就職先がないのである。恩師が考えてくれた道が「留学」であった。

「そこで当時京大に来ていた韓国人留学生に、韓国へ連れていつてもらいました。日本古代の住宅を研究するなら韓国の古い住宅の知識があったほうがいい、という程度の考えです。ところが現地で建築を見てまわったところ、すごくおもしろかったです。韓国には1500年代以降の古い住宅がまだ山のように残っていました」

韓国へ留学して学びたい。その気持ちが高じた西垣はソウル大学へ行き、大学院建築学科の教授に受け入れてもらえるかどうか^{かたず}訊ねたところ、「どうぞ」という返答をもらった。韓国語を勉強したのはそれからだという。

西垣が留学した1983年頃は韓国人の気風もゆつたりとしており、日本からやってきた留学生に親切だった。古い家に住んでいる人たちは「どうぞ家の中も見ていってください」とオープンだったし、お茶や食事でもてなされ、「家に泊まっていけ」と引きとめられることもたびたびだった。建築だけではなく、韓国人の暮らしぶりや人間性に触れることができたことは、大きな収穫だった。

西垣は韓国と日本の住居には共通点が多いと言う。両国とも家には靴を脱いで上がる。座布団や布



西垣安比古



にしがき・やすひこ◎1949年生まれ。京都大学大学院博士課程研究指導認定退学。ソウル大学校大学院建築学科博士課程単位修得退学。現在京都大学大学院 人間・環境学研究科教授。著書に『朝鮮の「すまい」—その場所論的究明の試み』（中央公論美術出版）など。韓国の伝統住居や明恵上人修行の場に関する論文多数

団を使う。障子もある。建具は中国をルーツとし、発展の形は違うが共通点はいくつもあった。東南アジアにも高床の住居があるが、家の床下で豚を飼うなど、生活習慣には違いが多い。

最初は日本古代の住宅を研究する一助として行った韓国だったが、西垣は韓国の建築そのものがおもしろくなり、研究テーマを変えることになった。充実した楽しい留学生活を送り、恩師との交流も深まった（のちに恩師の子息が京大の西垣研究室へ1年間共同研究者として滞在するというおまけもついた）。

1987年に日本へ帰国し、近年は日本の高僧・明恵の研究を手がけていた。

「韓国では15世紀に高麗時代から続いた貴族（両班・勲旧派Ⅱフングパ）が崩壊し、新たに勢力を拡大した各地の地主層（士林派Ⅱサリムパ）との葛藤（かつとう）が起ります。そこで文化の中心が交代していったのです。当時の代表的儒者で文人でもあった李退溪（イテゲ）をはじめ、いろいろな人が自分の住まいに関する記録を残していました。それらの文献と書院などの遺構を通して、朝鮮の住まいに関する研究を著書にまとめて後、もともと関心があった日本古代・中世の住まいの研究も始めました。特に高山寺を開いた明恵上人（みょうえしやうじん）は自らの修行の場について集中的に文献を遺されていることを知り、その研究を進めました。そこにはよくお茶の話が出てきます。明恵上人は、お茶の『中興の祖』とも言えるのです」

明恵は新羅の海東華嚴宗（かいとうけげんしやう）（ヘドンファオムチョン）の開祖である義湘（ぎしやう）（ウイサン）を非常に尊敬していた。明恵が作らせた「華嚴宗祖師絵伝」は義湘がどのようにして中国に渡り、朝鮮に華嚴経をもたらしたかが絵物語として描かれている。朝鮮とお茶。明恵はそのどちらにも深い関心を持っていた人物だった。

もちろんそれだけで、西垣が朝鮮のお茶文化を研究しようと考えたわけではない。きっかけは思わ



ぬところからもたらされた。

18世紀に日韓で花開いた煎茶文化

2005年、西垣が所属する民族藝術学術学会の、朝鮮の茶文化を主題とする学会が、韓国ソウルにある国立中央博物館を会場として開催されることが決まった。基調講演の御鉢おぼちが西垣に回つてきた。

「そこで泥繩どろなわ式で、日本と韓国のお茶文化について論文を書いたのです」

日本と韓国のお茶文化には共通点もあれば違う点もある。日本のような抹茶の茶道は韓国にはないし、家元制度もない。だが18世紀には文人たちの間で煎茶が流行していたし、茶葉が手に入らない庶民は、自分たちで採取できる植物や葉草などを使う「代用茶」を楽しんでいた。文人は茶葉を何度も蒸しては乾燥させ、発酵を止めて固めた「団茶だんちゃ」を薬研やげんですり、それに自分で選んだ植物（たとえば竹の葉）を混ぜて、独自の風味や薬効を持った茶を作り出したりした。そうすること自体が「趣向」とされていたのである。

「おもしろいことに、18世紀には日本でも煎茶が流行していました。中心となったのはどちらも実学的傾向をもつ儒学者です。同じ時期に同じように文人たちが煎茶を楽しんでいたということが、私にはとても興味深く思えました」

また、どちらの文人も建築の知識を持っていた。たとえば日本では18世紀に、障子の中にガラスをはめ込み、外の景色を楽しみながら煎茶を飲むという風俗が生まれた。初期には大名屋敷に使われた



研究室の打ち合わせテーブルの上には書棚からあふれた本が並んでいる。研究分野が建築、都市から茶道史まで広がったため、文献はさらに増えた



程度だったが、時代が下るにつれて、一般人の生活にもガラスが取り入れられるようになった。使われるガラスはオランダで作られたものが直接あるいは中国経由で長崎を通じて入ってきた。

「従来の茶道は利休の茶室に見られるように、閉じていく文化です。光は取り入れるけれども、景色を見ながら楽しむわけではない。ところが煎茶は明るい光と景色を楽しみながら、議論を闘わせ、お茶を飲もうという文化。西欧でいう啓蒙主義に近い動きがあったと考えられます。ルネッサンスでは教会のステンドグラスみたいなものをやめて、透明なガラス窓にしようという動きが起ります。それは近代化の一つの流れなのです」

韓国は18、19世紀、日本と同じく鎖国していたが、ありようはずいぶん違うという。日本のように長崎の出島を通じて交易が行われ、幕府がそれをコントロールしてさまざまな権益を握っていたのに比べ、韓国では非常に厳密な鎖国が行われていた。

「ただし、中国に対してのみ開かれていました。当時の朝鮮は西欧文化もすべて中国経由で受容していたのです。当時お茶を楽しんでいた人たちが透明ガラスを使った記録はありませんが、大きなガラス板の鏡を吊ってお茶の会をした記録は残っています。日本と韓国、両方が新しいものに触れていたんですね」

韓国には日本の茶道のような茶会記はないが、近年研究者が、煎茶で交流していた人々の手紙を収集し記録を掘り起こすことによつて、研究が進んでいる。朝鮮半島は日本よりも寒く、どこでも茶葉がとれるわけではない。お茶は高価なもので、楽しめる層は限られていた。日本で庶民にもお茶を飲む習慣があったのは、気候に恵まれていたためである。

「儒学者や僧などが主に煎茶を楽しんでいた韓国では、まず詩が大切でした。漢詩を作り、それを披



韓国留学やその後の幅広い交流もあり、韓国に友人知人の多い西垣。重要な行事に賓客として招かれることも。(85ページ共、写真提供 西垣安比古)



ギョンスンブクド、ヒョンジュ、ソウ、ソクワン
慶尚北道榮州市にある紹修書院（儒教を学ぶための学校
である韓国最初の書院）。文成公の廟の前で盥手を行う

露しあう。たとえば仲間の官吏が地方に赴任するのであれば、送別の宴を催し、彼を送る詩を作り、食事や酒を楽しんで、煎茶を飲むわけです」

煎茶の会は優雅なものだったのである。ある寺院で詩の会を催した際には、船に乗っていった。道中から楽しんでいなのだ。到着すると素晴らしい梅の花を觀賞し、詩をやり取りする。なんと文化的ではないか。

だがそんな優雅な文化が韓国ではすたれつつあった。最近経済発展し、富裕層が増えてくるにつれてようやくゆとりが生まれ、お茶の文化を復活させようという動きが生まれているという。

日韓研究者の論文を集めた本を企画

偶然のきっかけから朝鮮のお茶の文化を研究することになった西垣。助韓哲文化財団（当時）から助成金を得ると、さつそく何度か韓国に渡航してフィールドワークを開始した。韓国の研究者との交流も進み、新たな知見が次々に生まれている。近いうちに、日韓研究者の論文を取めた本を出版する計画で、その資金としても助成金が有効に活用されることになっている。

西垣の研究室には日本人のほか、韓国人の留学生も学んでいる。日常的な日韓交流が展開されているのだろう。

一方、京大の朝鮮文化研究は分厚いものではない。京大といえば戦前から支那学（中国学）が盛んで、一大学派をなしていたのに、現在に至るまで朝鮮半島との結びつきは薄いままだ。中国人留学生に次ぐほどの韓国人留学生が学んでいるにもかかわらず。



西垣安比古



京大吉田キャンパスの人間・環境学研究科棟入り口にて。
助成金を使った日韓茶道史の論文集の出版が当面の目標だ

「朝鮮語のクラスが設けられたのも最近のことです。専門の研究所ありません。最近では朝鮮半島に関する研究をしている教員が2コマずつ講義を持つ、半期のクラスが設けられるようになりましたが、学生の関心は高いのです。以前は受講者が100人程度だったのに、今は300人。講義をする教室を探すのに苦労しています」

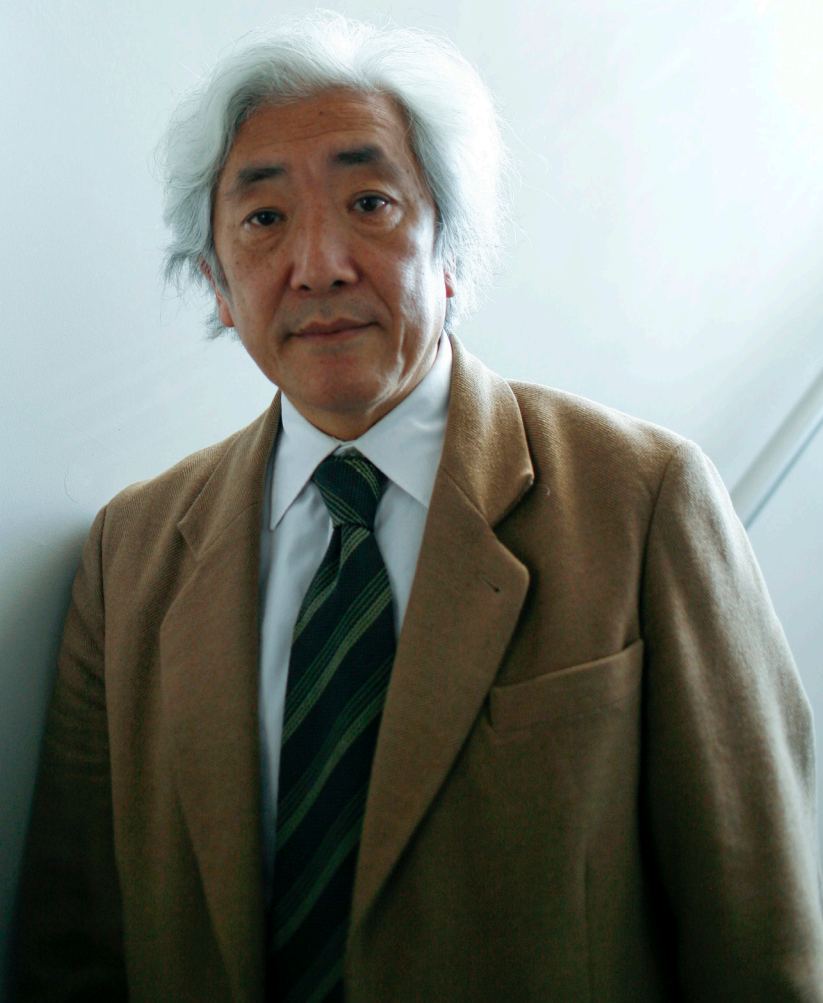
利休をはじめ日本の茶人は高麗の焼き物を高く評価し、大切に扱ってきた。現代でも茶人たちの人氣は高く、井戸茶碗を集めた美術展が開かれるほどである。これまで研究者の中では決して朝鮮美術の評価が高かったとはいえないが、それでも焼き物については例外的に評価が高かったのである。

「以前は美術品が中国のものか朝鮮半島のものか鑑定するのに、出来が良ければ中国、悪ければ朝鮮とするような、非常に乱暴なことも行われていました。それでもエヴィデンス（証拠）を大切にすべき研究者といえるのか、ということです」

嘆かわしいことだったが、交流が進み朝鮮半島への関心が高まると共に、そのような偏見もほぼ解消されている。朝鮮通信使が来日した際に、饗応する日本の文人たちと漢詩の交歓を楽しんでいた記録が残っている。韓国との共同研究により、当時の煎茶人・木村兼葭堂きむら けんかどうの書物が同じく茶を好んだ朝鮮の文人によって中国に紹介され、中国の文人の書物に収録されるというふうにも、深い交流へと発展していったことが明らかになっている。この研究は助成金によって出版する本にも収録されるという。西垣たちの日韓茶文化の研究は、隣国同士の心の交歓を掘り起こす作業ともいえるのである。

（文中敬称略）

京都市内の自宅は西垣自身の設計で、煎茶を楽しむ部屋もある。日韓の建築雑誌にも取り上げられた



土器から読み解く、韓半島と東北アジアの交流

古澤義久

長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室

「なんと端正なんだろう」

韓半島で出土した新石器時代の丸底土器に、

考古ホーイ・古澤は感嘆の声を上げた。

遡ること25000〜1万2000年前。日本では

縄文時代にあたる。当時の東北アジアには

すでに人と文化の行き来が始まっていたといつ。

胸躍る悠久の古代史探訪に、国境はない

文 高瀬 毅

写真 菊地健志



古代における交通の要衝・沓岐

こんもりとした丘陵地に、わらぶき屋根の家屋が点在していた。高床式たかどかしきの建物も見える。丘の上に立つと、遠くになだらかな山並みが連なり、緑の田畑が、丘の下からはるかかなたの山裾に向かつて広がっていた。遠くの里山では白い煙もたなびいている。なんと懐かしく、美しい風景だろう。思わずため息が出た。弥生時代の遺跡といわれる長崎県沓岐市の「原の辻遺跡」はらのつじ。史跡の国宝といわれる国の特別史跡に指定されている場所だった。

「ここは弥生時代の原風景が残る所といわれているんです」

そう言うのは、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室長の川道寛かわみひろしだ。

「南へ一海を渡ること千余里、名づけて瀚海かんかいという。一大国いたいくに至る。官をまた卑句ひくといひ副を卑奴母ひなも離りという。方三百里、竹林と叢林そうりんが多く三千ばかりの家あり、田地はあつても田を耕すもなお食するに足らず……」

『魏志』東夷伝倭人条、俗に『魏志倭人伝』の一節だ。一大国といっているのは現在の沓岐島いぎのしまのことである。いまから1800年近く前、魏の国の使いが、朝鮮半島の南端から対馬、沓岐の二つの島を経て九州北部の末盧国まろくにへと、飛び石づたいに倭国に渡ってきた。末盧国からさらに道は延びて、その先に卑弥呼ひみこのいた邪馬台国やまたいこくがあった。ただ、邪馬台国がどこにあったのか、末盧国から先はどういうルートで邪馬台国まで行ったのかはいまも不明だ。しかし、朝鮮半島から対馬、沓岐、末盧までは確かに使者が辿たどった道であつたことがわかっている。



古澤義久



ふるさわ・よしひさ◎1981年京都市生まれ。2004年九州大学文学部人文学科卒業。07年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程中退。07年長崎県教育庁学芸文化課勤務。10年から壱岐の長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室（文化財保護主事）勤務。韓半島新石器時代の土器を専門に研究

沓岐は、古代において朝鮮（韓）半島や中国大陸と倭（日本）とを結ぶ、重要な交易ルートの上であり、交通の要衝ようしゅうだった。原の辻遺跡は、沓岐の国都として栄えた場所だった。考古学者の森浩一（2013年没）によれば、「原の辻遺跡は大集落であり小都市といってもよいほどの規模がある。佐賀県の吉野ヶ里遺跡よしのがとくらべても甲乙がないほどである」（『倭人伝を読みなおす』）

その原の辻遺跡の丘を間近に望む田圃たんぼで、2013年10月中旬、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室の文化財保護主事、古澤義久ふるさわよしひさは、発掘調査のための作業に取り掛かっていた。

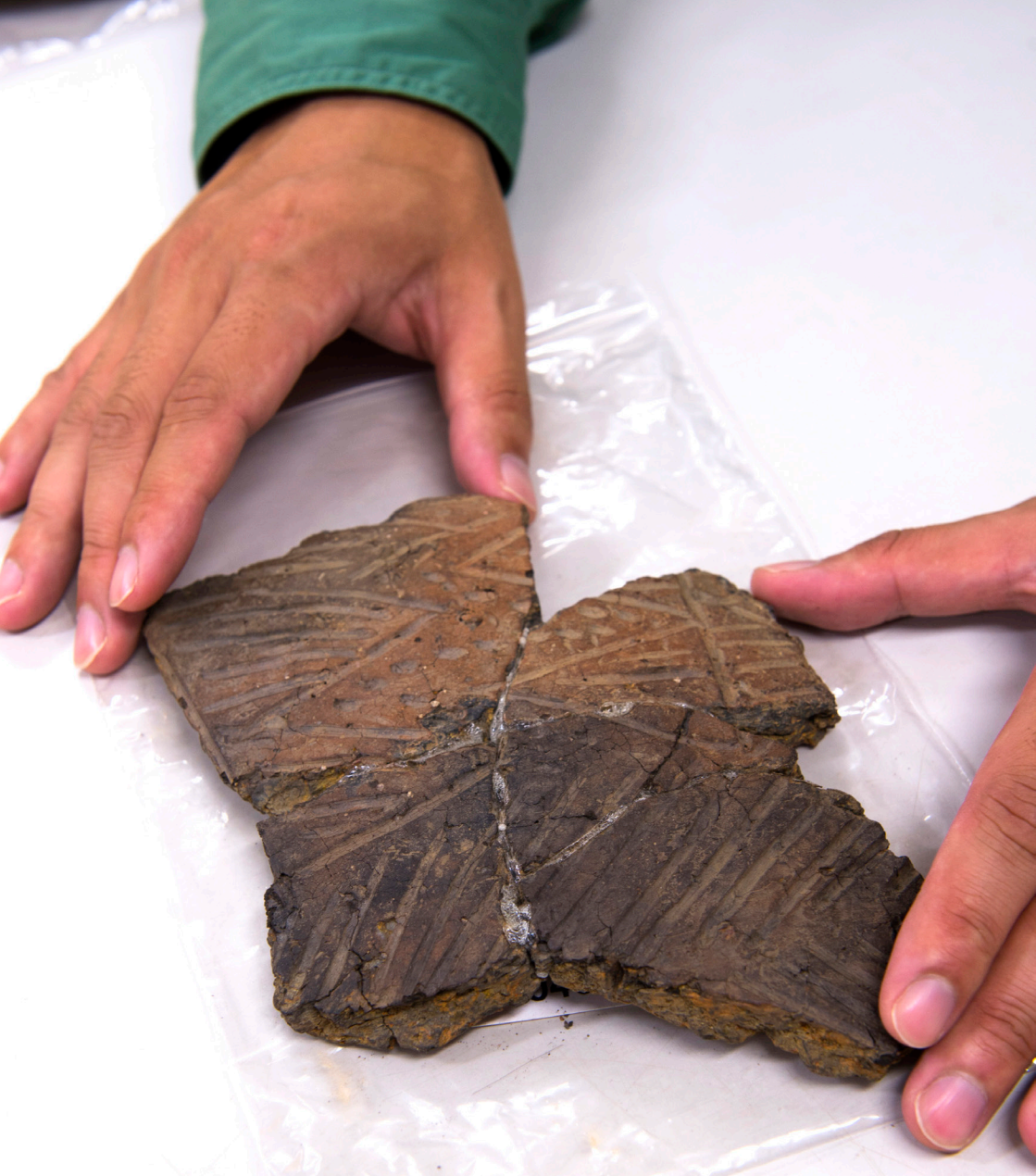
「原の辻遺跡」が見つかったのは1904年。以来、発掘作業が長年にわたって続けられ、2000年に国の特別史跡に指定された。だが、全貌はまだわかっておらず、調べる余地が残されているのだ。

考古ボーイと韓国の土器との出会い

古澤は長崎県教育庁の職員で、07年学芸文化課、09年に原の辻遺跡調査事務所に着任。10年から埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室に勤務している。

専門は、韓半島（韓国・北朝鮮）の新石器時代の土器の研究である。新石器時代というのは、韓半島の時代区分を表す言い方で、日本ではほぼ縄文時代じゆもんに相当する。1万2000年前から弥生時代の始まる2500年くらい前までに当たりますが、最近では、1万6000年前頃まで遡さかのぼるのではないかという説も出てきた。ちなみに新石器時代のあとは青銅器時代で、日本の弥生時代やよいと対応すると考えればいい。

新石器時代の土器というのは韓半島の土器のことを指しているが、土器の底は丸底で、平底の縄文



長崎県の対馬島の夫婦石遺跡
で出土した韓半島系新石器時
代の土器片。製作地が韓半島
なのか対馬島なのかは不明



中学時代、発掘現場で土器を見て魅了されたのがきっかけで、土器研究の道へ進んだ。「考古ボーイ」の初心は消えていない



式土器や中国東北部の土器とは一線を画し、独自の文化が展開していたと考えられている。一方で、丸底の韓半島の土器文化は、東北アジアで孤立していたのではなく、中国東北部や縄文文化圏と交流していたことも資料からは窺えるのだという。古澤は、その新石器時代の土器が、異系統の土器文化とどのように交流していたかを探っている。

古澤が新石器時代の土器に興味をもったのは、九州大学文学部の学生時代。もともと韓国に関心があり、研究で同国の博物館を訪ねたことがあった。

「その時に新石器時代の土器を見たんです。丸底土器で、造形がほんとうに美しかった。なんと端正なんだろうと。そして、それを作っただんな人たちはどんな人で、どんな生活をしていただろうと思いましたが」

古澤の考古学への関心は子供時代から始まっている。当時、埼玉県に住んでいたが、京都の舞鶴で暮らしている祖父母のもとに、夏休みなどに遊びに行っていた。中学生のとき、たまたま近くで古墳の発掘が行われていた。興味をもった古澤が駆け付けると、ちょうど遺物を掘り出すというときで、遺物の一部が土の中からわずかに顔を出していた。

「係の人に触ってもいいですかと聞いたら、いいよと言っんです。触れてみたら、非常にひんやりとした感覚でした。古墳は6世紀、1400年前のもので、土器は須恵器だったんです。そのときに、1400年前の人が使った物を、自分が触れるってなんて凄いことだろう、考古学ってなんと面白いんだろうと思いました」

隣県の千葉県には「貝塚銀座」といわれる場所があり、そこには須恵器よりさらに古い3000〜4000年も前の縄文土器がふつうに落ちていた。古澤はますます考古学に興味をそそられた。



このように、子供の頃に土器を集めたりする子供のことを「考古ボーイ」というらしく、古澤は、「自分もまちがいなくその一人」と言って笑う。

須恵器の基になったのは韓国の土器で、韓国への関心はその辺から芽生えたのだという。高校は埼玉県の県立浦和高校だが、九州大学を選択したのも、韓半島をはじめとして東アジアに地理的に近いということと、韓国考古学が盛んだったということが大きい。ただ最初は、韓国の土器文化を研究していたが、次第に北朝鮮の土器についても知りたくなった。韓半島の新石器時代の土器を研究するには、韓国だけでは半分の土地のことしかわからないからだ。とくに大学院レベルの研究では必ず必要になると考えた。

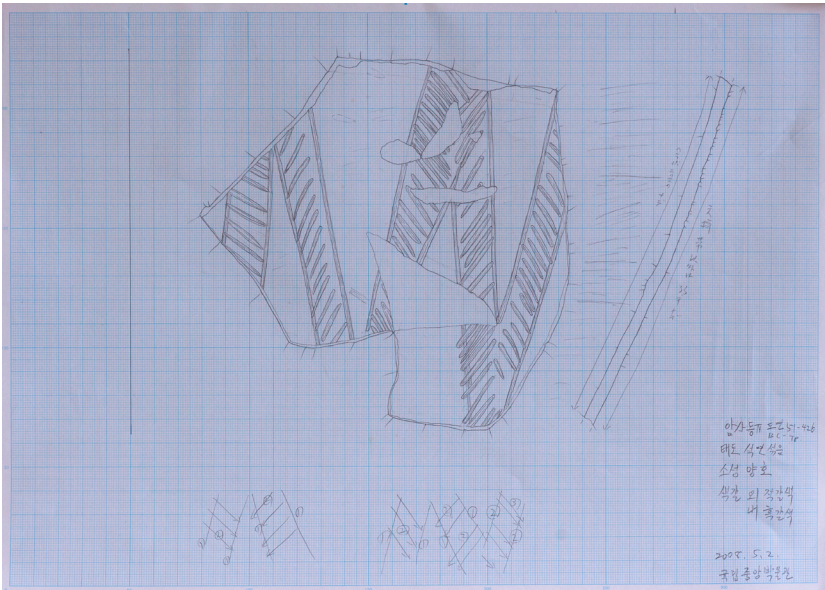
東北アジアの視点から韓半島の文化を眺める

九大を卒業後、東大大学院人文社会系研究科に進み、考古学を専攻した。だが、新石器時代のことを知るために必須の北朝鮮のことを調べるのは困難だった。簡単に行くことはできないし、土器の研究などは自由にできない。そこで北朝鮮と国境を接している中国東北部やロシア、それに北朝鮮と国境を接する韓国北部の北緯38度線周辺の土器を研究することで、北朝鮮の土器と文化を推し量り、理解しようと考えた。北朝鮮を取り囲む三カ国からアプローチしようと考えたのだ。

そうした方法論を念頭に、古澤はこれまで中国東北部、中国山東省、ロシア沿海州^{えんかいしゅう}を中心に東アジアの新石器時代の文化の変遷^{へんせん}を研究してきた。具体的には、各地域の土器文化のまとめごとに土器の「編年」を策定する。そして、他の地域とどう関係しているのかという「関係性」を構築するとい



韓国南部沿岸部、麗水の安島貝塚で出土した日本の縄文系土器。財団の助成金による調査で行った光州博物館に所蔵



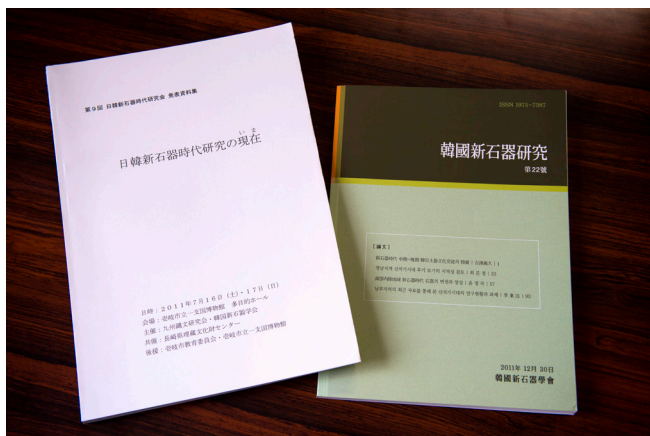
韓国ソウル市岩寺洞で発掘された北朝鮮系土器の実測図。こうした調査も助成金によるもの



古澤義久



助成金を使って行った韓国の調査を基に、6冊の論文集に論文を発表。
「助成金のおかげで充実した調査ができ、成果を出せました」



日韓両国語版で刊行した論文のうち「韓國新石器研究」の論文が第6回九州考古学会奨励賞を受賞



長崎県壱岐島の国の特別史跡「原の辻遺跡」の新たな発掘へ向けて調査を行う。地道な作業の積み重ねだ



うものだ。考古学で編年というのは、遺物や遺構などの年代の前後関係や年代を時系列で配列していくことをいう。

土器の編年の作成に当たっては、それまで使われてきた土器の文様の変遷を追究するだけでなく、土器の製造技法や土器の表面に残る調整の痕跡などを、編年を特定するための要件とした。

また、古澤は、韓半島の新石器時代の文化と日本の縄文時代の文化がどう交わっていたのかについても研究を進めてきた。そうした一連の研究を踏まえて、古澤はさらに研究を深めようと、(財)韓哲文化財団(当時)に助成を申請した。テーマは「東北アジア的視点から見た韓半島新石器時代土器の研究」で、彦岐市教育委員会の彦岐市文化財課学芸員の田中聡一とともに、韓国本土や済州島、また九州北部も調査した。

具体的な調査・研究先として、ソウルの中央博物館、光州の博物館、済州島の済州大学校で資料調査に当たった。また唐津市の教育委員会や、対馬の対馬歴史民俗資料館でも資料調査を行った。助成金は、韓国や済州島と日本の往復の旅費や宿泊費、調査の経費に充てた。さらに資料収集のために一眼レフカメラ1台を購入、拓本用の画仙紙なども買った。出土した土器や欠片などを、研究資料として保存するために拓本として取っておくのだ。

光州の博物館には、韓国南部の沿岸部、全羅南道の麗水で出土した縄文土器が所蔵されていた。日本と韓国との交流を物語る資料だった。そんな話を古澤から聞くうちにこっちまでワクワクしてくる。韓国で縄文土器が出たということは、数千年から一万年近く前にすでに日本と韓半島の人の行き来があったことを証明しているからだ。考古学というのは、そういう一つの「物」から、それを使っていた人々の生活や行動を読み解いていくものなのだというのが、古澤の話を少し聞くだけで想像できる

気がした。

同じく助成金で行ったソウルの発掘調査では、北朝鮮の土器がソウルでも出土していたことが明らかになった。文様でわかったという。何気なく見ていてもわからないが、

「北朝鮮の土器が好きでたまらないので、一目見たときに、すぐに北朝鮮の土器だとわかりました」
古澤が現在勤めている県の埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室は、東アジアに特化した研究機関で、このような所は全国でも他にない。東アジア全域のことを調査するには、韓国との共同研究が欠かせないため、地理的なアドバンテージも非常に大きい。

「財団の助成金のおかげで、充実した調査ができ、6冊の学術雑誌に論文を発表できました。本当にありがたかったですね」。その中の、「新石器時代中期～晩期韓日土器文化交流の特質」という論文は、日本語版と韓国語版の論文集に掲載された。そして韓国語版の『韓國新石器研究』第22号に載った論文で、第6回九州考古学会奨励賞を受賞した。13年12月にはさらに別の論文を発表した。

センターの上司、川道によれば、古澤は文章を書くのが早いという。

「韓国語や中国語にも堪能たんのうなので、原資料の読み込みができるのも強みです」

大学に残って研究を続けることも考えたことがあるが、吉崎の埋蔵文化財センターは、古澤の好奇心や探究心を満たす環境がそろっている。古澤にとつて最高の職場だ。次々に資料を出してきて説明してくれる顔が実に嬉しそうだつた。

「これは中国の遼東で出た土器ですが、これとまったく同じものが北朝鮮でも出ているんです。こういうことをやっていると楽しいんですよ」

「考古ボーイ」は、そう言つて目を輝かせた。

(文中敬称略)



学者を目指していた学究派。
韓半島に近く、古くから韓半
島との交流があった舌岐は、
古澤にとって最高の環境だ

詩人尹東柱がうたう民族の誇りと祈り

楊原泰子

詩人尹東柱を記念する立教の会代表

一篇の美しい詩を書くことが、反逆とみなされる
暗黒の時代があった。韓国の国民的詩人尹東柱が
治安維持法で収監、獄死したのは1945年2月。
植民地から解放される半年前である。尹が学んだ立教大学の
後輩、楊原は、愛惜を込めて彼の日本での足跡をたどる。
作品がうたう平和への祈りを、二度と失わないために

文 高瀬 毅

写真 菊地健志



死ぬ日まで空を仰ぎ

一点の恥辱はじなきことを、

葉あいにそよぐ風にも

わたしは心痛んだ。

星をうたう心で

生きとし生けるものをいとおしまねば

そしてわたしに与えられた道を

歩みゆかねば。

今宵も星が風にふきさらされる。

韓国の国民的詩人として知られる尹東柱ユンドンジュは、まだ無名だった1941年11月、「序詩」と名付けられたこの詩を書いた。1か月後、朝鮮・京城の延禧ヨンヒ専門学校（現延世ヨンセ大学）を卒業。自選の詩集を刊行するつもりだったが叶わなかった。日本は同じ月の8日、ハワイ・真珠湾を奇襲攻撃し、太平洋戦争に突入。日本の支配下にあつた朝鮮で詩集を出すことは「叛逆」的な行為とみなされていた。

翌年春、尹は海を渡り、東京・池袋の立教大学に留学する。正科生ではなく、卒業証書をもらえない聴講生と同等の選科生として英文科に籍を置いた。渡航の便宜を図るために、名前も創氏改名によつて「平沼」と改めていた。

それからわずか3年後の45年2月16日、福岡刑務所で獄死するとは、尹自身想像もしなかつただろ



楊原泰子



やなぎはら・やすこ◎1946年生まれ。68年立教大学文学部史学科卒業。90年代半ば、詩人茨木のり子の本などで「尹東柱」のを知り、衝撃を受け、尹の日本時代の足跡の調査、蔵書探しを開始。2008年立教大卒業生や関係者などで「詩人尹東柱を記念する立教の会」を立ち上げる。白樺教育館学芸員

う。享年27歳。日本の敗戦半年前だった。看守によれば、「東柱さんは、何の意味かわからぬが、大声で叫び絶命しました」（『空と風と星と詩く尹東柱全詩集』伊吹郷・訳）

立教大学在学中に残した5篇の詩

「詩人尹東柱を記念する立教の会」代表の楊原泰子は、尹の人生と足跡を研究し、広める活動に十数年前から取り組んできた。大きなきっかけは詩人、茨木のり子の『ハングルへの旅』という本だった。その中で茨木は、尹東柱の清冽な詩に魅せられた理由に言及していた。

「実のところ私が尹東柱の詩を読みはじめたきっかけは彼の写真だった。こんな凛々しい青年がどんな詩を書いているのだろうかという興味、いわばまことに不純な動機だった。

大学生らしい知的な雰囲気、それこそ汚れ一点だに留めていない若い顔、私が子供の頃仰ぎみた大學生とはこういう人々が多かったなあという或るなつかしみの感情。印象はきわめて鮮烈である。

それなのに日本人の誰の記憶にもとどまっていなかった」

楊原は、尹と同じ立教大の卒業生である。

「自分が通った大学にそんな先輩がいたということはまったく知りませんでしたし、本を読んで、尹東柱が捕えられて亡くなったということがものすごく心に残りました」

しかし、日本での尹の生活については不明なことが多く、証言も少なかった。自分に何かできることはないのだろうか。そう思い、尹のことを調べ始めた。卒業生名簿を頼りに同時期に立教大に在籍していた人の中から200人ぐらいに手紙を送った。その中には、元プロ野球の阪急や近鉄の監督を



立教大礼拝堂で開かれる「詩人尹東柱とともに」では、延禧専門学校（現延世大学）卒業時の尹の写真が飾られる





毎年2月に開かれる「詩人尹東柱とともに」開催へ向けての準備会。韓国から立教大に留学中の学生も参加している

務めた西本幸雄もいた。

窓辺に夜の雨がささやき

六畳部屋は他人の国

詩人とは悲しい天命と知りつつも

一行の詩を書きとめてみるか、

汗の匂いと愛の香りふくよかに漂う

送られてきた学費封筒を受け取り

大学ノートを小脇に

老教授の講義を聴きにゆく。

「たやすく書かれた詩」の一節である。「戦時下の東京の夜、雨音を聴きながら、下宿部屋の机に向かい、思い沈む若き詩人の姿が思い浮かぶ」（季刊「はぬるはうす」と楊原は書く）。

尹は、立教大学には6か月間在籍し、その間、朝鮮語で5篇の詩を立教大のマークが入った便箋に書いて、朝鮮の友人に送っていた。それ自体非常に危険なことだったが、友人は手紙の部分だけ捨てて、5篇の詩を特高（特別高等警察）の監視から守りぬいた。これがのちに、数少ない残された詩と



して、尹の存在を知らしめるものとなっていく。立教大を退学した尹は、同年10月、京都の同志社大学に選科生として編入する。京都には、小・中学校、それに延禧専門学校の同窓生で京大に通う、尹のいとこの宋夢奎ソンモンギョがいた。

43年7月、尹は、京都の下宿先にいるところを治安維持法違反の罪で特高に逮捕される。宋らとともに朝鮮独立のための運動を行うために秘密結社を作るなど、民族運動に関わったと疑われたのだ。しかし、尹はもの静かな青年で、当時の特高などを探し出して調査した翻訳家の伊吹郷は、「『事件』をでっちあげられ弾圧されたとみてまちがいないだろう」と『空と風と星と詩』の中で記している。裁判で尹は2年の刑が確定、福岡刑務所に収監され、のちにそこで獄死するのだ。

楊原は、こうした尹の短い人生の軌跡を追い、東京に在住していた時代、どこに住み、どんな生活をしていったのか調査、研究してきた。

同時に、詩人尹のことを広く知らしめる活動を積極的に行ってきた。

尹東柱を惜しむさまざまな活動

2005年、池袋聖公会で「尹東柱の故郷を訪ねる会」が主催した「尹東柱没後60年シンポジウム」が行われた。この時、立教大の司祭と教授が関わり、それがきっかけで07年、立教学院諸聖徒礼拝堂で「詩人尹東柱とともに集う」会を開催。08年には立教大学文学部100周年記念事業として「詩人尹東柱とともに・2008」が開かれ、立教大学卒業生や関係者によって「詩人尹東柱を記念する立教の会」を発足させた。そして毎年2月16日の尹の命日近くの日曜日に、立教大チャプレン室の後援

で、礼拝堂において「詩人尹東柱とともに」を開催している。

活動によつて、尹のことが知られるようになり、10年度には、立教大に「尹東柱国際交流奨学金」制度もできた。それを記念して5回目の集いとなる11年に、韓国から尹東柱の甥、成均館大学の尹仁石教授を招いた。本来は日本人の自分たちが費用を出して追悼の集いを行うべきだという思いもあった。しかし、少しでも資金を広く集める必要がある、尹教授の日本と韓国の往復の交通費と宿泊費、それに講師としての謝礼、朗読者、スタッフの交通費、昼食代などの諸経費の捻出を確実にするため、(財)韓哲文化財団(当時)に助成金7万円を申請した。「詩人尹東柱とともに」の集いは毎年盛会で、少しずつ尹の詩と存在が知られるようになってきた。14年も2月16日に7回目の「集い」を開催した。

「尹さんの立教大学時代のことがかつてきたのは、楊原さんの調査のおかげだと思います」

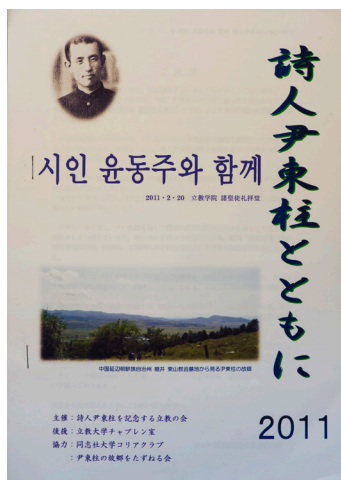
そう語るのには「尹東柱を記念する立教の会」のメンバーの一人、堤さと子だ。堤が尹に興味を持つようになったきっかけは、韓流ドラマからだという。「冬のソナタ」から始まった韓流ブームで韓国に関心を持ち、立教大の社会人を対象とした「セカンドステージ大学」を通して楊原と知り合った。女優の松岡みどりは、尹の詩を朗読する会を開いたり、「集い」にも参加している。

「朗読者として見たときに、尹東柱の詩は胸に迫るものがあります。読んでみると、あ、尹東柱さんが来るといふ気がしてきて、涙ぐむような感じになるんです」

松岡も堤と同じように、韓流ドラマをきっかけに韓国に対しての興味を持つようになったという。

「ヨン様(ペ・ヨンジュン)からユン様へ、よ」と笑う。

「楊原さんの活動は凄い。会を立ち上げることはできる。でも継続するのは大変。それができていますよね。若い人も育てていますし、理性的に活動をされている。楊原さん自身、とても謙虚で地



立教大学礼拝堂で2011年に開かれた「詩人尹東柱とともに」。写真右下は左から韓国の朗読者、金大原・立教大チャペレン、尹の甥、尹仁石・成均館大教授、楊原。
(写真は「詩人尹東柱を記念する立教の会」提供)



「詩人尹東柱を記念する立教の会」メンバー。(写真左から)
楊原、吳柔珍（立大4年）、鄭和殷（立大4年）、堤さと子



道に努力されています」

楊原は、尹が立教大の学生時代に住んでいた下宿先が、いまの東京都新宿区高田馬場だった可能性が高いことを13年に突きとめた。尹の詩にある「六畳部屋は他人の国」と描いた部屋があったとみられる場所だ。「現在の北朝鮮出身で日本に留学していた元北朝鮮高官（故人）が、『尹東柱と一緒に東京で下宿していた』と語っていたことが判明した」（東京新聞）のだ。日本に残されていた資料や関係者の証言から、下宿先は、当時淀橋区諏訪町にあった菊水館と、すぐ近くの別の家のどちらかだということまで絞り込めた。現在のJ R山手線高田馬場駅前からほど近い場所に当たる。「記録に残っている番地に一部不透明な点があるのでさらに調査を重ねたい」と楊原は、東京新聞に語っている。

日本人としての贖罪の思い

楊原をそこまで動かしているのは、尹が大学の同窓であることもあるが、過去の戦争において、日本が朝鮮に対して行ったさまざまな加害に対する問題意識だ。史学科で学び、博物館の学芸員資格も持つていて、歴史には人一倍関心も高い。

「一番下の子供が日韓親善野球に出場したこともあり、20年ぐらい前から韓国に関心を持つようになつていました。（植民地支配や戦争に対して）日本人としての贖罪の気持ちもあります」

若い人たちにも、過去の問題をきちんと伝えようと思つている。

「ただ、ストリートに戦争中の話をして、引かれてしまうんです。でも、尹東柱の話から入ると静かに聞いてくれます。奇跡的に立教大学在学中に書かれた5篇の詩が残りました。それらの詩はとて

も成熟しているんです。そういう意味でも日本で書かれた他の詩が特高に押収されたまま行方がわからないのは本当に惜しまれます」

尹が日本に留学する前に書いていた詩や散文などを合わせても約130作品しか彼の創作は残っていない。生前1冊の詩集も出せなかった。だが、戦後、残された作品をまとめて詩集として韓国で出版され、いまでは5カ国語に訳されてもいる。静かに、しかし着実に尹東柱の存在と詩の魅力は伝わっている。

詩人としての才能を開花させるには、あまりに短かった人生。悲運であっただけに、より一層、読者の心を揺さぶる。楊原は、尹のことをもつと多くの人に知ってもらいたいと言う。尹の日本での生活とその死にいたるまで、解明しないといけないことがまだまだたくさん残されている。尹東柱を「探す」旅はこれからも続いていく。

(文中敬称略)



「詩人尹東柱とともに・2013」終了後、立教大本館で開かれた講師や朗読者、スタッフとの打ち上げの茶話会で

映画がつなぐ日本と韓国の次世代交流

下川正晴

NPO法人日韓次世代映画祭代表
大分県立芸術文化短期大学教授

新聞社のソウル特派員を経て、短大で教鞭きょうべんをとる
下川のライフワークは「日韓の相互理解」。
映画を媒介に日韓次世代交流映画祭を立ち上げた。
日本と韓国の学生による、短編映画の
合同制作もスタート。若者たちが共に学び、
未来に向けて情報を発信している。

文 村尾国士
写真 渡辺誠



JR大分駅から徒歩15分の高台にある大分県立芸術文化短期大学は、地元では「芸短」の愛称で親しまれている。2007年春、その芸短大情報コミュニケーション学科教授に就任したばかりの下川正晴は、130人ほどの新入生に、教室で1本の映画を見せた。

上映前、「朝鮮戦争を舞台にした韓国映画」と解説したが、ほとんどが18〜19歳の女子学生たちはまったく関心を示さず、お喋りに余念がなかった。映画は04年に公開された『ブラザーフッド』。戦争に翻弄される兄弟の悲劇を描いた作品で、複雑な政治情勢が背景にある。「今の日本の学生に理解しろというのは無理かな」と下川は案じていた。だが、上映が終わり明かりをつけると、学生たちはみな目を真っ赤にし、ボロボロ涙を流す者もいた。その感動ぶりに、下川のほうが驚いた。

『日本の先の戦争』と言うと、『日本は戦争したんですか?』と返事しかねない学生たちですよ。まして隣国の戦争なんてまるきり知らない子たちが、理屈抜きで心を動かされる。映画にはそんな力があると、改めて実感しました」

下川は元毎日新聞記者。韓国への語学留学ののち、ソウル特派員を5年務めた。55歳で退職後、韓国外国語大学客員教授として2年間教壇に立ったが、九州にいる母親の介護のため帰国した。記者時代から「日韓の相互理解」をライフワークとする下川の持論は「マスコミの論調をうのみにするな」。新聞記者出身らしからぬところにこの人の真骨頂がある。

「韓国人も日本人も、反日嫌韓なんて言葉でひとくくりできるほど単純じゃない。どちらの人間も社会も多様です。まずお互いを知る努力をすることが大事なんです。映画は多様性を映し出す総合芸術。学生たちの反応を見て、映画を媒介にした日韓の若い世代の相互理解を進めたいと考えたんです」

以後、下川は無類の企画力・行動力を発揮しながら映画交流活動を展開していく。



下川正晴



しもかわ・まさはる◎1949年生まれ。73年大阪大学法学部卒業、毎日新聞社入社。ソウル支局長、バンコク支局長、論説委員などを歴任。2005年から2年間、韓国外国語大学客員教授、07年より大分県立芸術文化短期大学教授。映画の鑑賞・制作を通じた日韓学生の交流活動を企画・運営している

「日韓次世代交流映画祭」立ち上げ

もともと映画好きで「特派員時代も暇さえあれば映画館へ通っていた」下川が、映画の力を最初に実感したのは芸短大教授に就任する前年、ソウルでのことだった。日本の植民地時代に作られた朝鮮映画が発掘され、韓国映像資料院が4本をDVDにまとめた。

「1940年代の映画ですが、京城（現ソウル）の近代的な街並みや生活ぶりがわかります。当時を伝える新聞や歴史書ではとうてい知ることのできない生の迫力に驚嘆しました。また、映画の解説が実にバランスのとれた素晴らしいもので、これにも感動しました」

DVDを見えずぐ、下川は映像資料院を訪ねた。このフットワークの良さが幸運を招く。たまたま資料院に来ていた映画評論家・東国大学校兼任教授の金鍾元と出会ったのだ。DVDの解説者であり、今日まで下川が「先生」と仰ぐ人物である。

「韓国の政治家や知識人には声高に反日の建前ばかり言う人が多い。金鍾元先生は偏ることなく穏やかに事実を語る、稀な方です」

07年12月、金鍾元を解説者として招き、大分市で「発掘された過去」と題したDVD4本の上映会を開いた。このDVD選集が日本で上映されるのは初めて。下川の映画交流活動のスタートでもあった。芸短大の学生たちが、戦前の京城を知る年配者の話を聞く、教科書では学べない教育の場ともなった。

翌年には「日韓次世代交流映画祭」を立ち上げた。これは、韓国映画界の巨匠・林権澤監督の名を



研究助成を受けた第3回日韓次世代映画祭で。上段の右から3人目は金鍾元教授。中段左は映画祭シンポジウム、右のポスターはメインゲスト俳優のコ・ス氏。下段は映画祭の運営を担った学生たち。(写真提供 下川正晴)





日韓学生交流の発展学習として日本側の短編映画自主制作。撮影地の津久見市保戸島へ渡る船上で

冠した学部を持つ釜山の東西大学から「林監督作品の上映会を」と依頼されたことに始まった。かつて下川は林作品の『風の丘を越えて』（原題・西便制）をソウルで見ても、日本人記者として初めて評価する記事を書いた。上映会に異存はなかったが、継続性のある交流をと考え、「日韓次世代交流映画祭」と名付けた。

その第1回が08年11月、林監督や主演女優らを招き、大分県別府市で開かれた。3日間にわたった映画祭を支えたのが、50人の芸短大学生スタッフである。この映画祭は反響を呼び、韓国の国民的俳優・安聖基らが顧問に加わり、毎年続いている。韓国留学生たちもスタッフとして加わり、力を発揮している。

こうして映画を通じた日韓の学生交流が定着してきたが、ネックは経済面。「それまで大学や自治体に支援してもらっていましたが、常に赤字の苦労続き」だった。財韓哲文化財団（当時）の研究助成基金を知った下川はすぐに申請、認可を得た。

「これがきっかけで、僕自身も予想していなかった新しい展開がどんどん生まれてきました」

日韓映画交流の新地平を開く

助成を受けた11年、下川はNPO法人を設立し、第3回日韓次世代映画祭（3回目以降、名称変更）を開くほか、第1回日韓短編映画祭を開催し、韓国の26歳の女性監督を招き短編映画を制作、創氏改名をテーマにした林監督作『族譜』の日本語字幕付け作業と、矢継ぎ早に企画。芸短大の学生たちが合宿しながら、これらのイベントを運営した。4年前の無関心ぶりに比べればめざましいが、下川は



より高いハードルを学生に課した。

「映画を見るだけでは本当の交流にならない。韓国の学生たちと一緒に映画を作ろう」

ソウル芸術大学映画学科に呼びかけて始まったのが「日韓学生短編映画制作交流」。韓国側から7、8人の学生を招き、芸短大生30〜40人が加わり、1週間の合宿生活をしながら数本の短編映画を合同制作する。画期的なこの催しは「日韓映画交流に新地平を開くプロジェクト」とアジアナ国際短編映画祭で評価された。

わずか1週間での映画制作を可能にしたのが、録画・録音機能にすぐれたスマートフォンが登場だ。さらにこの20年来、韓国は政府が音頭をとって映画産業を支援、アジア最大の釜山国際映画祭など、今や日本を抜く映画先進国となり、新技術も積極的に導入している。

「それまで多くの分野で韓国は日本を見習ってきましたが、映画に関しては日本が韓国に習う。習いながら一緒に食事したり、徹夜とともに編集作業をする。そうして映画を完成させることで日本の学生は成長できます」

文字通りの直接交流である。こうした合同制作から生まれた作品が2012年、韓国政府主催の「スマートフォン映画祭」で金賞を受賞した。技術と自信を身につけた芸短大生は、やがて自ら映像による情報発信を始めた。12年9月14日付の大分合同新聞はこう伝えている。

『大分市の中心市街地を拠点に、若者や住民らの共同制作でさまざまな話題を発信するインターネットの生中継番組「十三夜TV」が13日始まった。ハプニングあり、笑いありの第1回中継はまずまずの滑り出し』

このネット番組のスタッフも出演者も芸短大の現役生だ。さらに、芸短大生だけでオール韓国語の



短大で専門のジャーナリズム論などのほか、文章指導、韓国語も教える。「社会人として羽ばたく礎を築いている」



映画制作には素人だったが、「スマホを使って自分でも映画が作れた。蛮勇を奮って学生への制作指導も始めた」

映画を作り上げたこともある。その作品は、13年10月に韓国で開かれた「常緑樹国際短編映画祭」で入賞を果たした。全国に数ある短大のなかでも、国際交流から地域発信まで、これほど活発に活動する例は極めて稀だろう。

一方、下川の指導を受け巣立った学生たちの活躍にも目を見張るものがある。第1回の次世代交流映画祭に参加した女子学生は、ソウルで数時間にわたり林権澤監督をインタビュー、卒業論文を書いた。ソウル大学や梨花女子大学など韓国の名門大学に留学を果たした学生もいる。また、文章指導も行う下川に赤点をつけられた女子学生が発奮、3カ月後に全国エッセイコンクールで優秀賞に輝いた。芸短大教授に就任する折、下川が考えたのは「地方の短大だからこそ、学生は化ける可能性がある」ということだった。日韓学生交流という濃密な場所と時間を与えられた学生たちはみごとに化けたのである。

韓国に対する振幅の大きな思い

最後に下川自身の韓国観にも触れておきたい。

下川には足に先天性の障害のある娘がいる。特派員時代、娘はソウルの日本人小学校に通っていた。車椅子や杖を使う娘は、韓国人の男の子に石を投げられたりした。外出しようとタクシーを待っていると、近くまで来たタクシーが車椅子とわかるとそのまま走り去る。娘は外出を嫌がり、妻は「じゃ、一生、家にいなさい」と叱りつけ、家の雰囲気は暗くなる一方だった。

「そんな生活のなか、家族である花屋へ行ったんです。温室のような大きな花屋で、珍しがった娘が



活動の原点は大学生時代。民族差別糾弾デモのリーダーを
務めた。記者になってからは韓国を中心に東アジア専門に

車椅子から降りて杖をついて歩き回っていました。すると、娘をじつと見ていた花屋の女性店主が僕にいきなりこう言っただんです。『ああ、ご主人、あの子はあなたにとつて可愛いでしょう！』。障害があるから、なおさら可愛いでしょうと、感極まったような口調で見ず知らずの僕に言う。その簡潔な韓国語に感動し、救われましたね」

この体験を下川はエッセイに書いた。首都大学東京特任教授・鄭大均^{ていたいきん}は、日本人の韓国観を分析した著書『韓国のイメージ』（中公新書）に、下川のエッセイを引用している。

「あることで韓国人を嫌いになったり、逆に好きになったりする。そのように振幅の大きいのが日本人の韓国人に対する理解のひとつの典型と、鄭先生は分析されていますが、その通りだと思います。だからこそ、相手を知ろうと努力することが大切なんです」

下川の渡韓歴は数知れない。インタビュアの翌朝も、映画祭の打ち合わせで韓国へ飛ぶことになっていた。ソウルでは映画館裏の安宿に泊まり、何十年も街を定点観測していると語る下川を前に思っただ。韓国や韓国人を知りたいと誰よりも願っているのは、この人自身なのかもしれない、と。

（文中敬称略）



下川正晴



2014年に芸短大教授を定年退職する。「大学での活動はなくなりますが、日韓の若者の映画交流は続けていきます」

国境を超え、朝鮮族が拓く東アジアの未来

宣元錫

中央大学総合政策学部兼任講師

日本の植民地統治を引き金に、かつて半島から中国東北部に渡った朝鮮族の人々。今、中国の改革開放政策と中韓国交成立を経て、経済発展を上げた韓国へ、日本へと盛んに往来する。国境に捉われない自由な生き方は、グローバル時代の新たな可能性を示唆している。

文 西所正道
写真 渡辺誠



増え続ける在韓国の朝鮮族。その背景は？

テレビドラマは世相を映す鏡でもあるが、韓国には「朝鮮族」を主役級に配するドラマがある。たとえば、新人新聞記者と朝鮮族の女性とのラブストーリーを描いた『君に出会ってから』（2002年）、国際結婚をする目的で韓国に來た朝鮮族女性が主人公として描かれた『19歳の純情』（2006年）などがそれだ。

朝鮮族とは、おもに中国東北部を生活の拠点きよてんにする、朝鮮半島をルーツにもつ人たちを指す。移動の理由の一つではないが、日本が朝鮮を植民地にし、1910年代の土地調査事業によって朝鮮農民の約8割が小作農に陥落。貧困などにより新天地を求めたことが大きな要因である。

一時は約200万人いたとされるが、1992年に中国と韓国が国交回復したのを機に、離散家族を中心にした人の移動が始まる。さらに韓国企業が中国の沿海部に工場などを建設するようになったことで、朝鮮族の移動がさらに強まり、彼らはのちに沿海部から韓国や日本などへと移動を続けた。90年代は10万人程度だった在韓国の朝鮮族は、2000年に入ると2倍の20万人に増加。前記『君に出会ってから』に登場する朝鮮族女性は上海にいて、その後韓国に行くという設定だが、まさにその現象を反映したものといえる。それ以降も在韓国の朝鮮族は増え続け、いまでは30万〜40万人が生活していると推計される。

先に触れたように、2000年以降、日本へ移動する朝鮮族も少しずつ増えている。現在、5万〜10万人はいるともいわれる。日本の大学に留学したり、IT企業や貿易会社で働いたり、弁護士とし



宣元 錫



ソン・ウォンソク◎1965年韓国生まれ。高麗^{コリア}大学大学院社会学科修了後、一橋大学大学院社会学研究科で学ぶ。外国人労働者と移民政策に関する調査研究などを行う。2000～02年まで韓国大統領府大統領諮問政策企画委員会専門委員。大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員研究員を経て、現在中央大学総合政策学部兼任講師。編著に『異文化間介護と多文化共生』(明石書店)、その他共著がある

て活躍する人もいる。

へなぜ朝鮮族は、中国、韓国、そして日本の三方国を移動するのだろうか

そんな疑問を抱いたのは、宣元錫（ソンウォンソク、中央大学総合政策学部兼任講師）である。韓国に生まれ、高麗（コリヤ）大学で社会学を学んでいたが、学生だった1980年代後半、民主化を訴えるデモの嵐が吹き荒れた。そうした政治状況の中で、宣は自分の発想が内向きであることに気づき、留学したいと思うようになる。知り合いの日本人に留学を勧められ、1993年、一橋大学で研究することになったのである。

宣は来日以前から、朝鮮族に興味をもっていたわけではない。一橋大学で外国人労働者の実態を研究するようになり、その流れで02年に母国の外国人労働者を調べるために、ソウルに滞在中、同市内に住む朝鮮族に関心をもつようになる。以来、日本の朝鮮族研究学会に入るなどして、朝鮮族を調べ始めた。

研究を進めるうち、朝鮮族が韓国へ移動する理由には、主に二つの要因があることがわかった。一つは世界中のどの移民にもあてはまる経済的な理由だ。90年代、中国と韓国の為替格差は10〜20倍ぐらい開いていた。韓国は稼げる場所だったのだ。韓国に滞在する中国人のほぼ半数が朝鮮族というのは、民族のルーツが同じであることが関係しているのだろう。

宣が注目しているのは二つめの理由、それは「歴史性」だ。日本の植民地支配が引き金となり、中国で生きることを余儀なくされるが、1世紀後に起きた冷戦終結とグローバリゼーション、中国の改革开放政策、そして中韓国交成立という環境変化の中で、韓国へ再移動する。その認識の中に朝鮮族の「歴史性」が垣間見られると、宣は言う。

こうした民族の動きは朝鮮族以外でもあるかを調べてみると、なかった。中国には公認の少数民族



が50数種あるといわれるが、中国の沿海部や韓国への移動がいちばん活発なのは朝鮮族だった。なぜ朝鮮族だけがこれだけ動くのだろうか。

語弊はあるかもしれないが、中国国内で「迫害」を受けているのかとも考えた。だが迫害は、他の少数民族でも多かれ少なかれあるはずだ。他に考えられる理由は、韓国の経済発展と、中国の改革开放路線である。

前記のように、韓国が工場を中国に建設するなど、韓国の経済発展を目の当たりにすることで朝鮮族は刺激を受け、揺さぶられたのだ。それまでは文化大革命があつたりして、明日をどう生きていくかに必死だった朝鮮族が、経済発展により自分のルーツは韓国だということを認識し始め、移動し始めたのではないかと宣はみている。

「経済要因、歴史、グローバルゼーション。この三つの要素がすべてからんで移動する民の存在は世界中探しても稀です。ある意味、歴史の矛盾に翻弄された存在です」

特殊な移動をする朝鮮族を理解するには、朝鮮族に直接話を聞くことが早道に思えた。それによつて東アジア地域を動く朝鮮族をより深く理解できれば、これらの国々が共生するヒントを掴めるのではないかと思つたのだ。

韓国と日本でインタビュー調査を開始

(財韓哲文化財団(当時)の助成金を得て、調査をスタートした。が、いざ始めてみると、かなりの時間を要すことがわかった。中国、韓国、日本の3拠点に点在する家族に限定して聞き取りしようと

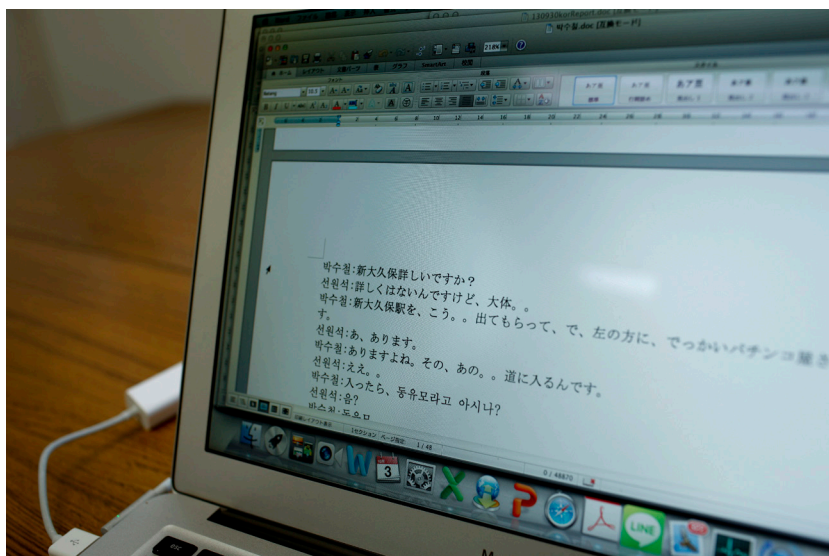


留学した一橋大学のキャン
パスで撮影。ここで外国人
労働者を調べたことが朝鮮
族研究につながった





朝鮮族男性の書いた小説『도끼봉에 해가 떴다 (トキ峰に日が昇った)』。
上中下の大著。2010年に出版され、いまでも書店で販売中



これまでに終えた朝鮮族への聞き取りは20人。録音できない場合もあるが、聞いた内容はすべて文字起こしてパソコンに保存している



したため、その条件に合う人を見つけるのにかなり手間取るのだ。

これまでインタビューできたのは10家族。人数にして20人。なかには日本在住の朝鮮族6人が含まれている。インタビューに要した時間は一人当たり平均1〜2時間。2〜3回会った人もいる。何度かも会って信頼関係を築くことで、より深い話を聞けるからだ。

まず、日本にいる朝鮮族に話を聞いてわかったことは次のとおりだ。

第一は、日本にいるのは主に若者で、目的は留学や就職が多く、結婚の人もいる。両親はというと、韓国に住まうケースが多く、祖父母は中国に留まる場合がほとんどだ。

では、なぜ韓国を選ばず、日本を選んだのかという理由だが、まず彼らは、韓国が自分のオリジンだという認識が希薄であることが挙げられる。民族的な縛りしばから自由なので、物事の判断もクールだ。日本は韓国より先進国で、経済的に豊かで、学問も進んでいるという理由から、就職先や留学先として日本を選ぶのだ。朝鮮族の中では、「いちばんデキる人が欧米へ、次に日本、その次が韓国や中国沿海部、最終的にどこにも行けない人が地元に残る」と言われるようだ。アメリカにも1万〜2万人の単位で渡っている。

疑問に思うのは、日本が戦前働いた行為に対して嫌悪感のようなものを抱いていないのかということだが、若い世代はそれはそれとして受け止めているのだという。意外なのは、中国東北三省（吉林省、黒龍省、遼寧省）の中学、高校、朝鮮学校の外国語教育では、比較的最近まで英語ではなく日本語を勉強する学校が多かったことだ。そうした背景も日本への移動を容易にしている。

彼らの多くは韓国を経ずに、日本へ渡っているが、韓国とまったく関わりのない人は少ない。親を訪ねて韓国に行ったり、親が韓国で働いた経験があったり何らかの関係がある。だから韓国の実情を

よく見知っているのである。

韓国に住む彼らの両親にも、宣はインタビューを試みている。ただ、いつも歓迎されるわけではなく、聞き取りを断られるケースも一度や二度ではないという。理由は、両親ともに韓国人が嫌がるような仕事、つまり単純労働や肉体労働に就くケースが多く、そういうことを語りたくないからだろう。移民が単純労働に就くのは、どの国にもある。しかし朝鮮族の場合、同じルーツを持つ人に見下される屈辱がある。だからこそというべきか、子どもには教育を受けさせたい。そのためには資金が必要だ。韓国にいたほうが稼げるから辛抱する。そんな気持ちで育てた子どもも、韓国には来ず、欧米や日本に行く……。そこには幾重にも捻ねられた感情が生まれる。

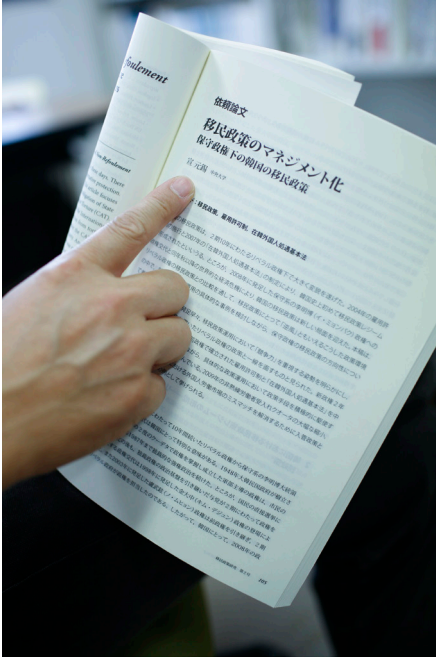
「自分たちは植民地時代に満州に行かされた。そういう歴史を私たちは背負っているんだから、韓国人たちは、自分たちにもう少し親切に優しく接してくれてもいいのではないか、という気持ちも伝わってきました」

韓国国内で朝鮮族が多く住む地域がいくつもある。ソウル九老区加里峰や永登浦区、京畿道安山などである。どこも市の中心から少し離れた場所、築30年以上の賃貸アパートに質素に暮らしている。これまで10数人の在韓朝鮮族から話を聞いたが、印象に残っているのは、作家である、『도끼부엌에 해가 났다 (トキ峰に日が昇った)』という小説(146ページの写真参照)を本にまとめている。韓国生まれの宣でさえ、朝鮮族が使う独特の表現があつて読むのに呻吟したが、書かれていたのは、朝鮮族が村から韓国に出稼ぎに行き、故郷に送金するので、村には貧富の差ができ、人間関係にざざ波が立つようになった、ということである。

中国東北部に200万人いた朝鮮族は、流出が相次ぎ、いまは120万人ほどの規模に縮小してい



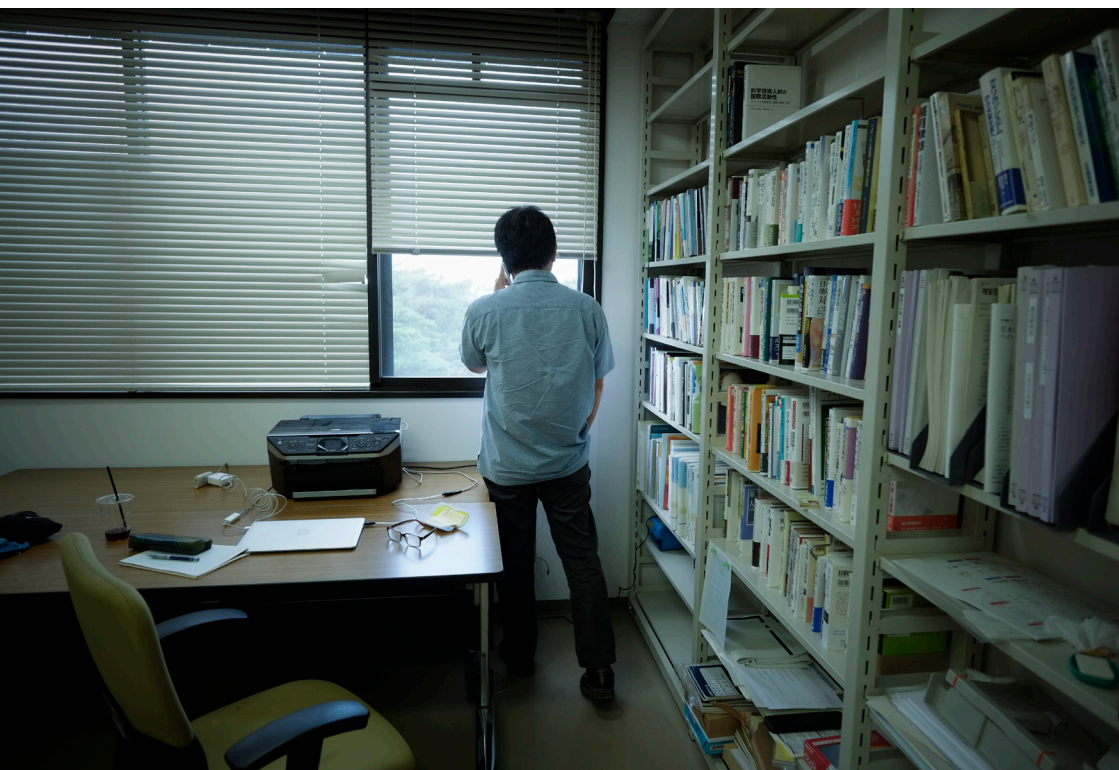
宣元 錫



2010年5月30日発行の『移民政策研究』（移民政策学会）に掲載された宣の論文。李明博政権以前と以降の移民政策を比較研究した

韓国にある朝鮮族の居住地の一つ加里峰を取材。韓国には主に50、60代の単純労働に従事する朝鮮族が多く、貧しい生活を送る人が少なくない。(写真提供 宣元錫)





韓国で学生生活を送った1980年代は反米の時代。日本の植民地時代のことは知っていたが、それはそれ。留学に親は反対しなかった



るのではないかとみる研究者もいる。「このままではコミュニティが崩壊するのではないか」と宣も危惧するが、この作家はそうした時代を敏感に捉えて描いていた。

力のある50歳代後半の作家なのだが、韓国では書くという特技は生かされず、肉体労働に甘んじている。彼は韓国での生活をいつか書きたいと語っていたという。

この作家のような50代に、将来も韓国に永住するつもりかと聞くと、必ずしもそうではなく、「いずれは中国へ帰りたい」という希望を持っていた。理由を聞くとこう語った。

「韓国では仕事をしないと死ぬ！ すごく競争が激しい社会なのでのんびりできない。金を貯めて、老後は中国でゆつくりしたい」

宣は朝鮮族の聞き取り調査を引き続き行い、あと10家族にはインタビューしたいという。また当初は予定になかった、朝鮮族が住む中国東北三省への取材も必要だと考えている。この調査を踏まえ、世界で同様の傾向をもつ移民と比較しながら、分析していきたいという。つまり中、韓、日の3カ国にまたがって移動をする朝鮮族の特徴、もしくは特殊性を、世界の人的移動の中に位置づけるのだ。

民族と国家を超え、東アジアをつなぐ存在に

まだ調査の半分の段階だが、これまでの取材で宣は何を考えたのだろうか。まず挙げるのは、
「朝鮮族は、今後、東アジアをつなぐ存在になっていくだろう」

ということだ。移動の実態から気付いたことは、現代の朝鮮族が、中国文化と融合された独自の文化を形成していたことである。その中には、善し悪しは別として、過去の日本帝国主義の遺産をも内

包している。たとえば日本や日本語に対する憧れなどだ。

宣がもう一つ指摘するのは、朝鮮族が、国境を軽々と超え、東アジア3カ国を渡り歩いて活躍する自由さを持つていることだ。中・韓・日の3カ国は、国家や国境を強く意識しているのに対し、朝鮮族はそうした立場とは一線を画する立場にいる。

「最近、3カ国には排他的な国民国家体制が強まっていますが、私はそれを危惧きぐしています。それを和らやわげるためにも、移動と交流の促進は、『選択』ではなく『義務』と考えるべきです。もしその努力を怠れば、かなり危険な状態に陥る危険性があります。なぜなら、東アジアではいまも冷戦態勢が終わっていないし、戦後処理も残っているからです。つまり火種は転がっているというわけです」

（人が好きな場所に住み、生活を営む自由を国籍などよりも優先するべきだ）

宣はそう考える。植民地政策の犠牲になり、文化大革命にさらされ、ずっと「自由」を奪われてきた朝鮮族が、一世紀を経るなかで得られた国境を超えられる「自由」だからこそ、より大事にしていかなければならない。そして我々はその移動から、国家や民族とは何か、あるいは東アジアの近未来像とはいかなるものかを考えるヒントを得られるだろう。

（文中敬称略）

最近行く機会が多いのは
アジア。国境を越え移動
する人に出会う。目的は
仕事、勉強、結婚……。
移住の背景から見えてく
るものがある



朝鮮半島由来の、文化財の返還問題を考える

有光健

韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議副代表

植民地時代、朝鮮半島から内地（日本）へ
流出した文化財は、韓国文化財庁によれば
6万点以上に及ぶという。その経緯は
歴史に埋もれ、ほとんどが謎のままだ。
民族が愛し、育んだ至宝の品々が、
里帰りを果たす道はないのだろうか？
有光は、地道な調査と研究を重ねていく

文Ⅱ歌代幸子
写真Ⅱ渡辺誠



秋雨けむる東京・上野公園は文化の日をひかえ、週末を憩う人たちにぎわっていた。『ミケランジェロ展』『ターナー展』など長蛇の列が続く美術館を過ぎ、色づく森を抜けると石造りの重厚な建物がそびえる。明治5年、「文部省博物館」として最初の博覧会を開催し、関東大震災後に再建された日本最古の東京国立博物館。その傍らには、戦後20数年を経て開館した東洋館がある。

2013年にリニューアルオープンしたモダンな館内をめぐる、中国、東南アジア、インド、西アジア、エジプトの美術工芸品や考古遺物が展示され、5階奥の一室は朝鮮半島由来の陶磁や仏教美術の名品が並ぶ。しんと静まり返った展示室では、韓国からの留学生らしき若者たちが熱心にメモをとり、初老の男性が金銅の仏像に見入っていた。

清澄な翡色ひしよくの地に梅竹などの象嵌ぞうがん文様もんようをほどこした高麗青磁へいの瓶、菊花をあしらった優美な螺鈿らでん経箱ぼく……。

さらに三国時代へとさかのぼり、透かし彫りの冠帽かんぼうや金銅こんどうのあでやかな耳飾りなどが並ぶ。韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議で副代表をつとめる有光ありみつ健けんはその前で足を止めると、こんな感慨を洩もらした。

「朝鮮半島で李朝最後の王室まで受け継がれていた品々。これほど貴重なものがいかにして民間の手に渡ったのか。その多くは来歴もわからず、いまだミステリアスな歴史として解き明かされていないのです」

先史時代から高麗、李氏朝鮮王朝時代に及び、個人所有の寄贈が大半を占める。有光に案内され、2000年以上にわたる歴史の遺物を見てみると、いつしかその謎に引き込まれていく。果たして、なぜここに在るのだろうか……。



有光 健



ありみつ・けん◎1951年、東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、日本アジア・アフリカ作家会議、アジア人権基金などを経て、アジアの人権問題、文化紹介に取り組む。93年から「戦後補償ネットワーク」世話人代表。2010年「韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議」を設立。現在は副代表をつとめる

植民地支配に重なる文化財流出のプロセス

朝鮮半島から文化財が流出した背景には、日韓併合に先立つ幾つかの大きな潮流がある。

20世紀初頭、朝鮮半島をめぐる日露の駆け引きはいつそう激しさを増していた。1902年、日本は官命によつて朝鮮古跡研究を開始。東京帝国大学工科大学助教授の関野貞らが、2カ月にわたつて新羅、高麗、慶州などをめぐり調査を手がける。2年後、日露戦争の最中に『韓国建築調査報告』が刊行され、日本人による朝鮮美術史研究の先駆けとなった。

現地では出土品の売買が始まり、地域住民による盗掘も横行していく。朝鮮半島全体が発掘ブームに沸き、日本への文化財搬出が勢いづいた。日露戦争が終わると、05年に日本は韓国統監府を設置し、伊藤博文が初代統監に就任。その後も関野は古墳調査を続け、発掘物は大学へ持ち帰った。

「そのあたりから文化財返還問題の歴史が始まるわけです。日本にとつては近代化を目指すための学問研究調査という名目でも、現場の朝鮮にすれば、それでお金が入り、仕事動く。いわば古墳発掘ビジネスを煽ることに、信仰の対象でもある古跡が壊されていく。同じようなことが、日本人が戦略的に朝鮮王朝を解体するプロセスの中で行われたのです」

07年には日本の圧力で李朝の高宗皇帝が退き、当時の宮内大臣によつて敬天寺十層石塔が東京帝室博物館に搬出された（のち、不法な搬出が世界から批判され、18年に返還された）。その後、館長がソウルに向いて働きかけ、大韓帝国帝室博物館を開館。10年には朝鮮全土で文化財収集の訓令を発令する。この年8月、「韓国併合条約」が調印され、朝鮮総督府が置かれた。



東京・虎ノ門の「大倉集古館」の庭園にある「利川五重石塔」。京畿道利川市の丘に立っていた双塔の1基。利川市で返還を求める運動が起きている。(写真提供 大倉集古館)

朝鮮王朝の王宮である景福宮キョンボク宮の敷地約20万坪は総督府に引き渡され、そこに新庁舎が建設されることになった。景福宮は解体され、その跡地で、植民地支配5周年を迎えた年に「朝鮮物産共進会」という大博覧会を開催。全国から観客120万人が訪れるほどの盛況で、ここに集積された美術品の中には日本へ流出したものも多くあるといわれている。

「そこで文化財がどう動いたのかという経緯をたどると、植民地支配の歴史的手法がよく見えてきます」

政治的、軍事的な国家の意図から始まり、やがて民間の財界人に委ねられていった経緯を有光はたどる。象徴的な事例の一つが、日本最初の私立美術館として設立された「大倉集古館」である。現在も東京・虎ノ門のホテルオークラの前にあり、その前庭にたたずむ「利川五重石塔」。これは京畿道の利川市の丘に立っていた双塔の1基で、大博覧会の野外展示場に飾られたものだ。

もとは東京・神田で鉄砲店を営み、幕末、明治維新の動乱期に富を成した大倉喜八郎。貿易商に転じ、日清・日露戦争では政府に重用されて朝鮮から中国大陸へ事業を展開する。建築・土木事業を請け負い、釜山駅プサン、港湾開発などを手がけて一大財閥へと急成長を遂げた。

17年には長年にわたって蒐集した美術品や土地・建物を東京市に寄付し、大倉集古館を開館。大倉は朝鮮総督府のもと景福宮の解体工事も手がけ、その内殿であった「資善堂チヤンサンダウ」も東京へ移送し、美術館として移築された。

さらに朝鮮美術の蒐集で傑出するのは「小倉コレクション」だ。20世紀初めに朝鮮へ渡り、電気事業、金融業で巨万の富を成した小倉武之助は貴重な文化財を旺盛に蒐集した。戦後、日本へ引き揚げ、財団法人小倉コレクション保存会を設立。小倉の死後、同会が解散すると、所蔵品は東京国立博物館



に寄贈された。先史時代から近世にいたるコレクションの総数は1110点。古墳から出土したときれる宝冠、副葬品などは国宝・重要文化財の指定を受けている。

こうして朝鮮半島に由来する文化財は、宮内庁や国立博物館はじめ、東京大学、京都大学などの研究室、各地の寺社・美術館にも数多く存在するのだと、有光はいう。

「韓国の文化財庁が2010年に発表したところ、日本へ流出した文化財は6万1409点。個人が所有して表へ出ないものも含めれば、おそらく実数はもつと増えるはず。しかし、誰も正確な調査をしてこなかったのです」

活発化する返還運動

そもそも文化財返還問題が浮上したのは、52年から始まった「日韓会談」においてである。返還を要求する韓国側と激しい論議が繰り返され、65年に日韓基本条約が成立。国交が正常化し、文化財に関する協定も結ばれた。1423点が韓国政府に返還されたが、国宝・重要文化財は含まれず、民間所有のものも除外された。日本の歴史学者も問題解決にならないと批判したが、具体的な動きには結びつかなかったという。

一方、韓国では市民による返還運動が活発化していく。91年には李王朝最後の皇太子妃となった日本の元皇族である李方子^{イバンジャ}女史の礼服が返還され、96年には大倉集古館に移築されて関東大震災で焼失した「資善堂」の礎石がソウルに返還されている。

さらに2006年には東京大学にあった「朝鮮王朝実録」がソウル大学へ返還され、その運動に携

日本国内各地の博物館や
大学、寺社に収められた
文化財をたどる。その実
態を調査するのがライフ
ワークとなった





わった人々が次に要求したのが「朝鮮王室儀軌」だ。王室儀礼や主要な行事を文章や絵で記録した宮廷資料で、朝鮮総督府が宮内庁に寄贈したとされる。韓国の国会も積極的に動き、日本政府も対応を迫られた。

2010年8月、菅直人首相は日韓併合100年を機に談話を発表。「朝鮮王室儀軌」を含む宮内庁所有の文書を返すことになり、日韓図書協定に調印。だが、なおも国会審議は難航し、実際に返還されたのは翌年末だった。

そのほかに韓国側からは大倉集古館の「利川五重石塔」や鎌倉の高徳院にある「観月堂」など、返還を求める動きが次々に起きている。一方、12年には長崎県・対馬の寺社から仏像2体が盗まれ、韓国へ持ち出されるという事件が発覚した。

「私たちが問題にしているのは、植民地支配の中で持ち出されたものを返すべきじゃないかということ。それ以前にも、倭寇や豊臣秀吉の朝鮮出兵によつて持ち帰ったものがあり、他方、高麗時代の仏画のように朝鮮半島で仏教が弾圧され儒教に変わっていくなかで日本へ避難する形で運び込まれたものもある。日本に在るものすべてが『略奪』されたわけではなくとも、韓国は返還を求め、日韓の嫌悪感情も相まって葛藤が広がっている。不毛な争いを避けるためにも来歴を調べたうえで、どう対処すべきか冷静に論じ合うべきだと思うのですが……」

日本近代史をアジアの視点で検証

もともと植民地支配の問題と関わったのは、70年代初め、バングラデシュ独立戦争に際して日本に



歴史・考古学関係の学者、在日の研究者らが中心となり、
月一度、連絡会議の活動を討議する例会を行っている

いた留学生らと支援活動をしたことに始まる。当時、早稲田大学の政治学科に在籍していた有光はアジアの文化と人権問題に関心をもち、日本アジア・アフリカ作家会議、アジア人権基金の事務局に携わった。

「フィリピンなどの漁村や山間部へ行き、年寄りと話していると、戦争中の話がしきりに出てくる。自分の親が日本軍に痛めつけられたとか、山の中へ逃げていたと辛い話を聞かされ、日本は戦争の後始末をどこかでしつかりやらなければいけないと思ったのです」

91年にルソン島でピナトウボ火山が噴火したときは、医師や看護師を連れて救援活動に駆けつけた。その際、フィリピンで最初に従軍慰安婦として名乗り出た女性に出会い、日本での訴訟活動を支援するなかで「戦後補償ネットワーク」を設立。戦後補償、慰安婦問題と関わるほどに韓国・朝鮮の問題にも直面し、植民地支配の歴史につき当たる。その先に文化財返還の問題があった。

きっかけは、前述した「朝鮮王室儀軌」の返還運動にふれたことによる。韓国の僧侶・慧門らを中心とした市民団体が返還を働きかけるため、来日した折に東京で知り合った。

「最初は『朝鮮王室儀軌』といわれても何のことかわからない。そもそも、なぜ宮内庁にあるのかも不思議でした。でも、それを調べていくと、日本がこの100年、朝鮮半島とどう向き合ってきたか、近代史における光と影が見えてくる。日本の学者も文化財問題にはほとんど手をつけなければ、過去に対する責任の問題は受け身でなく、積極的に検証されるべきなのです」

茨城大学名誉教授の荒井信一はじめ、歴史・考古学関係の学者、在日の研究者らが中心となって、10年に「韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議」を設立。日韓併合100年を機に、各地に散在する文化財の実態調査に乗り出した。



活動のための費用として(財)韓哲文化財団(当時)の助成金を申請し、まず1965年までの日韓会談で論議された各文化財の再調査を実施。当時、日韓会談において韓国側の文化財担当の首席をつとめた黄寿永教授が作成した『日帝期文化財被害資料』の復刻・翻訳を手がけ、日本語版の冊子を出版した。さらにデータベース作成のための調査を進め、インターネットで情報発信を開始。研究成果はシンポジウムなどを開催して発表してきた。

13年11月、文化の日には韓国の文化財庁長と日本の文化庁長官に提言を送付した。1965年に調印された協定から48年を経ても、民間所有の文化財返還はほとんど進んでいない。そこで生じた葛藤と対立を解きほぐすには政府間の対話を重ね、紛争解決のためのルールを作ることを提案したものだ。「それには時間をかけた歴史的な検証が必要で、簡単にできることではない。100年を経て流出したものの検証は、100年以上かかるでしょう」

そうした覚悟の根底には、未来を担う若い世代に歴史をきちんと継承したいという願いがある。身近にある寺社などを訪ねて、保存されている文化財の来歴を聞くことからはじめ、高校生や大学生でも参加できる市民のネットワークになればと。それが自国の文化への関心にもつながる。

「文化財とは民族のアイデンティティに関わるもの。だからこそ、返すべきものは返して、元の場所に置かれるのが一番いいはずだ」

その思いこそが深い根となって広がり、壮大な時をたどる活動の幹を支えている。(文中敬称略)

「身体で表現すること」に魅せられて

安葉

日本女子体育大学体育学部運動科学科

6歳から母の応援で始めたバトントワリング。
高校2年で全国の高校生の頂点に立った。
チアリーディングに転身した大学では
チームが世界大会優勝という快挙を果たす。
国際舞台で、父のルーツである韓国チームと交流。
「スポーツ分野で日韓の架け橋になろう」
新たな夢に、安は胸を躍らせている

文〓萩原智代
写真〓渡辺誠



「ゴー、グリーンズ！」

エールが会場に響く。円陣が開き、華やかなレオタードを身に着けた22人が、それぞれのスタートポジションに就く。音楽が流れ、オープニングで見事な宙返りをキメるのが安葉だ。

現在、日本女子体育大学2年生、ソングリーディング部「グリーンズ」に所属する。ソングリーディングはチアリーディングから派生した団体競技ダンスだ。

体を使って「表現すること」に魅せられ、幼少期に始めたバトンから、ソングリーディングに種目を変えて、2013年5月、米国フロリダで行われた世界大会で優勝を果たした。

在日3世の父と日本人の母の間に生まれて

安葉は1993年、在日韓国人3世の父・安泰行あんやすゆきと日本人の母・安美和あんみわの間に生まれた。一つ下の弟・皓太こうたがいる4人家族で、物心つく前から千葉県に住む。

父・泰行は56年、在日コリアンが多く住む兵庫県神戸市長田区で生まれた。祖父母は在日2世。祖父が東京を基盤に石油卸業を営んでいたことから、父は東京で育った。きょうだい4人全員が日本の公立の小・中学校に通ったため、韓国語は話せない。

ところが父は高校入学時に、通名の「安藤」ではなく、戸籍上の姓「安」を名乗ることを選んだ。正式な書類に姓を2つ書くことは自身のルーツを否定しているような気がしたのだろう。

文武両道に優れた父は中央大学文学部に進学。アメリカンフットボール部に所属し、クォーターバックとして鳴らした。葉の高い身体能力は父譲りだ。父が就職活動を始めたころ、親族から「まともに



安 菜



あん・しおり◎1993年兵庫県生まれ。6歳でバトンを始める。小学校高学年から頭角を現し、高校2年で「ジャパンカップ 全国高等学校バトントワリング選抜大会」のバトントワリングの部で優勝。現在は日本女子体育大学でソングリーディング部に所属し、2013年「チアリーディング&ダンス世界大会」でチーム優勝を果たした



母親似の大きな目が印象的。おっとりしているが、闘志を内に秘めた性格は父親似だ



就職できると思うな」と忠告された。親族の心配をよそに外資系保険会社に就職が決まった。就職で差別を受けた記憶はないそうだ。

母・美和は1963年、兵庫県伊丹市生まれ。父・泰行が保険会社の転勤で兵庫県に住んでいたときに知り合った。地元・関西学院大学のアメリカンフットボール部の選手に憧れていたこともあり、父に惹かれたのは必然だったのかもしれない。

結婚に当たって母方の周囲からの反対は特になかったそうだ。美和の祖父母は共に中学校教師で、在日韓国人が多く住む尼崎市の夜間中学校で教えていたこともあり、在日韓国人に偏見がなかった。一方、父は長男だったことから、父方の祖父母は在日韓国人との結婚を望んでいた。それでも母に会うと、明るい性格が気に入り、結婚に賛成してくれたそうだ。

葉が初めて韓国とのつながりを意識したのは、2002年の日韓共催サッカー・ワールドカップで安貞桓選手が注目されたときだ。

家族4人でテレビを見ていたとき、「うちと同じ苗字だけど親戚？」と両親に聞くと、「親戚じゃないけど、パパは安貞桓と同じ韓国人なんだ」と父が何気なく答えたので、そのときはあまりピンとこなかったという。翌年、家族でハワイ旅行に出かけたとき、父のパスポートだけが緑色だったので、弟がその理由を父に尋ねると、同じ答えが返ってきた。このとき、やっと姓のルーツが腑に落ちた。

「子どものころは苗字のせいで『ハーフ』とか『クォーター』と聞かれるのが嫌だった。自分の中に韓国を意識できるものがなかったのだから『日本人』って答えてた。そうすると『ふくん』で終わり。それ以上、聞いてくる子はいなかった。でも最近『うん、ハーフ』って答える。『カッコいい』って言われるから」と苦笑いする。「安」という姓のおかげで、今は羨望のままざしで見られる。それに





身長は150センチ。小柄
だが鍛え抜かれた体には
しっかりとした筋肉が付
いている

戸惑いながらも、うれしくもあるようだ。

フロアの隅から表彰台の頂点に

安がバトントワリングを始めたのは6歳のとき。近所の友だちが通うバトン教室「MAKUHARI ミルキートワラズ」の体験教室に参加したことがきっかけだ。華やかな衣装をまとい、音楽に合わせて身体を自在に操る姿に魅せられた。

バトンは新体操、バレエ、フィギュアスケートの3つの要素を持つ。柔軟性や筋力などに加え、リズム感や集中力も必要とされ、なじみもあまりないことから競技人口は少ないが、日本のレベルは高く、世界大会の優勝者も多い。

小学2年までの安は「レギュラークラス」で練習は週3回程度。3年生になるとコーチに見込まれ「選手クラス」に入る。以来、平日は夜6時から9時まで、土日は朝9時から夜9時まで、1年360日以上、来る日も来る日も練習した。

「遊びよりバトン。子どもらしくなかつたかも」
「真つ直ぐな視線から、芯の強さがうかがえる。」

選手クラスでは誰もがライバル。人を押しつけてでも前に出る勝気な少女が集まっていた。そんな中で安は、フロアの隅でウォームアップを始めるような子だった。

「自分よりうまい子はいっぱいた」
バトンは見せるスポーツだ。審査員にアピールできなければ勝てない。引つ込み思案な安の表現力



小学6年生で「関東バトントワリングコンテスト選手権」で優勝したとき。ピンク色の衣装が良く似合う。バトンの衣装は全て母の手作りだ。
(写真提供 安菜)



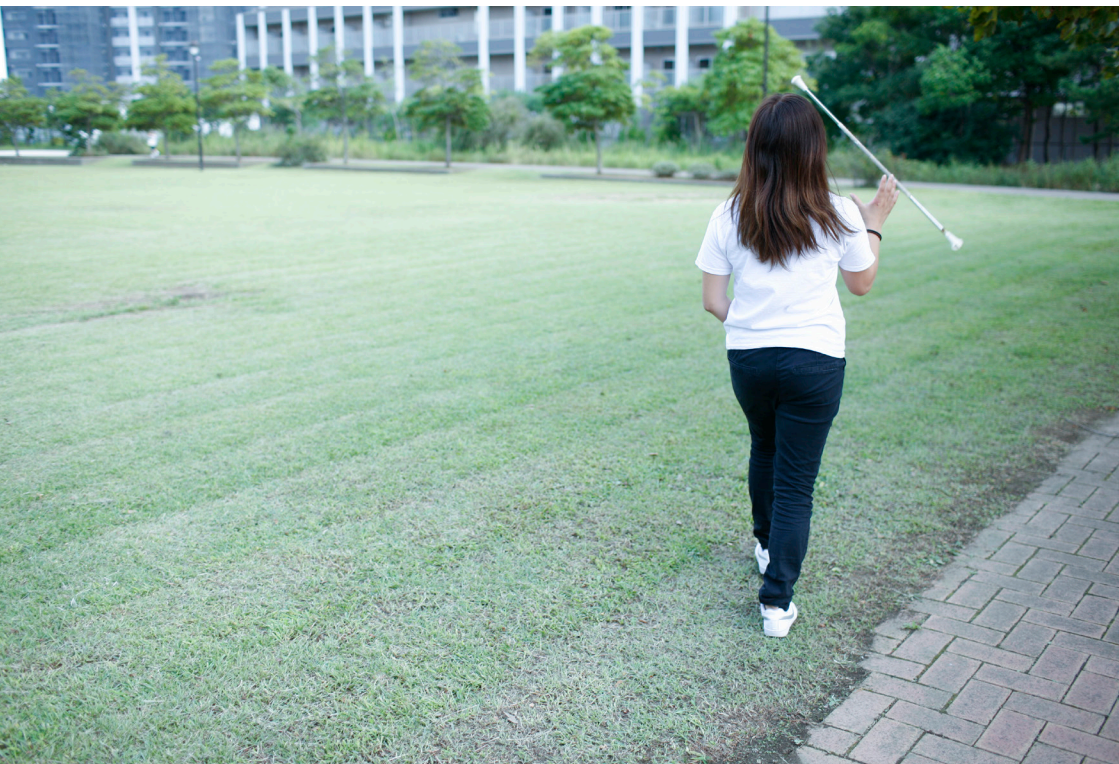
フロリダで開催された「チアリーディング&ダンス世界大会」で優勝した際に授与された金メダル（右）と出場記念メダル（左）



バトンで鍛えた「表現力」は抜群だ。カメラの前でのポーズもバッチリ



安 葉



表現力と振り付けで見せる演技が得意。「バトンの早回しは苦手だったなあ……」

を鍛えるため、母は練習をビデオで撮影し、審査員の目線で指摘した。

全身が映る大きな鏡を自宅のリビングに置き、家でもバトンなしで表現力やアピールの練習をした。その鏡は今も同じ場所にある。

そんな母娘の努力が報われる瞬間がやってくる。安が小学6年の2005年6月、関東バトントワリングコンテスト選手権で優勝したのだ。

バトンの個人競技は主に3種類ある。スピードと技術を競うソロトワール、正確なバトンさばぎと動きを競うソロストラット、表現力を重視するダンストワールだ。そのうちソロストラットとダンストワールの2種目で、安は関東の小学生のトップに立った。

大会の映像を見せてもらおうと、高度な技を駆使する選手、力強い演技をする選手などがいる中、淡いピンクの衣装をまとった安は、流れるように踊っていた。その動きは優雅で女性らしい。

「表彰台から駆け降りて、母と抱き合って泣いたことを今もよく覚えています」と目を細める。

中学に入ると、関東大会ではコンスタントに入賞するようになっていた。そして中学2年の2008年3月、「全日本バトントワリング選手権大会」のダンストワール中学校部門で4位に入賞した。

やっとフロリダに

アスリートに囲まれて、精神的な強さを身に付けてほしいという母の勧めで、高校はスポーツエリートが集まる千葉・船橋市立船橋高等学校商業科に進学した。



ところが学校の名譽をかけて闘う部活に所属する学友と、外部のバトンクラブに所属する自分との違いが、安を苦しめることとなる。

「学校のサッカー部やバレー部が全国大会に出ると、全校を挙げて応援に行く。どんなに強い部でも試験前や行事のときは練習が休み。でも私のバトンクラブは試験でも休めないのがつらかった。あのころは『普通の高校生になりたい』が口癖でした」

入学当初は高校生活とバトンクラブの両立に苦しんだが、両親や友だちのはげましが安を奮い立たせた。

「全国大会出場が当たり前の学校に通う一生徒として、学校の名に恥じない成績を残したい」と考えるまでに成長していた。

そして迎えた高校2年の2010年9月、「ジャパンカップ全国高等学校バトントワリング選抜大会」のバトントワリングの部で優勝。全国の高校生の頂点に立った。翌年の国内予選で3位以内に入れば、米国フロリダで開催される世界選手権の出場権が手に入るところまできた。

全国大会レベルのバトン選手になると、レッスン代、振り付け代、衣装代、交通費など年間100万円近くの費用がかかる。世界大会出場となれば、さらに負担が増す。

ちょうどそのころ、父が仕事関係で(財)韓哲文化財団(当時)の助成金を知る。安は申請し、授与された。明けて11年3月下旬、世界選手権予選が大阪で行われることになっていった。ところが東日本大震災が発生し、その影響で協会が大会の中止を決定。安のフロリダ行きは夢と消えた。

気を取り直して臨んだ高校生活最後の年、全国大会までは進んだものの、世界大会出場は果たせなかった。

大学は、それまでのバトンの成績が評価され、アスリート推薦で合格。身体で表現することは好きでもバトンの技術に限界を感じていた安は、大学ではソングリーディング部に入部した。

「バトンをやっていた自分にしかできない技をソングリーディングに生かしている。今は部活は大変でも、仲間と一緒にチームのために頑張るのが楽しい。憧れていた普通の学生生活ができています」と満面の笑みを浮かべる。

13年5月、安はフロリダで開催された「チアリーディング&ダンス世界大会」に出場。日本女子体育大学はジャズ部門で優勝を果たした。高校2年の春、助成金を受けて行くはずだったフロリダの地

。「今回の大会がフロリダだったのは、偶然ではない気がします。バトンからソングリーディングに種目は変わったけど、助成金をいただいて目指した目標に、やっとたどり着くことができたと思います」
チアリーディングの世界大会で米国を訪れた昨年5月に続き、9月には東京で行われたアジア選手権で韓国や台湾の選手たちと交流した。

「韓国のチームは日本とは違う種目ですごい演技をしていました。アクロバティックな種目に強い」
安は初めて海外のアスリートに触れたばかりだ。韓国と自身とのつながりを社会の中で意識しているのはこれからだろう。

目標に向かって娘を引っ張ってきたしつかり者の母と、二人を静かに見守ってきた父。そんな両親の愛情に包まれて、真っ直ぐ、すくすくと育った安菜。

「日韓の架け橋になるような分野で、スポーツに携わる仕事に就きたい」と目を輝かせる。

(文中敬称略)



安 葉



子どものころから「生活の全てがバトンだった」が、高校時代にサッカー観戦が好きになった。長谷部誠選手のファンだという（自宅リビングで）

青鶴5
學術論文集

古澤義久

西垣安比古

宣元錫

下川正晴

新石器時代の 韓半島と東北アジアの関係

長崎県埋蔵文化財センター

東アジア考古学研究室

古澤義久

I. はじめに

韓半島新石器時代の新石器時代を特徴づける土器は丸底土器（櫛文土器）である。韓半島中西部では、新石器時代前期からみられ、新石器時代中期に、韓半島南部地域や東海岸へ展開する土器である。この丸底土器文化は北辺の清川江流域で遼東地域系の極東平底土器と対峙しており（韓永熙1983）、咸鏡南道で豆満江流域系の平底土器と対峙している（徐国泰1999）。そして、南辺では対馬海峡で縄文土器と対峙している。さらに、黄海を挟んで膠東半島の新石器時代土器とも対峙しているという見方もできよう（図1）。韓半島丸底土器は南

北で平底の土器に挟まれ一種独自の様相を呈しているが、この丸底土器が周辺の土器文化とどのような関係を持っていたのかを検討する。なお、それぞれの地域の土器編年の併行関係は表1のとおりである。

II. 韓半島丸底土器と極東平底土器

(1) 清川江流域

大同江流域に隣接する清川江流域は元来、細竹里から之字文土器が出土するように極東平底土器の分布範囲である。この地域では堂山下層期（新石器時代中期）になると、韓半島丸底土器との影響関係がみられるようになる。堂山下層では、沈線による組帯文、短斜沈線文、横

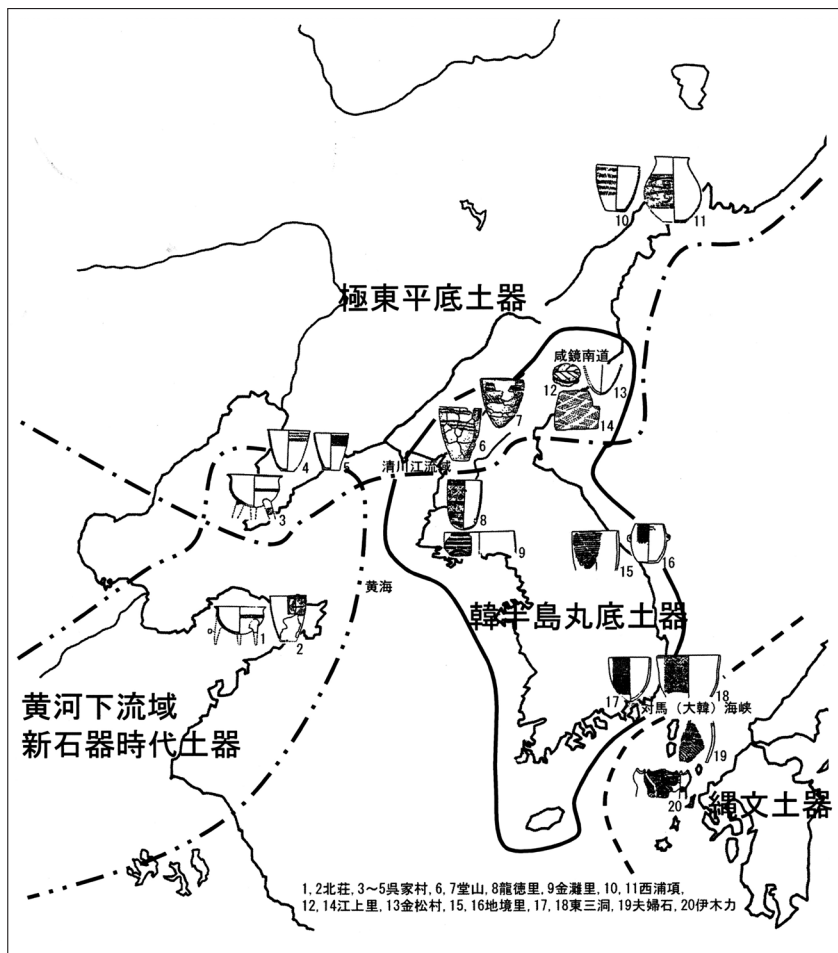
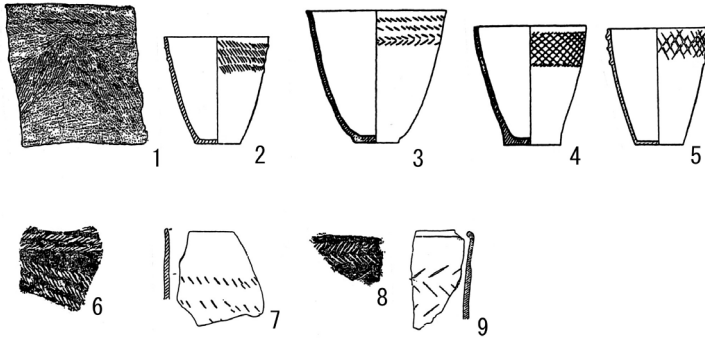
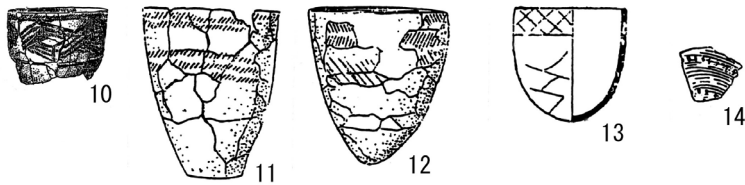


図1 韓半島をとりまく新石器時代土器文化

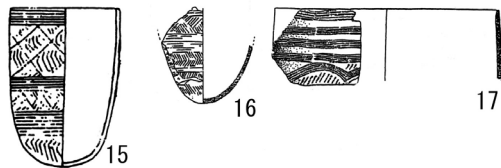
遼東地域・韓半島西北部



清川江流域



大同江流域



1, 2, 5郭家村, 3, 4吳家村, 6, 7閻陀子, 8蚊子山, 9美松里下層, 10~14堂山下層, 15龍德里, 16, 17金灘里1期層

(S=1/10, 但し破片はS=1/5)

図2 清川江流域と周辺地域における新石器時代中期の土器

や金灘里1期以前の時期に編年される。虹文土器は大延坪島、毛伊島下層など京畿湾北部でもみられ、永宗嶋ヌンドウル、鉄原軍彈里など京畿湾南部や嶺西地域でも客体的にみられる。

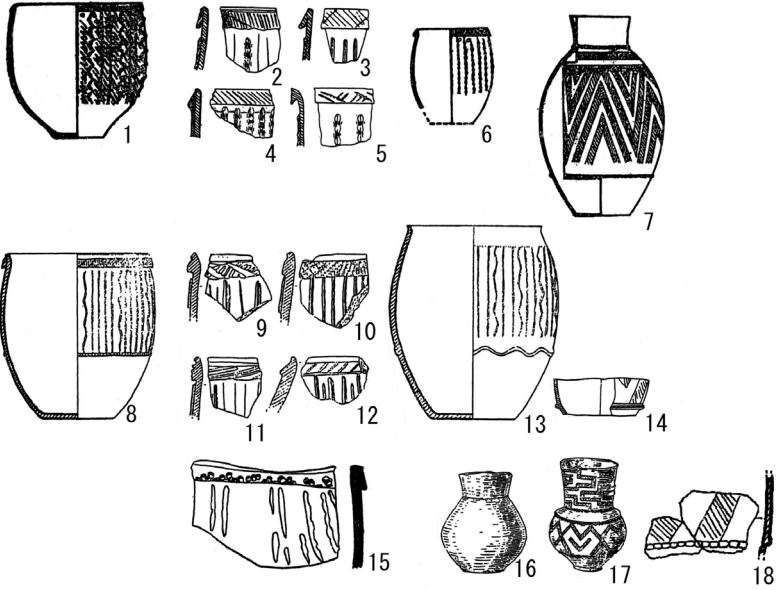
注目されるのは堂山下層では、平底の深鉢のほか丸底の深鉢が共存して出土することである(図2・12、13)。丸底土器には横走魚骨文や斜格子文が胴上部に施文される。丸底は、大同江流域系の虹文土器等が出土していることから、在地に系譜があるのではなく、大同江流域からの影響で成立したものと推察される。一方で、白弘基が指摘するように(白弘基1994)、文様については横走魚骨文や斜格子文といった文様モチーフ、密に斜線を埋めるといった施文技法、胴上部に文様帯が限定されるといった施文位置から極東平底土器の系譜である可能性が高い。その場合、堂山下層の丸底土器は、器形は韓半島丸底土器で、文様は極東平底土器という折衷土器であると考えられる。細竹里でも同様に平底土器と丸底土器の共存が認められる。このように清川江流域では、極東平底土器を基盤に南から丸底を受け入れ、平底と丸底が共存したり、折衷土器が生まれるという状況がみられ、極東平底土器と韓半島丸底土器の双方が影響して様式を

形成する。

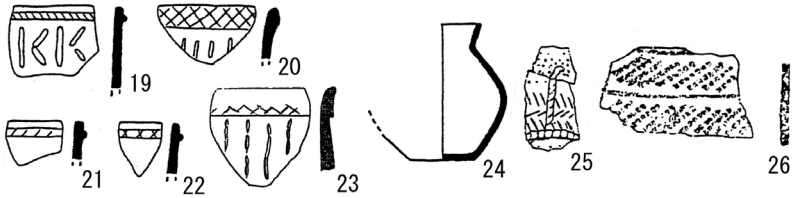
また、器種からみた場合、少数器種が選択的に持ち込まれるような状況ではなく、土器の中で最も基本をなす深鉢に折衷土器がみられることから、接触の度合いの強さを窺い知ることができる。

堂山下層期に続く堂山上層期(新石器時代後期)では遼東地域・韓半島西北部に広く分布する偏堡類型(図3・1~18)の影響が強い土器群が展開する(図3・19~25)。この時期の清川江流域は遼東地域との強い共通性を示し、韓半島丸底土器圏との折衷土器は確認されない。南京1期に特徴的な重冪系の沈線文が施された土器片(図3・29)が細竹里でも出土している(図3・26)とことから大同江流域とも交流はあったと考えられるが、単発的な影響関係で、折衷様式が成立していた前段階ほど強い影響関係にはない。一方で、大同江流域には遼東地域・韓半島西北部からの影響がみられるようになる。南京37号住居址出土の壺(図3・28)の文様は、頸部と肩部の間に小さな斜格子文を入れ、その下に斜線を入れ、雷文状になるように磨り消している。このような文様モチーフは、平安北道(鴨綠江下流域)の双鶴里の壺(図3・17)や折縁罐にみられるモチーフで、青燈邑でもみ

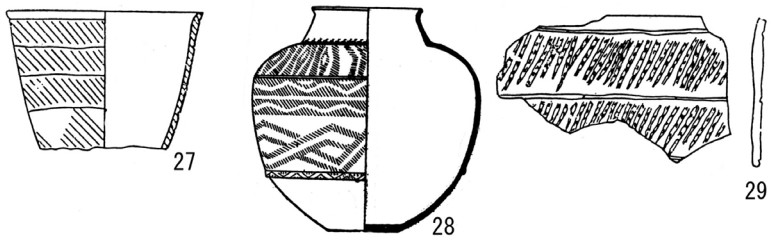
遼東地域・韓半島西北部



清川江流域



大同江流域



1～7東高山, 8, 13三堂村, 9～12文家屯, 14西泉眼, 15～17双鶴里, 18盤弓里, 19～25堂山上層, 26細竹里, 27～29南京1期層
(S=1/10, 但し破片はS=1/5)

図3 清川江流域と周辺地域における新石器時代中期の土器

られる。また、磨消すりけしにより文様を描く技法は偏堡類型の壺でしばしばみられる技法で、偏堡類型の壺には胴下部に隆帯をもつものも多い(図3・7、14、18)。

続く大同江流域における南京2期に併行する清川江流域における土器の様相は資料が不足しており不明瞭である。大同江流域の南京2期においても南京31号住居址出土の壺のように遼東地域・韓半島西北部と関連の深い土器が出土しており、さらに金灘里2期層や清湖里オクホリで出土した胴下半部に刻目隆帯きりなみりゅうたいがめぐる無文の甕かみは遼東地域・韓半島西北部の影響が考えられることから、清川江流域でも堂山上層期に引き続き極東平底土器からの影響が強く及んでいたと推定される。

以上を総合すると、堂山下層期の清川江流域では極東平底土器と韓半島丸底土器の双方の影響下のもと折衷様式が生み出され、緩衝地帯のような役割を果たしていた一方、堂山上層期以降、清川江流域が遼東地域・韓半島西北部からの強い影響下に入り、緩衝地帯としての役割を果たさなくなり、遼東地域・韓半島西北部から大同江流域に対して、直接的に、より強く影響が及ぼされるように変化したと考えられる。

これは、異なる土器文化の接触地帯においては折衷様

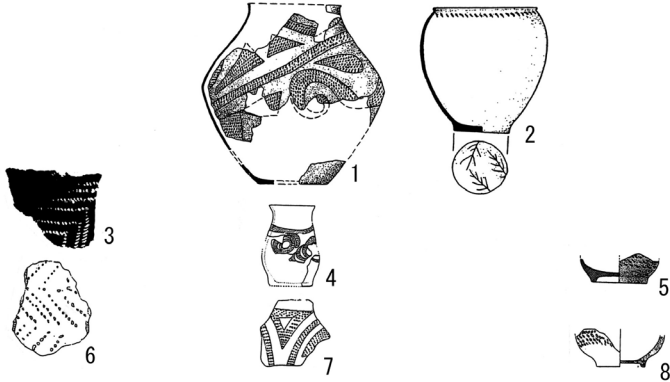
式が成立することもあれば、陸続きであっても折衷様式は形成されず、比較的片方の影響力が強く反映することもあるということを示している。このことから同じ接触地帯であっても時期によつて、あるいは何らかの要因によつて土器文化の交流の在り方は一樣ではないことを知ることができる。

(2) 咸鏡南道

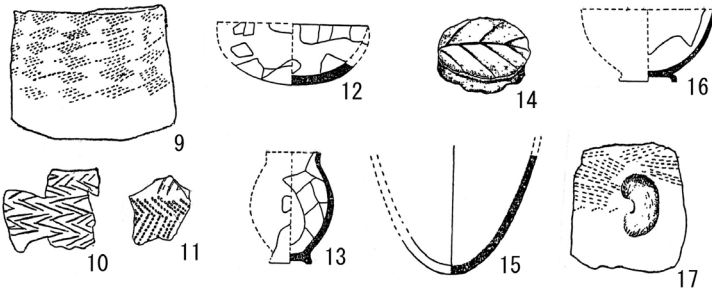
咸鏡南道新浦市江上里シンポシオンサンニでは1956年、北韓の科学院考古学及び民俗学研究所により試掘調査がなされ、1975年から1976年にかけて発掘調査が行われた。ここでは、丸底土器と平底土器が相伴して出土している。

文様は特徴的な点列文てんれいぶんによる菱形集線文や波線、横走魚骨文、沈線による横走魚骨文等が施される。1957年の調査で出土した土器には点列文と沈線文が同一個体に施文された例(図4・11)があることや点列文も沈線文も胎土は同じであることから、点列文と沈線文という文様施文の差異はあるが、時期が比較的纏まとまった組成であると考えられる。そのほかにも把手とってのついた点列菱形集線文土器や木の葉文のある平底底部なども出土している。器種は平底深鉢けんせくの他、平底で圈足のある壺や碗、丸底の

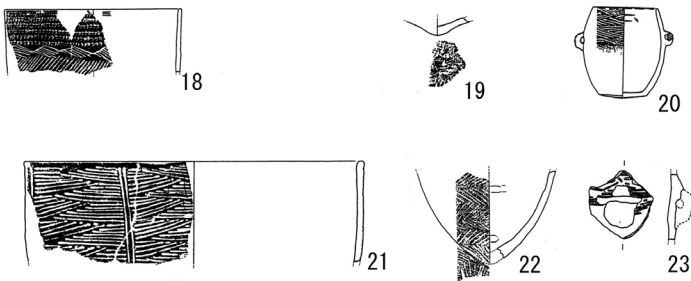
南沿海州・豆満江流域



咸鏡南道



嶺東地域



1, 2才レニ一 I 23号住, 3~5興城, 6~8黒狗峯, 9~14, 16, 17江上里, 15金松村, 18~20地境里1号住, 21~23地境里6号住
(S=1/10, 但し破片はS=1/5)

図4 咸鏡南道と周辺地域における新石器時代中期の土器

深鉢、碗、把手附壺が出土している。同様の組成の土器は咸鏡南道端川市金松村でも確認され、江上里類型として設定されている(図4・9～17)。

この江上里類型の相対年代について報告者の변사성・안영준は西部地域との比較から智塔里Ⅱ地区との関連を示し、豆満江(図們江)流域との比較では深鉢の文様の類似から西浦項2期との、深鉢の施文部位が胴上半部に限定されることや圈足の存在から西浦項3期との関連を示しているが、渦文・雷文土器がみられないことから西浦項3期以前に併行すると考えている。一方、徐国泰は胎土に弓山2期にはみられない砂を混入する点、無文の土器の比率が高い点、圈足附土器が存在する点から雲下(弓山)文化3期、西浦項文化3期に併行すると考えている(徐国泰1999)。

白弘基は嶺東地域でも地境里などで江上里類型の土器が出土していることを指摘しており(白弘基1995、1996)、林尚澤は嶺東地域の地境里や鰲山里上層で江上里類型の土器が認められることから漢江流域での中期に併行するとみている(林尚澤2001、2004)。嶺東地域の新石器時代土器の編年を子細にみた場合、新石器時代中期の地境里1号住居址期(図4・20)から地

境里6号住居址期(図4・23)で確認されることから江上里類型の韓半島中部地域との併行関係は新石器時代中期となり、豆満江流域との併行関係は徐国泰らが指摘したように西浦項3期と考えられる(古澤2006)(註1)。なお、江上里類型と関連があると考えられる土器はこのほかに池辺洞等でも確認される。

嶺東地域で江上里類型の土器が客体的に出土していることから、咸鏡南道と嶺東地域に代表される丸底土器分布圏では、一定の交流があったものと思われ、江上里類型の丸底土器(図4・15)は韓半島丸底土器文化の影響で成立したとみられる。一方で、江上里類型より北方の豆満江流域では極東平底土器が分布しており、西浦項Ⅲ期層、黒狗峯、鳳儀面、興城等で出土した点列文(図4・3、6)、西浦項Ⅲ期層、黒狗峯、興城等で出土した圈足附土器(図4・5、8)、西浦項Ⅲ期層やオレニー1(オレニーA)23号住居址で出土した木の葉文の底部(図4・2)等から豆満江流域の平底土器とも関連性があったと推察される。江上里類型は丸底土器と平底土器が共存して安定した組成を成し、韓半島丸底土器と極東平底土器が相互に影響することで、一つの様式が形成されていくことが看取される。

咸鏡南道では資料が不足しており、江上里類型の次の段階の土器様相は不明である。

Ⅲ. 韓半島丸底土器と膠東半島新石器時代土器

縄文土器および極東平底土器文化以外で、韓半島の丸底土器文化と交流を持つことができる可能性がある他の土器文化としては、韓半島と黄海を挟んで対峙する膠東半島の土器文化が挙げられる。山東省萊成市成山頭—仁川広域市甕津郡大青島間の直線距離は約178 kmで、間に島は存在しない。

新石器時代の韓半島と膠東半島の関係については古くから注目されてきた。1930年、膠東半島の龍口貝塚を調査した駒井和愛は、大同江下流域の龍薩里との比較の必要性を述べたが（駒井1931）、資料が不十分で具体的な検討には及ばなかった（註2）。

その後、具体的な検討としては、初期農耕について関連が想定された。大貫静夫は弓山文化の農耕を考える上で、黄海を挟んだ関係について言及し（小川1982、大貫1989）、宮本一夫は新石器時代のコメの伝播ルートとして黄海直接横断ルートを想定したことがある（宮

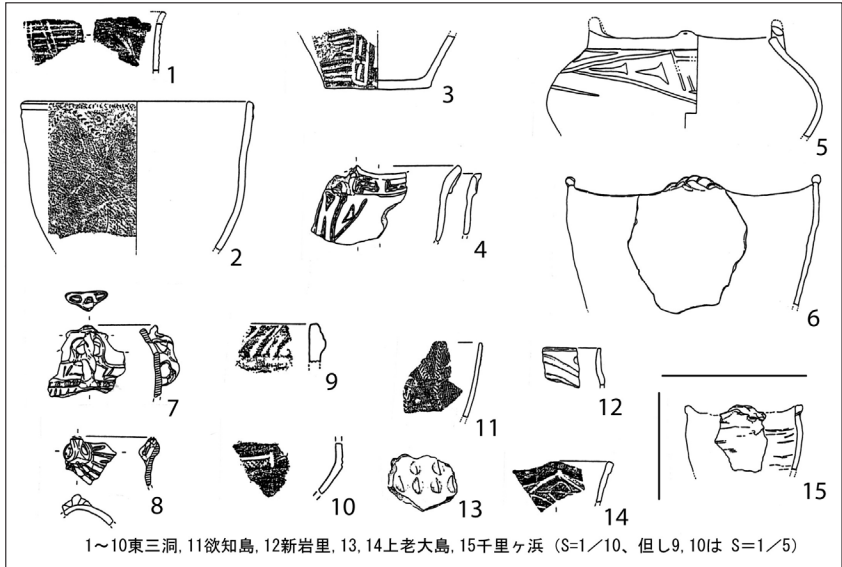
CHEONGHAK

本2003）（註3）。

土器文化については、王錫平と王茂盛は弓山1期の土器に雲母、滑石、貝殻を混入する技法が膠東半島と一致するため、一定の文化交流がみられると述べた（王錫平・王茂盛1996）。樂豊実は丸底土器文化の後李文化を継承した北辛文化と弓山文化の土器について器形では丸底器、平底鉢、文様では縦走魚骨文、横走魚骨文、菱形集線文という共通の要素がみられることを指摘し、偶然の一致である可能性と両地に伝播や影響関係がある可能性の2通りの可能性を提示した（樂豊実1997）。

樂豊実らが示した土器の共通性はいずれも土器の一要素の比較で、器種、器形、文様のそれぞれが完全に共通している例はなく、影響関係があったとは断定できない状況にあると考えられる。これまでのところ韓半島西海岸で膠東半島新石器時代土器の搬入土器や模倣土器は発見されておらず、また、膠東半島でも同様に韓半島丸底土器や模倣土器は発見されていないため、韓半島—膠東半島間の土器文化交流は確認できない。

Ⅳ. 韓半島丸底土器と縄文土器



1~10東三洞, 11欲知島, 12新岩里, 13, 14上老犬島, 15千里ヶ浜 (S=1/10、但し9, 10は S=1/5)

図5 韓半島南海岸地域出土縄文系土器と関連資料

1. 韓半島丸底土器文化分布圏で出土する縄文系土器
 (トシサムドン) 東三洞では縄文系土器として、轟B式、曾畑式(図5・1)、船元II式(図5・2)、阿高式・坂の下式(図5・3)・8)、北久根山式(図5・9)、北久根山式または太郎迫式(図5・10)等の型式に対比される土器が出土している(註4)。東三洞以外では安島で苦浜式、轟A式、型式不明縄文系土器、大浦で轟B式、煙台島で轟B式、春日式、黄城洞で曾畑I式、欲知島で船元式、新岩里で坂の下式、上老犬島上里で坂の下式、中津II式が出土している。

河仁秀によると縄文時代中期の縄文系土器は胎土、器形、施文形態などからみて全て九州から持ち込まれたものであるという。また、縄文時代後期の縄文系土器については他型式の土器に比べて数量が多く型式も多様で、特定地域に限って出土する傾向があるが、大部分が九州から搬入されたものとみられ、在地で縄文系土器の影響で製作されたものはみられないという(河仁秀2004)。

東三洞等で出土した縄文系土器について宮本一夫は日韓の様式の折衷土器ではなく、縄文系土器のカテゴリーで作ろうとしながら、本来の規範を逸脱した土器であると指摘している(宮本2004)。水ノ江和同も、視覚的

な情報だけでは模倣できない技術的な様相が認められることから九州縄文人が製作したものであることは間違いないが、器形や文様における微妙な相違は長期滞在した九州縄文人の記憶が薄れたためか、あるいは次世代への情報伝達に際してその情報が希薄になっていった結果であり、韓半島の土器には縄文土器の影響はみられないと評価している（水ノ江2003、2007）。

2. 縄文土器分布圏で出土する韓半島系土器

縄文時代早期から前期前葉（轟B式期）の遺跡としては対馬島の隆起文土器が出土する越高（図6・2、3）、越高尾崎（図6・5、6）、夫婦石（図6・7）が挙げられる。越高や越高尾崎は出土した過半の土器が韓半島系の土器であるという特異な遺跡であり、韓半島からの渡航集団が居住した結果であると考えられる。対馬島以外では杵岐島の松崎で多くの縄文土器とともに隆起文土器（図7・1）が1点、五島列島の頭ヶ島白浜出土赤彩沈線文土器搬入品1点（図7・2）出土したのみである。この時期の対馬島では韓半島の隆起文土器集団の居住遺跡が認められる。隆起文土器の集団は対馬島を最終目的地とし、対馬島を中心に交流を行っていたものと考えら

CHEONGHAK

れる。杵岐島や五島列島といった対馬島以外の島嶼で確認されている隆起文土器は対馬島を介した交流の結果であると筆者はみている。

韓半島新石器時代土器が出土した事例としては対馬島のヌカシ（図6・15）や夫婦石の事例が挙げられる。夫婦石では押引横走魚骨文（図6・11）、斜格子文（6・9）、沈線文、押点文（図6・12）、粘土痕＋沈線文（図6・13、14）などの多様な瀛仙洞式土器の文様がみられ、器種としては深鉢、鉢・碗類のほか壺（図6・10）も確認されており、文様上も器種組成上も瀛仙洞式土器の一般的なセットが出土しているものと把握される。また、瀛仙洞式の初期段階の土器（図6・8）も出土し、隆起文土器期と瀛仙洞式土器期の移行期にも間断なく対馬島で交流が行われたことを示す。この段階の夫婦石の土器組成は過半が韓半島系土器で越高・越高尾崎と同様に韓半島からの渡航集団の居住地として利用されたものと考えられる。対馬島で確認される瀛仙洞式土器は全て搬入品である。この時期には九州島で西唐津式が成立する。この西唐津式の横走魚骨文、刺突文、斜格子文を含む沈線文と押点文の複合文といった碗・鉢または深鉢にみられる文様は韓半島の瀛仙洞式と強い影響関係がある（水ノ江1

988、李相均^{イサンギョ}1988ほか)。しかし、対馬島の夫婦石でみられるように西唐津式に影響を与えた押引横走魚骨文や斜格子文・押点複合文が施文された深鉢や碗・鉢類のみが単体で搬入されたのではなく、瀛仙洞式の器種組成全般・多種多様な文様を持つ土器がまとまって搬入されており、瀛仙洞式土器の全体像は西北九州の集団にも把握できた可能性が高いにもかかわらず、西唐津式の中で瀛仙洞式と共通する要素は、深鉢または碗・鉢類の中の一部の文様のみで、その他の文様、器種組成、胎土、器面調整においては西唐津式と瀛仙洞式は全て異なっている。このため、西唐津式土器を製作した集団は、韓半島南部の土器の要素を全て受け入れるのではなく主体的に選択し、採用したものとみられる。

縄文時代前期後半（曾畑式期）の韓半島系土器としては、対馬島の夫婦石や佐賀貝塚で水佳里Ⅰ式初葉土器の搬入品が出土している（図6・19、20）。調査面積があまりに狭小であるため判断としないが、夫婦石では曾畑Ⅱ式と水佳里Ⅰ式初葉土器の出土地点がやや異なり、同一遺跡内での棲み分けがなされた可能性もある。九州島では韓半島系土器はみられない。

縄文時代中期（船元式期）阿高式期）では対馬島で韓

半島系土器が過半を占める夫婦石（図6・25、30）がみられるほか、杵岐島の松崎で韓半島系の太線沈線文土器1点（図7・3）がみられるが、九州本島では基本的に搬入土器は認められない。依然として対馬島を中心とした交流であり、その余波がわずかに杵岐島に及んでいると評価される。また、この時期の縄文土器にも韓半島からの影響は認められない。

縄文時代後期初頭・前葉（坂の下式期）では対馬島の吉田（図6・37、39）やヌカシⅡ層（図6・33、34）などで坂の下式土器と共に水佳里Ⅲ期の二重口縁土器や把手附土器などの搬入品がある程度まとまって出土する。吉田やヌカシは調査面積が狭小で、出土土器資料も細片が大部分であるにもかかわらず、一定の比率で韓半島新石器時代土器が出土している。但し、吉田やヌカシでは縄文土器も出土し、客体的に韓半島土器が出土しており、前段階の夫婦石で圧倒的な水佳里Ⅰ・Ⅱ式が出土する様相とは異なり、交流の形態が変化したものと考えられる。対馬島以外での韓半島系土器は、小川島で水佳里Ⅲ期の把手附壺の搬入土器（図7・5）が1点、九州島では唯一の韓半島系土器の事例として桑原飛櫛^{くまがら}で水佳里ⅡⅢ期の把手附壺の模倣土器（図7・4）1点を数

縄文時代	縄文土器		韓半島新石器時代土器		隆起文土器期
	越高尾崎	越高	越高尾崎	夫婦石	
縄文時代前期前葉	越高尾崎	越高	越高尾崎	夫婦石	瀧仙洞式期
縄文時代前期中葉	越高尾崎	又カシ	越高尾崎	夫婦石	
縄文時代前期後葉	夫婦石	又カシ	越高尾崎	夫婦石	瀧仙洞式期後半・水住里I期初葉
	佐賀	越高尾崎	佐賀	夫婦石	
縄文時代中期	佐賀	佐賀	佐賀	夫婦石	水住里I期・II期
	夫婦石	又カシ	又カシ	夫婦石	
縄文時代後期初頭・前葉	又カシ	吉田	又カシ	夫婦石	水住里III期
	多田越	西加藤	多田越	夫婦石	
縄文時代後期中葉	佐賀・志多留	夫婦石・又カシ	夫婦石・又カシ	夫婦石	

図6 対馬島出土縄文土器と韓半島系土器

えるのみである。従って、この段階も韓半島からの渡航集団は対馬島を最終目的地とし、その余波が玄界灘沿岸部に及んでいるものと考えられる。また、この時期の縄文土器にも韓半島からの影響は認められない。

縄文時代後期中葉（鐘崎式〜太郎迫式期）の佐賀、志多留、夫婦石、ヌカシⅡ層上部などで鐘崎式、北久根山式が多量に出土し、拠点となる集落が形成されているにもかかわらず、韓半島新石器時代土器は確認されない。東三洞で北久根山式土器が出土し、佐賀でキバノロ上顎犬歯製垂飾が出土することから交流が絶無になつたわけではないが、前段階と比較した場合、日韓交流の低調化を指摘することができる。

以上の縄文時代早期から後期前葉までの日韓交流の特徴として、木村幾多郎が指摘するように、九州本島では韓半島新石器時代土器の搬入品は出土していない（木村1997、2003）。また、前期中葉の一時期を除外すると基本的に九州の縄文土器は韓半島からの影響を基本的に受けていない。このことについて水ノ江は「晝菜」による情報の伝達や交換ができなかつた状況という可能性に求めている。しかし、筆者は韓半島南部地域における黒曜石の搬入状況（鄭澄元・河仁秀1998、河仁秀

2001、2004、2006、河仁秀・李柱憲（イジュンホン）2001）等から、交流の内容として交易という側面があり、交易を行うにあたって、沈黙交易（無言貿易）（岡1928）を行わない限り、

言葉による応酬はあつたものと考えている。東三洞で出土する縄文系土器のあり方から、東三洞の集団内で縄文人の生命は保証されていたとみられ、沈黙交易のみが行われた可能性は低いとみられる。従って、言葉は異なつていても集団の成員の中に相互の言葉を解する人物がいる以上、言葉の不通が原因であるとは考えがたく、筆者は、土器様式の形成に集団の規制が働いているという点から、精神文化の差異に求めた。日韓間では土偶をはじめとする精神文化を表象する遺物にほとんど共通点が認められないことはこの証左である。さらに対馬島をはじめとする西

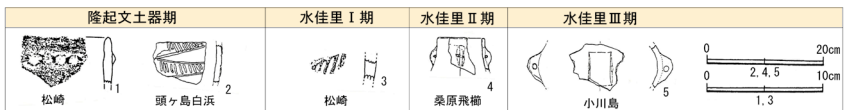


図7 対馬島以外の西北九州出土韓半島系土器

壺・把手附土器(図6・3、6、10、30、34、39、図7・4、5)や赤彩土器(図6・19、20、図7・2)が多く出土していることにも注意する必要がある。壺・把手附土器や赤彩土器という比較的祭祀色の強い土器が中心に選択的に搬入されているにもかかわらず、それでも縄文土器様式の中に受容されることはなかったことは、精神文化に関わる事項を縄文人が受容しなかったということ(によう)を如実に表している。このような精神文化上の差異は九州の縄文土器に韓半島の土器の影響がほとんどみられない要因の一つである。

また、先述のとおり日韓交流の内容として九州本島で産出する黒曜石をめぐる交易があったと考ええると、韓半島からの渡航集団は対馬島で拠点を作ったように、玄岐島や九州島玄界灘沿岸部に同様の拠点を作り、原産地付近で直接黒曜石を入手してもよさそうなものであるが、そのような遺跡はこれまでどころ確認されておらず、対馬島以南の島嶼や九州本島へ積極的に渡航できない何らかの障壁があったものと思われる。そして、韓半島からの渡航集団の主要最終目的地が独自の土器様式を形成することのない集団の居住する対馬島であり、土器様式の形成を決定する九州島の大きな集団と直接接触する機

CHEONGHAK

会に乏しかったことも、九州の縄文土器に韓半島からの影響がほとんどみられない要因であると考えられる。

V. 韓半島新石器文化と周辺地域との接触の比較

以上で韓半島丸底土器が異系統土器と接触する、または接触する可能性のある地帯について概観したが、折衷様式が形成される新石器時代中期の清川江流域、咸鏡南道、緩衝地帯が解消される新石器時代後期の清川江流域、互いに様式に影響を与えず選択的な土器の移入がみられる対馬海峡、土器文化の接触が確認できない黄海といったように接触する土器文化によつてさまざまな接触のパターンがあることが示される。その差異をまとめたものが表2である。

まず、海峡を挟む地域として対馬海峡と黄海(膠東半島・韓半島)を比較すると、確実に相互の交流を行つている対馬海峡と確実な交流が認められない黄海という相違が浮き彫りになる。対馬海峡では島や陸地が目視できる位置にある一方、黄海では目視できる距離に島や陸地が存在しないという自然環境による条件が原因である可能性が考えられる。

接触地帯		接触が想定される土器文化		時期	相互の土器の出土	折衷土器の様式	少数器種の選択的移入
対馬海峡 (西水道)	韓半島丸底土器 (南海岸)	縄文土器 (西北九州)	新石器時代中期～晩期	○	×	○	
清川江流域	韓半島丸底土器 (大同江流域)	極東平底土器 (遼東地域)	新石器時代中期	○	×	○	×
咸鏡南道	韓半島丸底土器 (嶺東地域)	極東平底土器 (豆満江流域)	新石器時代後期	○	×	○	×
黄海	韓半島丸底土器 (西海岸)	黄河下流域 新石器時代土器 (膠東半島)	新石器時代中期	×	×	×	×
			新石器時代中期～晩期	×	×	×	×

※これまで確実な発見例は存在しない。今後発見される可能性もあるが、極少量であると予想される。

表2 異系統土器文化接触の比較

次に相互に土器文化の交流があつた清川江流域・咸鏡南道の様相と比較する。韓半島丸底土器においても、新石器時代中期の清川江流域や咸鏡南道のように折衷土器が生まれうることを考えれば、接触地帯である対馬島あるいは韓半島南海岸等で丸底と平底が共存したり、折衷土器が様式として成立する土器文化が展開してもよさそうであるが、実際にはそうではないという相違が浮き彫りとなる。この点に対馬海峡を挟む地域の土器文化交流の特質があると考えられる。

新石器時代中期の清川江流域・咸鏡南道では、ある特定の器種について外来の要素を取り入れているのではなく、土器様式の中核を担う深鉢といった器種でも平底と

丸底が共存するといったように異系統の影響はかなり深く及んでいる。清川江流域・咸鏡南道では陸続きで交流の度合いが深く、土器製作者が大きく関与するような交流、すなわち土器製作者の移動や土器製作者を含む集団での情報のやりとりを伴う交流が想定される。

一方、対馬海峡を挟んだ地域では、先学の指摘のとおり黒曜石の搬入状況（河仁秀2001、2004、2007、河仁秀・李柱憲2001）から相互に交流があつたことは間違いない。しかし、交流が確実にあるにもかかわらず、対馬海峡両岸地域の土器文化交流の実相は韓半島南海岸では在地様式に影響することのない「縄文土器崩れ」が製作され、西北九州では在地の土器文化では

代替できない器種が補完的に選択され、移入されているというもので、様式間の影響を及ぼすタイプの交流ではない。韓半島からの渡航集団の主要最終目的地が独自の土器様式を形成するに至らない規模の集団しか確認されない対馬島であったと考えられることは、土器様式の形成に大きな影響を及ぼす九州本島の集団との接触が乏しかったものとみられ、韓半島の土器が縄文土器様式に影響を及ぼさなかった要因である。

このように韓半島の土器文化は東北アジアの中でも独特な位置を占めているが、中国東北地方や沿海州、日本列島といった周辺の地域と交流自体は存在した。ただし、その交流のあり方は地域や時期によって一様ではなく、その背景には生業や精神文化の共通性および差異性、そして接触地帯における自然環境や集団の性格が深く影響していることが指摘されるのである。

註

(1) ただしこれは嶺東地域における江上里類型の流入時期から求めた併行関係であって、江上里類型自体の上限を求めることは現在の資料からは困難であり、西浦項2期にも併行する可能性も否定できない。

(2) 龍口貝塚出土土器の再整理の結果、龍口貝塚の土器は楊家園(ヤンゲヤン)1期(大汶口文化後期)を主体とし、遼東半島の三堂村1期(編

CHEONGHAK

壘類型)に併行することが判明した(古澤2008)。(3) のとき、宮本は文化のまとまりとしてコメが動くのではなく、膠東半島から漢江下流域にコメ単体が流れたとしており、土器等の文化要素の交流については想定していない。しかし、その後、宮本はコメの伝来について黄海直接横断ルートを否定した(宮本2009)。

(4) 図5・6は北久根山式とする考え方(宮本2004、水ノ江2007)と南福寺式(岡田・河仁秀2009)とする考え方がある。田中は南福寺式とする見解について、同様の土器は熊本県を中心とする中九州西側地域でのみ確認され、西北および北部九州地域での存在は不明であると危惧している(田中2009b)。捻った粘土紐で突起を作り、指頭圧痕が顕著であるという特徴が類似した例は千里ヶ浜(図5・15)、ヌカシに認められ、宮ノ首などにみられるX字状に粘土紐を貼り付ける技法の変異であるとも考えられ、筆者は坂の下式の可能性が高いと判断した。

引用参考文献

〔日文〕

- 小川静夫1982「極東先史土器の一考察」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』1
- 木村幾多郎1997「交易のはじまり」『考古学による日本歴史10 対外交渉』
- 木村幾多郎2003「縄文時代の日韓交流」『東アジアと日本の考古学Ⅲ 交流と交易』同成社
- 駒井和愛1931「山東省黄巣龍口付近貝塚に就いて」『東方学報』1
- 廣瀬雄一2005「対馬海峡を挟んだ日韓新石器時代の交流」『西

海考古」6

古澤義久2006「江原道嶺東地域における新石器時代沈線文系土器の編年と地域性」『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅲ』古澤義久2007「遼東地域と韓半島西北部先史土器の編年と地域性」『東京大学考古学研究室研究紀要』21

古澤義久2010「日韓新石器時代土器文化交流」『季刊考古学』113

水ノ江和同1988「曾畑式土器の出現—東アジアにおける先史時代の交流—」『古代学研究』117

水ノ江和同2003「朝鮮海峽を越えた縄文時代の交流の意義」『考古学に学ぶ(Ⅱ)』

水ノ江和同2007「ふたたび、対馬海峽西水道を越えた縄文時代の交流の意義」『考古学に学ぶ(Ⅲ)』

水ノ江和同2010「縄文文化の境界・範囲・枠組み」『考古学は何を語れるか』

宮本一夫1990「海峽を挟む二つの地域—山東半島と遼東半島、朝鮮半島と西北九州、その地域性と伝播問題—」『考古学研究』37・2

宮本一夫2003「朝鮮半島新石器時代の農耕化と縄文農耕」『古代文化』55・7

宮本一夫2004「北部九州と朝鮮半島南海岸地域の先史時代交流再考」『福岡大学考古学論集』

宮本一夫2009「農耕の起源を探る—イネの来た道—」吉川弘文館

〈韓文〉

岡田憲一・河仁秀2009「韓半島南部終末期櫛文土器斗縄文土器の年代的併行関係検討」『韓国新石器研究』17

白弘基1994「東北亞平底土器の研究」学研文化社

徐國泰1999「朝鮮新石器時代文化의 单一性斗 固有性」社会科学出版社

科学出版社

李相均1998「新石器時代の韓日文化交流」学研文化社

林尚澤2008「新石器時代大韓海峽兩岸地域交流에 대한再検討」『韓・日交流의 考古学』

田中聡一2009「東三洞貝塚出土縄文系土器와 그意味」『韓国新石器研究』18

鄭澄元・河仁秀1998「南海岸地方斗九州地方의 新石器時代文化交流研究」『韓国民族文化』12

河仁秀2001「新石器時代对外交流研究」『博物館研究論集』釜山博物館

河仁秀2004「新石器時代韓日文化交流와 黑曜石」『韓・日交流의 考古学』

河仁秀2007「嶺南海岸地域の 新石器文化研究」釜山大学大学院博士學位論文

河仁秀・李柱憲2001「新石器時代の对外交流」『港都釜山』17

韓永熙1983「地域的比較」『韓国史論』12

〈中文〉

大貫静夫1989「東北亞洲中的中国東北地区原始文化」『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』文物出版社

古澤義久2008「膠東半島大汶口文化晚期的陶器」『東方考古』5

樂豊実1997「試論後李文化」『海岱築考古研究』山東大学出版社

王錫平・王茂盛1996「膠東半島劑東北亞考古学中的位置」『環渤海考古国際學術討論會論文集』知識出版社

本稿は財団法人韓昌祐・哲文化財団助成基金(學術研究「東北アジア的視点から見た韓半島新石器時代土器の研究」)の助成による研究成果報告であり、助成により執筆された左記の論文

の内容を再編集したものである。助成いただいた韓哲文化財団(当時)に厚く感謝申し上げます。

古澤義久2011「新石器時代中期～晩期における日韓土器文化交流の特質・東北アジアにおける異系統土器文化接触の比較」『日韓新石器時代研究の現在』55・86頁、九州縄文研究会・韓国新石器学会

古澤義久2011「新石器時代中期～晩期 韓日土器文化交流の特質—동북아시아에서의 異系統土器文化 接觸의 비교—」『韓国新石器研究』22、1・32卒、韓国新石器学会

古澤義久2012「韓半島における新石器時代—青銅器時代転換期に関する考察— 遼東半島との併行関係を中心に」『故 福田一志氏追悼論文集 西海考古』8、55・64頁、西海考古同人会

古澤義久2013「韓半島の新石器時代土器と西唐津式・曾畑式

土器」『曾畑式土器とその前後を考える』51・62頁、九州縄文研究会・沖繩大会実行委員会

古澤義久2013「対馬市佐賀貝塚出土丸底土器について・縄文時代後期日韓土器文化交流に関する予察」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』3、11・24頁、長崎県埋蔵文化財センター

副島和明・古澤義久・川道寛2013「夫婦石遺跡1993年調査区出土資料」『韓・日 初期 新石器文化 比較研究』203・226頁、韓国新石器学会・九州縄文研究会

古澤義久2013「九州と韓半島」『季刊考古学』125、66・70頁、(株)雄山閣

田中聡一・古澤義久2013「韓半島と九州」『季刊考古学』125、79・84頁、(株)雄山閣

古澤義久2014(予定)「玄界灘島嶼域を中心にみた縄文時代日韓土器文化交流の性格」『東京大学考古学研究室研究紀要』28

朝鮮文人茶を育んだ 書齋の淵源

京都大学大学院
人間環境学研究科教授
西垣安比古

1 序

18〜19世紀に朝鮮において文人や僧の間で喫茶の流行があった。同じ頃、日本でもやはり文人や僧を中心として、煎茶が流行した。茶の湯はそれ専用の茶室を設けて行われるが、煎茶は座敷（書院、書齋）などで楽しまれる。煎茶室が設けられた場合でも、そこで詩を詠み、酒を酌み交わすなど、さまざまな趣向の一環として茶が嗜まれた。朝鮮半島でも同様に書齋（書堂、庵）において茶文化が育まれた。

ここでは「特集住宅 男の空間、女の空間」（『歴博』151号、2008年11月、国立歴史民俗博物館）所収

の拙稿「男女有別―韓国の伝統的住居をめぐる―」に若干手を入れて、この朝鮮文人茶揺籃の場所となった書齋の淵源について紹介したい。

韓国の住宅にはアンチェ（内棟）とサランチェ（斜廊棟）があり、前者が生活の中心になる場所で、後者は男性主人の居所となり、接客などに使われる。斜廊棟は、15〜16世紀に朝鮮半島において生活のレベルにまで朱子学が浸透するとともに造られるようになった。オンドルと共に朝鮮の伝統住宅の核となる斜廊棟の形成過程と、それがどのように朝鮮文人茶を育む書齋へとつながっていったかについて記すことにする。

2 伝統住宅における内棟と斜廊棟

アンチェ(内棟)はプオク(釜屋、台所)、アンパン(内房)、テチョン(大庁、板間)、コンノンパン(越房)からなり、これに収納空間などが付設される。アンパンはその家のアンチュイン(女主人)の部屋とされ、乳幼児もこの部屋で育てられる。一方、コンノンパンはその家の事情によつてさまざまな場合があり一概には決められないが、老人や少し成長した子供たちの部屋となる。ただ、これは世代交代が済んだ家を想定してのことで、世代交代以前であればアンパンとコンノンパンに居住する人員は入れ替わることになる。また、テチョンは板間なので、冬期の居住に適す部屋ではない。接客や夏期の就寝などに一時的に用いられるが、基本的には儀礼用の部屋である。以上の部屋割を男性、女性という性別に着目してみると、乳幼児の性別を無視するとすれば、唯一アンパンのみが女性の部屋とされており、その他の部屋においては性別による制限が加えられているわけではない。そのアンパンも日常生活の中心となる場所で、この部屋に家族が集まることは多く、実際に女性のみが使用するわけではない。この部屋は産所とされることも多く、サムシン(お産の神)もここに祀まつられるのであるが、お産に際し

CHEONGHAK

ては男性主人(パカッチュイン)であつてもこの部屋に入るのをひかえなければならぬ。また、アンパンはかみならずプオクに隣接しており、アンパンのオンドルはプオクの竈かまどによつて暖められる。このためアンパンのアレッチャリ、ウッチャリ(直訳すれば下座、上座となるが、ここでは下座が竈に近い暖かい場所、上位の場所となる)という場所秩序は竈によつて決定されることとなる。竈は女性の管掌するもので、プオクは女性の占有空間であるから、このことからアンパンは女性の部屋とされるのであろう。あるいは、家の財産を保管する場所の鍵は女性が管理し、世代交代はこの鍵の受け渡しをすることで行われる。このときアンパンも譲られるのであるから、むしろ家そのものが女性によつて管掌され、それを代表する場所としてアンパンが象徴的に女性の場所とされているのかもしれない。しかし、アンパンがアンチュイン(つまり女性)の部屋とされるのは、サランパン(斜廊房)がパカッチュイン(つまり男性)の部屋とされるのと対をなしており、このことも重要な要素と考えられる。朱子学における男女有別は対社会的つまり家族という単位を超えた問題に対しては男性が対処し、家族内の事柄については女性が当たることを意味してい

る。ただ、家系は男性によって継がれ、この家系が社会的意味を担うため、家系に関することは男性が担うことになる。前述したように家財の管理は女性に担われており、これを「うち」と規定することからアン（＝内）チュイン（＝主人）と呼ばれることになる。男性主人はその反対にパカツ（＝外）チュイン（＝主人）となるのである。

3 斜廊棟

内棟が内房を中心とすることで象徴的に女性中心の場所とされるのに対して、斜廊棟は明確に男性中心の場所といえる。朝鮮では15世紀から16世紀にかけて士林派が勲旧派を退けて政治的中心勢力に成長したが、この頃朱子学が生活レベルにまで浸透し、男女有別の思想が住居形態にまで反映されるようになる。

サランチュエがどのような変遷過程を経て現在見る伝統住居を形成することとなったかを正確に跡付けることはできない。ただ、一例として良洞マウルに着目してみれば、もつとも古く1458年に建設されたとされている孫東満家屋には口の字型の居住棟に組み込まれたサラ

ンチュエがあり、その規模は小さい。これに対して、16世紀の建設とされる鶴稼亭や、香壇ではサランチュエが突出した位置に造られており、規模が大きい。半島全体でのサランチュエの変遷過程をこの例のみで推測することには無理があるが、少なくとも良洞マウルでは居住棟に組み込まれた小規模なものから、居住棟から独立的な、規模の大きなものに変化していったことが窺える。

丁若鏞（茶山）の「雅言寛非」によれば「斜廊者堂側之横廡也 東人誤譯 今以外舍廳事之室謂之斜廊」と言われている（この部分はしばしば引用される。例えば、金基柱、金聖雨「一六世紀を前後する班家の形式変化と家礼」建築歴史研究第二巻 通巻四号 一九九三年一二月などを参照）。右記引用文は、もともと（中国では）斜廊は堂の傍らの横廡のことであり、東人（朝鮮人）が誤訳して、今は外舍庁事の室を斜廊というとして解釈される。この文献にはさらに「古俗内舍宏大 外舍低小 無異廊廡 故冒中国斜廊之名 今俗外舍益宏大 斜廊之名 尤不合矣」と記されている。古俗ではアンチュエ（内舍）が宏大でパカツチュエ（外舍）は低小であり、廊廡（大きな建物に付属した細長い建物）と異ならなかった。それ故、間違つて中国の斜廊の名がつけられた。今の俗では外舍

はますます宏大となり、斜廊の名はもつとも合わない。上の引用部分はこのような意味であろう。ここにいう古俗がいつのことか正確に知ることはできないが、サランチェ（斜廊棟）は規模の小さなものから大きなものに変化したことが知れる。

現存する伝統住居においてアンチェから突出した形式のサランチェは規模の大きいものが多く、それらの多くは17世紀頃に建てられており、ここにいう今の俗はこの頃のことを指すものと考えられる。あるいは、丁若鏞の生没年が1762〜1836年であることを勘案すれば、100年ほど後にずらせたほうがよいのかもしれない。いずれにしてもサランチェは居住棟に組み込まれた小規模なものから、アンチェから突出した、あるいは独立した、大規模なものに発展し、それに伴って男性の専有性も高められていったと考えてよいだろう。そして、文人茶の揺籃としての書齋に着目する本稿では、この引用文の著者丁若鏞が朝鮮文人茶流行の中核となった人物であることに注目しておくべきであろう。それは朝鮮における斜廊棟が時代が下るに従って宏大で豪壮なものに変化していったことに対して、上の引用文は若干否定的なニュアンスを含んでいることが読み取れるからである。

CHEONGHAK

4 朝鮮における賜額書院の成立と書齋

伝統的住居における男性の空間としてのサランチェ（斜廊棟）は、16世紀中期にさらに住居の外部へと移され、書堂が造られたと考えられる。朝鮮王朝における賜額書院制度化の中心人物である李滉（退溪）に着目して、その過程を見ておきたい。退溪は自らの家で弟子たちとともに朱子学を究めることを求めて読書講学の生活を送ったが、弟子の数も増え寒栖菴、陶山書堂を造ることになったという。当時の住居における読書講学の場所はサランチェであったとしてよいだろう。それ故、寒栖菴、陶山書堂は住居から分離独立した斜廊棟として出発したともいえるのである。寒栖菴は静習堂という読書室を持つことがわかるのみで、他にどのような部屋があったかあきらかにできないが、陶山書堂は三間の建物で、板間（巖棲軒）、オンドル房（玩樂齋）とオンドルの焚口を囲んだ部屋からなっており、住居に付設されたサランチェとそれほどの径庭はない。

退溪が寒栖菴を建て、そこに移居したことについて「退溪先生言行録」に「先生は五十にしてなお家がなく、この歳になつてはじめて退溪の上に宅を得てその西に精



①孫東満家屋の書百堂ソペンタ（良洞マウル）



②孫仲職故宅の觀稼亭ソンチュドク（良洞マウル）



③柳雲龍故宅の養真堂 (河回マウル。慶尙北道の安東にある民俗村)



④柳成龍故宅の忠孝堂 (河回マウル)

- ①：斜廊棟が口字型内棟に組み込まれており、規模も小さい。
- ②③④：内棟から突出して大規模化した斜廊棟

イオンビョク ケツイン
⑤李彦迪の溪亭
モリジュンケラン
(慶州玉山里)



⑥李彦迪の溪亭
(慶州玉山里)

⑦李退溪の陶山書堂
アンドントク
(安東土溪里)





⑧丁若鏞の茶山草堂
 (復元された建物で当
 時の文献や絵画とは差
 異がある。康津萬德里)

⑨草衣の一枝庵 (近年
 復元されたもの。海南
 九林里)



⑤⑥⑦：16 世紀における文人
 たちの書堂

⑧⑨：丁若鏞と草衣は朝鮮文人
 茶中興の立役者であった

舎を建てて、それを寒栖と名付けた」と記されている。ここでは寒栖菴が住居のすぐ横に建てられていたことがわかる。陶山書堂は住居から若干離れた所に建てられたが、それでも住まいとの間を行き来しながら蔵書養拙の生を営むことができた。つまり、寒栖菴はサランチュエといつてもよい建物で、陶山書堂はそれが住居から若干離れた所に建てられたものといえる。

また退溪は「上沈方伯」に書院を建てる場所として「寛間の野、寂寞の濱」「先正遺塵播馥之地」の二条件を備えているところがよいとしているが、前者は人里離れた風光明媚な所、後者は先学の勉学修行の地を意味している。そして、この二つの条件のうち前者を重視しているのである。風光明媚な所がよいというのは住居でも同じで、そこに群居しつつ講学することが書院の最重要事項であると考えられていたことが窺える。先学の遺香馥郁たることを書院の建設地とすることは、その学統を受け継ぐことへと向かい、祭祀空間を核とする求心性を求めることとなる。しかし、それは前者ほど重視されなかった。以上のことは、成立初期の書院が講学の場所としての性格を強く持ち、斜廊棟に近いものであったことを明確に示している。

上に見てきたように、15世紀頃から造られるようになった斜廊棟は住居棟である内棟から独立性を高めていき、儒教の読書講学の場としての書堂は16世紀頃について住居から離れて勝地に建てられることになった。それらの一部は賜額され書院となったが、多くは書堂（書齋）として遺されることになった。一方、住居に付設される斜廊棟は17、18世紀にかけて宏大豪壮なものに変化していき、そのような場所は文人茶中興の中心人物であった丁若鏞の受け入れるところとはならず、住居を離れて建てられた小規模の書堂（書齋）が文人茶播籃の場所となつたと考えられる。

5 まとめ

朝鮮の伝統住宅を見れば、中心がアンチュエ（内棟）にあることは明らかであり、アンパン（内房）は必ずブオク（釜屋）に隣接している。ブオクは女性中心の場所であり、アンパンもアンチュイン（内主人、女性の主）の部屋とされる。ただ、出産などの特別な場合を除いて、アンチュエは男性も自在に出入りする場所である。それはアンパンも含めてのことであり、男性の出入りがないの

はプオクだけである。むしろアンパンが女性の部屋とされるのは、家そのものが女性と強い結びつきを持つており、そのことを象徴的に表現しているといつてよい。

これに対してサランチェは男性の居所であり、ほとんど女性が入り出すことはない。つまり、サランチェは実際の用途において男性中心の場所といえる。サランチェの発展過程を明確にすることは難しいが、従来アンチェを含めて建てられた接客空間が、朱子学の浸透とともに大規模化し、アンチェからの独立性を高めていったと考えられている。アンチェから突出した形で、あるいは別棟として建てられたサランチェはそのような過程で成立したとされている。アンチェからの独立性を高めることは男性の専有性を高めることを意味しており、その最終局面が住居から完全に独立して建てられた書堂である。初期書院における書堂はサランチェとの強い関連性を持つ建物であったが、これは厳密に男性専有の空間で、後に一部は賜額され書院となり、やがて政治的派閥の核となる施設になっていった。しかし、多くの書堂は賜額されずそのまま小規模な書齋として遺されることになり、これが朝鮮文人茶播盤の場所となったと考えられる。このような過程を踏まえて最後に現在の住宅を一瞥し

CHEONGHAK

ておこう。韓国の一般的な都市住宅はアパートであるが、寝室としてのオンドル房とリビングルームとしての板間で構成されている。台所と食堂は板間の一角に設置されており、台所とアンパンとは隣接するとは限らない。ただ最大のオンドル房がアンパンとされるのみである。それ故、伝統住居におけるアンパンほど女性の空間としての象徴性を持つことはなくなった。一方、男性の空間としてのサランチェはなくなり、現代の住宅はアンチェのみで構成されるようになったといえる。男性専有の空間は住宅の外に展開し、居住空間からは消えてしまったのである。ソウルをはじめとして韓国の都市にはタバン(茶房)が数多く、老若男女が集い話の花を咲かせている。しかし、これらは近年カフェと呼ばれ、コーヒーがメニューの中心となっている。伝統茶房もなくはないが少数派の地位に追いやられている。18〜19世紀における朝鮮文人茶の文化の高みを復興するための播盤は何処に存在するのであろうか。

*註 良洞マウル…慶州市内から20キロほど、雪倉山の麓に広がる韓国の伝統民俗村。2010年にユネスコ世界遺産に登録された。驪江李氏と月城孫氏という2つの名家が500年以上共存してきた珍しい同姓集落で、由緒深い名門集落として知られている。

韓国の移民政策と 中国朝鮮族

中央大学総合政策学部兼任講師
宣二元 錫

1. 移住民の現状と移民政策の課題

1980年代後半以降、韓国に大量に流入しはじめた外国人は20年を超えた現時点においてもその流れは止まっていない。移入外国人を国籍別にみると、中国がトップの座を譲っていないが、その中国人の半数以上を朝鮮族が占めている。国籍だけではなく民族的・文化的ルーツなどを考慮に入れば、韓国に移入した最大のエスニック・グループは中国朝鮮族である。表1は2013年末時点での上位10カ国の国籍別滞在外国人を示しているが、中国籍の朝鮮族が総滞在者の約3分の1に達し、非朝鮮族中国人や他の外国人を大きく上回っている。

中国朝鮮族の移入形態や潜在類型は概ね就労と結婚、そして家族滞在であり、これは韓国社会の一般のイメージと一致する。中国朝鮮族のイメージはソウル・オリンピックを前後して道端に露店を開いて漢方材を売る中国から来た貧しい同胞から始まり、工場や建設現場の単純労務作業労働者、まちの食堂のサービングや皿洗い、それに農村や低所得層の国際結婚夫婦の奥さんが入り交じったものである。アジア発展途上国出身外国人に対する韓国人一般のイメージも、実情として中国朝鮮族のイメージとあまり変わらない。韓国の多民族多文化化が始まって真つ先に流入が始まった中国朝鮮族のイメージは、後の他のアジア発展途上国出身外国人のイメージ形成に少なからず影響を与えたと推察される。

表1 国籍別外国人滞在者（人）

区分	2012年12月 総滞在者	2013年12月		
		総滞在者	合法滞在者	不法滞在者
合計	1,445,103	1,576,034	1,392,928	183,106
中国 ¹⁾	698,444	778,113	708,870	69,243
朝鮮族	447,877	497,989	478,875	19,114
米国	130,562	134,711	131,569	3,142
ベトナム	120,254	120,069	92,829	27,240
日本	57,174	56,081	55,139	942
フィリピン	42,219	47,514	34,485	13,029
タイ	45,945	55,110	34,445	20,665
インドネシア	38,018	41,599	34,876	6,723
ウズベキスタン	34,688	38,515	33,545	4,970
モンゴル	26,461	24,175	16,428	7,747
台湾	30,413	27,698	26,760	938

1) 朝鮮族を含む

出所) 法務部「出入国・外国人政策統計月報（2013年12月号）」

CHEONGHAK

韓国では外国人が急増するなか、対策不在の初期の混乱期を経て、2000年代に入ってから外国人の人権保護と社会統合に力を入れてきた。2007年の「在韓外国人処遇基本法」（以下、外国人基本法という）はその収斂として大いに注目すべきだが、前述のような外国人のイメージは韓国の移民政策が目指すものではないはずであろう。近年韓国の移民政策はグローバルゼーションへの対応として人材誘致に一層力を入れているが、特定のエスニック・グループが社会の底辺部を形成したり、そのようなイメージが醸成されたりするような事態は外国人の社会統合の阻害要因になる。

ところで、中国朝鮮族の移入形態と滞在類型、または前述のイメージは韓国の移民政策の展開と切り離すことができない。後述の通り、1992年の韓中国交正常化以前の同胞の親族訪問としての移入と、1993年以降本格化した研修生としての入国・就労の流れは、韓国のなかで中国朝鮮族非熟練労働者の増大につながった。米国や日本のようないわゆる先進国出身の在外同胞が、韓国での滞在や就労などの活動にほとんど制限がないとは対照的である。ここではこうした朝鮮族に対する政策的対応と、中国朝鮮族の移入形態や滞在類型との関連に

ついて検討を踏まえたうえで、近年の人材誘致という経済主義が色濃くなっている韓国の移民政策のなかで朝鮮族関連の施策をどうみるかについて簡単な考察を試みた。

2. 同胞政策の始まり

2013年現在、韓国の在外同胞は700万人を超えたとされる(表2)。韓国人口比でいうと約14%で、南北を合わせた朝鮮半島全体の人口比でも約10%に達する。地域的にはアジアに約半分が居住し、北米に32.76%と両地域の居住者が全体の8割を超えている。国別では中国が36.70%ともっとも多く、米国(29.82%)、日本(12.73%)が大半を占めている。だが、ここでいう在外同胞という概念が明確に定まっているわけではない。居住地の国籍を取得した人々を含むかどうかによつて統計値は大きく変わる。表2で示した在外同胞は韓国外交部が出している統計だが、ここにはそれぞれの居住地の国籍取得者が含まれている。中国朝鮮族の総人口は中国当局によれば192万3843人とされる。

表2 在外同胞現況

年		2007	2009	2011	2013	構成比 (%)	前年比 増減率 (%)
地域別							
合計		7,041,684	6,822,606	7,167,342	7,012,492	100	-2.16
東北 アジア	日本	893,740	912,655	904,806	892,704	12.73	-1.34
	中国	2,762,160	2,336,771	2,704,994	2,573,928	36.70	-4.85
	小計	3,655,900	3,249,426	3,609,800	3,466,632	49.44	-3.97
南アジア太平洋		384,474	461,127	453,420	485,836	6.93	7.15
北米	米国	2,016,911	2,102,283	2,075,590	2,091,432	29.82	0.76
	カナダ	216,628	223,322	231,492	205,993	2.94	-11.02
	小計	2,233,539	2,325,605	2,408,490	2,297,425	32.76	-0.42
中南米		107,594	107,029	112,980	111,156	1.59	-1.61
ヨーロッパ		645,249	655,843	656,707	615,847	8.78	-6.22
アフリカ		8,485	9,577	11,072	10,548	0.15	-4.73
中東		6,440	13,999	16,302	25,048	0.36	53.65

出所) 外交部「在外同胞現況」2013

では在外同胞とはどのような人々なのか。韓国社会で在外同胞というと、海外に居住しているコリア系の人々を指すのが一般的である。この場合、居住国国籍者であっても国籍変更前に韓国籍だったり、祖先がコリア系であれば一般に在外同胞とされる。法律的にはより厳密に定義されている。在外同胞という用語が法律に使用されたのは1997年に制定された「在外同胞財団法」が初めてで、1998年に制定された「在外同胞出入国及び法的地位に関する法律」（以下、在外同胞法という）によって定義された。これらの法律でいう在外同胞とは大韓民国国籍を基準に「在外国民」と「外国籍同胞」からなる「在外国民」とは韓国国籍を保有している海外移住民及び居留民を意味し、「外国籍同胞」とは韓国籍を保有していない「韓民族の一員」と定義されている。在外国民が明確に範囲が決められたのと対照的に、外国籍同胞の範囲は曖昧にされたまま使われてきた。この問題は後に中国朝鮮族を中心とする在外同胞の範囲と関連する訴訟につながり、概念と呼称問題は在外同胞政策の中心的な課題となったⁱⁱ。

現状の中国朝鮮族を規定することになった政策は、1980年代冷戦が終わりかけたデタントと呼ばれた時期

CHEONGHAK

にさかのぼる。1980年代後半、冷戦が崩壊を迎えアジアでも平和と交流が盛んに叫ばれた時期に、当時の韓国政府はソウル・オリンピックの成功と、中国や旧ソ連など共産国との交流拡大に乗り出す北方政策を積極的に展開した。その一環としてそれまで往来ができなかった中国朝鮮族が親戚訪問を目的に入国が可能になった。この時期から、ソウル駅につながる地下通路に露店を開いて漢方材を売ったり、短い期間工場や建設現場で働いたり（当時、親族訪問の滞在期間は3カ月だった）、何らかの形で就労する朝鮮族が出現するようになった。もちろん親族訪問のために来韓した外国人の就労は「違法」であったが、当時の政府や一般市民はその行為をあまり問題視せず、貧しい国から来た「哀れな同胞」とみる視線が大方をしめていた。また当時韓国と中国の所得差を考えると、こうした就労は、数年分の年収にあたる来韓渡航費用に充てるためにやむを得ないと思われた。

3. 「分離」された中国朝鮮族

中国朝鮮族が外国人として厳密な出入国の管理下に置かれるようになったのは1992年の韓中国交正常化以

降である。それまで外務部の簡単な旅行証明のようなもので入国できた在外同胞の親族訪問は、法務部の出入国行政の管理下で「ビザ発給証明書」が必要になり、結果的に入国が制限されるようになった。

また1991年から始まった海外投資企業研修制度と1993年の外国人産業研修制度は、中国朝鮮族が韓国に入国・就労する一つのルートとなった。研修生制度は、1980年代後半の好景気にもない、中小製造業の生産部門を中心に労働力供給が逼迫する状況が続くなか、外国人労働者の受け入れ制度として採用された。当時多くの中小企業では、すでに中国朝鮮族をはじめとするアジア諸国からの非正規滞在者の不法就労が広がり見せていた。政府は1991年既存の海外投資企業研修制度を拡大し、また1993年には海外投資企業という条件を外し、一般中小企業まで研修生受け入れを可能にした外国人産業研修制度を通して、外国人労働者をサイドドアから受入れを始めたのである(宣、2010)。制度上労働者ではなかった研修生は労働法の保護を受けられず、賃金の抑制、労働基準や安全衛生の軽視、そして労災対応のような雇用コストを低く抑えることで、研修生制度は「研修」より安価な労働力の確保を目的に活用された。

中国朝鮮族は他の外国人と同じ枠組みで研修生として韓国での就労機会が広がっていたが、これは逆に在外同胞法との関連で他の先進国出身の同胞との差別として問題になった。在外同胞法では海外に居住するコリア系に対して、財産保有や就労など韓国国内での活動に韓国人とほぼ変わらない法的地位を認めていたが、在外同胞の範囲を「大韓民国の国籍を保有した者またはその直系卑属で外国国籍を取得した者」と定めたために、実質中国や旧ソ連において、大韓民国政府樹立(1948年8月15日)以前に海外に移住した同胞が除外された。一方、同法には韓国国内で単純労働就労を禁止する条項があったために、単純労働に就労する予定の中国朝鮮族は、在外同胞法による入国と就労が不可能であった。中国朝鮮族にとって研修生制度による非熟練部門の就労は韓国への出稼ぎチャンスとして移入形態の一つになったが、いわゆる先進国出身の在外同胞と「分離」される結果になった。こうした分離は表3の中国朝鮮族の就労と関連する諸制度においても根本的に変わらない。

表3の制度の中で雇用許可制は中国朝鮮族にとって大きな転機となった。雇用許可制は非熟練部門に外国人の就労を認める、韓国の外国人労働者制度の展開において

表3
朝鮮族関連の外国人労働者
受け入れ政策

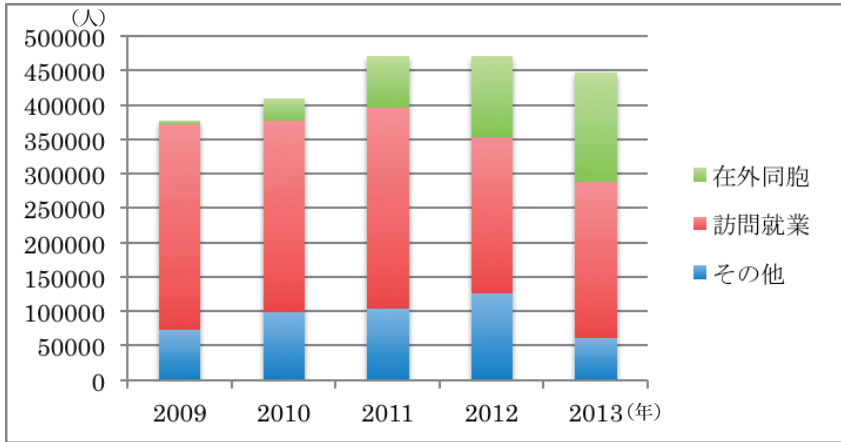
1991年	海外投資企業研修制度
1993年	外国人産業研修制度
1997年	研修就業制度（研修1年後、1年間労働者として就労可能）
2002年	就業管理制度（6つのサービス業に親族訪問者の就労可能）
2003年	雇用許可制（特例雇用許可として無縁故朝鮮族の就労可能）

画期的な制度転換であった。この制度の中で在外同胞は特例雇用許可として就労が認められたが、やはり制限的要素が多かった。上で指摘したように、自由な出入国と就労が可能な在外同胞法に照らしみると、同胞の対象にすらない中国朝鮮族に「我々はたして同胞か」という疑問がわき上がった。そして2003年11月、中国朝鮮族と市民団体がハンガーストライキを始め社会的に注目された。当時盧武鉉大統領はデモ隊が籠城している教会を訪問し、問題解決のための政府の努力に言及した。その結果、2004年3月、問題になった在外同胞の定義に関する条項が改定され、宣言的に、大韓民国政府樹立以前に中国など海外に移住した者も同胞として認められるようになった。ここで「宣言的」というのは在外同胞の定義は変わったものの、単純就労禁止条項はそのまま残存したからである。すなわち韓国国内で製造

業や建設現場、一部のサービス業など非熟練部門の就労を希望する大半の中国朝鮮族からみれば、在外同胞の定義が変更されても、専門職としての就労が条件である「在外同胞」の在留資格を得られない状況には変わりがなかったのである。

このような「分離」状況に変化をもたらしたのが訪問就業制である。訪問就業制は、満25歳以上の外国籍同胞に5年有効、1回入国に最長3年滞在が可能な複数査証を発給し、32業種の単純労働部門への就労を可能にした制度である。訪問就業制の施行に伴い、それまで「親族訪問」や「非専門就業」（雇用許可制の在留資格）などの在留資格で入国した中国朝鮮族の多くが、「訪問就業」として入国・滞在するようになった。2013年現在訪問就業として滞在する在外同胞は24万178人であり、そのうち中国朝鮮族が22万8050人と全体の94・

図1 在留資格別中国朝鮮族滞在者（2013年末）



出所) 法務部「出入国・外個人政策統計月報（2013年12月号）」

95%をしめる。しかし訪問就業制は就労可能な業種が非熟練部門に限られ、求職や職場異動などの雇用管理は雇用許可制の管理下に置かれるなど、やはり非熟練部門に就労する外国人労働者として管理される状況は根本的に変わらず、他の先進国出身の在外同胞との「分離」状態はそのまま続いた。

ところで、雇用許可制を通して入国・就労する外国人労働者は、就労可能な業種が製造業と農水産業など一部に限られ、職場異動もかなり制限されている。それに比べると、訪問就業は在外同胞であることが証明できれば入国可能であるし、出入国も自由で、職場異動も届け出制になっているなど、「入口」と雇用管理の両面で他の外国人に比べ「優遇」される枠組みであった。このために、今度は非熟練外国人労働者とも制度的に「分離」されたといえよう。

4. 「人材誘致」と中国朝鮮族

訪問就業制による中国朝鮮族の入国が増加したのは上述した通りであるが、近年中国朝鮮族の滞在類型に大きな変化がみられる。図1は韓国に滞在している中国朝鮮族

族の在留資格のなかで「訪問就業」と「在外同胞」の推移を示したグラフである。グラフが示す通り、中国朝鮮族は総滞在者が2011年までに増え、それ以降横ばいしないし少し減少するなか、「在外同胞」が2010年以降急速に増加していることがわかる。既述の通り、在留資格「在外同胞」は非熟練部門の就労を禁止しているが、統計のままだと専門職の中国朝鮮族の就労がこの2〜3年の短期間で増大したことになる。一見中国朝鮮族の滞在類型が変化したように見える背後には、韓国政府の「人材誘致」の移民政策がある。

韓国政府によって公式に移民政策が策定されて以来、「人材誘致」は常に最重要政策課題であり続けている。2007年制定された外国人基本法では5年ごとに政府による基本政策の策定が義務となった。新法の制定に基づいて、韓国政府は2007年「第1次外国人政策基本計画（2008〜2012年）」、2012年「第2次外国人政策基本計画（2013〜2017年）」を策定した。基本計画は5年間の主要な政策課題はもちろん、政策環境に関する政府の認識なども記されており、韓国の移民政策を理解するうえで重要な手がかりになる。これまで2回策定された基本計画の中で、共通して最重要課題と

CHEONGHAK

して一番目に挙げているのが、外国から「人材」を誘致して韓国経済に貢献することである。その他、外国人の社会統合等も並んでいるが、具体化される政策展開をみても、韓国政府が「人材誘致」を、もつとも関心を寄せている政策課題として位置づけていることに疑う余地はない。

この人材誘致と関連して、近年韓国政府は高度人材の受け入れに強い関心を示している。上記の基本計画でも、専門人力、グローバル人材という表現を用いながら、韓国経済と社会発展に貢献できる優秀な外国人材の誘致を訴えている。その背景には1980年代後半以降、韓国に外国人労働者の大量流入が始まって以来、非熟練労働者が移入外国人の大半をしめてきた状況に変化がみられないことに対する懸念がある。表4は就労資格の滞在在外国人在留資格別にみた統計であるが、専門的仕事に従事する外国人は全体の5%程度に過ぎず、この比率は10年前とあまり変わっていない。

「在外同胞」資格の中国朝鮮族の急速な増加は、こうした外国人労働者の受け入れ状況と「人材誘致」の移民政策のながれと無関係ではない。法務部は「母国と同胞間の交流拡大及び居住国による同胞間の差別解消のため

表4 在留資格別就労外国人労働者（2013）

区分		合計	合法滞在	非合法滞在
合 計		549,202	478,616	70586
専門人力	小計	50,166	45,379	4,787
	短期就業（C-4）	460	299	161
	教授（E-1）	2,637	2,620	17
	会話指導（E-2）	20,030	19,948	82
	研究（E-3）	2,997	2,987	10
	技術指導（E-4）	222	220	2
	専門職業（E-5）	667	643	24
	芸術興業（E-6）	4,940	3,436	1,504
	特定活動（E-7）	18,213	15,226	2,987
単純技能人力	小計	499,036	433,237	65,799
	非専門就業（E-9）	246,695	191,637	55,058
	船員就業（E-10）	12,163	7,685	4,478
	訪問就業（H-2）	240,178	233,915	6,263

出所）法務部「出入国・外個人政策統計月報（2013年12月号）」

に」という理由をあげ、「在外同胞」の資格要件を緩和した。具体的には国内外の2年制以上の大学卒業生、法人企業代表、技能士以上の資格証所持者等に「在外同胞」資格付与要件を拡大した。また「訪問就業」資格者の中で、地方所在の中小製造業など国内労働市場で求人が困難な企業に一定期間就労することも要件の一つにするなど、「在外同胞」資格要件は格段に緩くなった。図1で見られる「在外同胞」の急増はこうした政策変更に伴って、「訪問就業」の減少分がそのまま「在外同胞」にシフトした結果と読み取ることも可能である。この政策変更によつて、最大のエスニック・グループである中国朝鮮族に選抜システムが組み入れられたのである。元来エスニック紐帯を根拠とする「在外同胞」に「人材」の視点に基づく選抜システムを取り入れたことにより、「人材」と見なされた「在外同胞」朝鮮族とその他の朝鮮族に分類され、移入携帯と滞在類型にも大きな変化をもたらしたのである。

5. 経済主義移民政策のゆくえ

ところで、ここでいう「人材」とはどのような人々を

指すだろうか。外国から韓国に移入する外国人は国籍や入国の目的、または移住の背景などは様々であるはずだ。それを「人材」という物差しで判別すること自体（分類と言っても良い）、外国人を一人の人間とみるより、その外国人が備えている職業能力と経済的な貢献度を基準に、韓国側の視点からの判断が強く意識されていることはいままでもない。つまり韓国政府にとって移民政策は、韓国の経済発展への貢献という経済主義が色濃く反映されているといえる。

今ひとつ、「在外同胞」在留資格要件緩和は、韓国の入管当局が訪問就業の満期者が帰国せず非正規滞在者に流れるのを防止するためにできた便法とみる冷ややかな見方もある。実際「訪問就業」の5年満期を迎える多くの中国朝鮮族によつて、滞在期間を延ばす方法として活用されている。2007年に始まった訪問就業制は1回入国で5年満期の複数査証であり、2007～08年に入国した者は2012～13年に満期を迎え一時帰国を余儀なくされる。一時帰国すると1年間の入国猶予期間があるために、韓国に生活基盤を築いている人にとっては憂慮するところであろう。実際国家技能士資格取得は、訪問就業満期による帰国後、再入国ができない満55歳から

CHEONGHAK

60歳未満（訪問就業は55歳未満の年齢制限あり、60歳以上には「在外同胞」査証が条件なく発給される）の中高齢者と、親の招請で入国した25歳未満の外国籍同胞の子女に、「在外同胞」資格取得の手段として活用されている、という報告もある。

技能士資格取得による「在外同胞」への変更は、当初朝鮮族の「地位向上」につながるとして歓迎された向きもあつたが、早くも上のような懐疑的な見方も出てきた。なにより技能士資格を取得して「在外同胞」に在留資格を変更しても、それに見合った仕事に就労できる保障がないからである。しかも「在外同胞」は単純労務就労禁止が付されているために、今度はそれまで比較的自由に就労できた非熟練部門への就労が「不法」就労になつてしまう危険性すらある。

いずれにしても中国朝鮮族をメイン・ターゲットにした選抜システムには、表向きの同胞政策とは裏腹に、こうした入管政策の都合と経済主義が横たわっている。政策論の視点からみれば、問題はこうした選抜システムが表向きの交流拡大と差別解消につながるのか、また専門人材の獲得などによる経済発展への貢献、または国内労働市場のミスマッチ解消といった「隠れた意図」ほどの

ような展開を見せるのか、その推移が気になるところである。そしてこのような政策展開によって中国朝鮮族は他の外国人や先進国出身の同胞との「分離」が解消され、イメージ改善につながり、外国人の人権保護と社会統合は進むのか注目される。残念ながらこれらの問いに答えを出すのはまだ時期尚早であろう。新たな展開を見定めるためにはもう少し時間の経過が必要であり、これまで^{ちよらいほかい}朝令暮改のように変わってきた入管政策の行方も見守らなければならない。

註

- i.. 許青善・姜永徳『中国朝鮮族教育史』（延辺教育出版社、2009年）152頁（花井みわ「中国朝鮮族の人口移動と教育」『早稲田社会科学総合研究』第11巻第3号（2011年3月）から再引用）。
- ii.. イジンヨン「韓国の在外同胞政策」IOM移民政策研究院2010、3〜4頁
- iii.. イジンヨン（2010）11頁
- iv.. 法務部「よく分かる在外同胞政策マニュアル（2013・12・1）」
- v.. クワクジェソク「在外同胞滞留資格変更のための国家技術資格取得教育の実態と改善方法」（社）移住・同胞政策研究所2014

参考文献

- イジンヨン、「韓国の在外同胞政策」IOM移民政策研究院、2010
- クワクジェソク、「在外同胞滞留資格変更のための国家技術資格取得教育の実態と改善方法」（社）移住・同胞政策研究所、2014
- 宣元錫、「韓国『外国人力』受け入れ政策」『総合政策研究』第18号、中央大学、2010
- 花井みわ、「中国朝鮮族の人口移動と教育」『早稲田社会科学総合研究』第11巻第3号（2011年3月）
- 法務部、「出入国・外国人政策統計月報（2013年12月号）」
- 法務部「よく分かる在外同胞政策マニュアル（2013・12・1）」

日韓関係「最悪」時代に、 「次世代映画交流」は何かできるか？

NPO法人日韓次世代映画祭代表
大分県立芸術文化短期大学教授
下川正晴

首筋をなでる冷たい風が、年の瀬を感じさせた。

2013年12月、クリスマスシーズンに約1週間、僕はソウルにいた。「Happy New Year」。気の早いステッカーも目立った。僕の定宿は、中区忠武路にある安旅館だ。忠武路は韓国映画の代名詞。かつて、ここには多くの映画館や映画関連の事務所があった。仁川国際空港から高速バスに乗り、忠武路に着く。出迎えるのが、大韓劇場の巨大な映画看板だ。この光景を見るたびに、「ソウルに来た」と実感する。

いつもの旅館は、ちよつと閑散としていた。クリスマスシーズンなのに、泊まり客が少ない。「円安の上に政治家のせい、日本人客が韓国を不安に思い、宿泊者が激減した」と主人が嘆く。日本人客は半分以上も減って

しまったという。「それでもリピーターには、来ていただけののが幸いだ」。3月から中国語の勉強を始めたという。しかし、「中国人客にも海外旅行の節約令が出て、以前ほどではない」とのことだ。勤勉で篤実な韓国人男性である。姉と一緒に、この仕事を始めて数年になる。「政治家のせい」。日韓関係の冷え込みの原因を、的確に指摘したのがなによりだ。国民間の感情対立のせいではないことを、彼はちゃんとわかっていた。

年の瀬は映画祭の準備で忙しい

年末のソウル滞在は、ここ数年間の恒例行事である。翌年春に開かれる「別府日韓次世代映画祭」に招待す

る映画俳優や監督との出演交渉が、この時期に大詰めを迎えるからだ。いくつかの映画、俳優事務所巡りをしながら、空き時間には韓国映画を見るのが日課だ。

まず、話題の映画『弁護人』を見た。1980年代の韓国が時代背景である。釜山の人権弁護士だった盧武鉉元大統領をモデルとした映画とあって、韓国ではなにかと毀誉褒貶あるようだが、僕の目には「いい映画」だった。観客約100人と盛況。後ろの席に若いカップルが座っていて、男の方がなにかと解説しながら見ていたのが面白かった。1980年代の民主化闘争は、すでに「過去の歴史」なのである。

翌日は日本で見そびれていた『そして父になる』（是枝裕和監督）を見た。80000ウォン（約800円）。日本より安く見られる。丁寧な演出に好感を持った。チョン・ドヨンとコ・ス主演『家に帰る道』は実話をもとにした作品だが、映画的な面白みに欠ける。コン・ユ主演『容疑者』は、最近流行の南派工作員ものだ。先日訪韓の際に見たTOP主演『同級生』と印象がかぶった。

3日目。イ・ミヨンセ監督（日韓次世代映画祭実行委員長）、カン・ハンソプ教授（ソウル芸術大学映画学科教授、映画祭顧問）と、3時間にわたって今回の映画祭

CHEONGHAK

について協議した。2014年3月28日、30日の「第6回別府日韓次世代映画祭」の招待ゲスト、コンセプトなどについて話し合った。同年8月に大分市で行う「第4回日韓学生短編映画制作交流」についても、アウトラインを決めた。イ・ミヨンセ監督は次回作『あり地獄』（仮題）の脚本が前日完成したという。カン教授は近く、新しい映画雑誌を創刊する計画。2014年は、それぞれにとつて飛躍の年になりそうだ。カン教授からは夏休みの1週間、日韓学生が大分市で撮影したオムニバス短編映画『8月の小さな物語』（55分）のDVDを受け取った。「第6回別府日韓次世代映画祭」で、公開する予定だ。

その翌日。古参の映画評論家キム・ジョンウオン先生と、大韓劇場の前で待ち合わせた。韓国映画評論家協会常任顧問のキム先生は、日韓次世代映画祭特別顧問でもある。前日の映画祭3者会談（イ・ミヨンセ監督＋カン・ハンソプ教授＋下川）の結果を報告したあと、忠武路の旧映画街一帯を、先生の案内で撮影して回った。

大韓劇場からスタートした。その裏手にある「韓一ホテル」（旧ソウル旅館）は、韓国の有名俳優が経営していた場所だ。向かいのビル3階には、名作『誤発弾』などで知られる故ユ・ヒョンモク監督の事務所があったと

いう。大韓劇場前の道路を横断した所は、旧極東劇場（ソウツンクワツキョウ）。昔の表示がそのまま残っていた。忠武路の路地に入り、かつて俳優や監督が集まった「スター茶房（スターチャパン）」の跡地を見て、さらに旧スカラ劇場、旧カナリア茶房、明宝劇場（ミンボ）の前でキム先生が解説。最後は忠武路5街の交差点にある「大鐘賞（テジョンサン）」の記念碑前で撮影した。この動画は10分ほどに編集して、2014年3月の映画祭で上映する予定だ。

光化門（グワハムン）近くにある独立系映画館「インディスペース」では、『おはよう札幌』という韓国映画を見た。2012年1月4日の封切り作品だ。1周年記念の上映というふれこみで「関係者の舞台挨拶がある」との予告を楽しみに出かけたが、どういうわけか「ゲスト出演は中止になりました」。映画そのものは、非常に印象のよいものだった。聴力障害者の「モレ」（韓国語では「明後日」の意味がある）が、インターネットで知り合った札幌の聴力障害者「ヒロ」（彫刻家）に会いに行くという単純なストーリーだが、二人の生活環境や周辺人物が丹念に描かれており、好感を持った。韓国語の字幕は「オハイオ札幌」。どういう意味か？と戸惑った。しかし英語タイトルが「OHAYO SAPPORO」だったので、疑問は氷解した。日本語ウェブを検索したが、日本語情報はとても少

ない。日本では注目されなかったらしい。

こういう映画こそ、日韓次世代映画祭で上映したい、とも思った。大量生産、大量消費の映画界の中で、埋没（まいぼつ）しかけている優秀な小品を紹介するのも、僕らの映画祭の役割の一つだからだ。

僕のソウルでの年の瀬は、こういうふうにして暮らしていった。

6回目を迎える日韓次世代映画祭

「日本でイム・グオンテク監督の映画祭を開きたい」
知人の東西（トシウ）大学総長・張宰国（チャサングク）さんから、協力を頼まれたのは2007年のことだ。東西大学にはこの年、韓国映画の巨匠・イム・グオンテク監督が学部長として招かれ、「林権澤映画学部」が誕生した。僕は大阪県立芸術文化短期大学（大分市）教授に着任したばかりだった。大分で開くことになるけど、いいですか？」「別府に提携している大学が2つもある。好都合ですよ」。トントン拍子に話が進んで、イム監督の映画祭は2008年秋、「第1回日韓次世代交流映画祭」として温泉都市・別府で開催された。

地方都市を舞台に開かれる韓国映画祭は、日本で初めての試みだった。今春で6回目を迎える。名前の通り「日韓」「次世代」「映画」交流を目的に続けてきた。僕は総括ディレクターだ。映画祭の実務責任者を務めている。俳優との出演交渉がうまくいかず、年を越すことも何度かあった。そんな時は不安でたまらない。

第2回は、国民的俳優アン・ソングギさんが来てくれることになった。「次世代映画祭をもっと盛り上げる方策がありますよ」。キム・ジョンウオン先生が提案してくれた。「毎春秋に映評賞の授賞式があります。その受賞監督や俳優を、翌年の映画祭に招待したらどうですか」。グッドアイデアだ。さっそく実行に移し、その回は主演男優賞のイ・ボムスさんと監督賞のキム・ヨンファさんの2人も来日した。大成功だった。

第3回映画祭は、『高地戦』のチャン・フン監督、主演のコ・スさん。第4回は男優ハ・ジョンウさん、ユン・ジョンビン監督。そして2013年2月の第5回は、キム・ギドク監督、アン・ソングギさんらに来てもらった。「毎年、すごいゲストですね」と、賞賛される。もちろん、キム先生ら韓国映画評論家協会の全面的な支援のためものだ。しかし、集客がうまくいかず、赤字を出した

CHEONGHAK

こともある。昨年、窮状を訴えると、映画祭ゲストとして来たことがあるイ・ミヨンセ監督が映画祭の執行委員長に、アン・ソングギさんが映画祭顧問になってくれた。これで俳優や監督の出演交渉が、ぐつとスムーズに展開するようになった。「下川さんが映画祭をやっている限り、応援しますよ」。韓国を代表する監督や俳優からこう激励されては、「日韓次世代映画交流」の命脈を絶やす訳にはいかない。

昨年11月、ソウルの国際プレスセンターで開かれた映評賞授賞式で、僕は「日韓関係が政治的に最悪の状態にある現在こそ、映画交流、文化交流の意義がある」と強調した。司会をしていたアン・ソングギさんが、降壇する僕たちを見ながら「文化交流こそ意義がある。その通りですね」と、共感のメッセージを送ってくれた。

映画は人々の生活を自然な形で教える

日韓関係はいま、最悪の時期にあるという。その中で「日韓次世代映画交流」は、何ができるのか？

今回、ソウルに来る機内でハワイ大学のジョージ・アキタ名誉教授らによる研究書『日本の朝鮮統治』を検

証する 1910-1945』(草思社)を読んだ。その中にある一節に、思わず膝を打った。

「できるだけ多くの映画を観るようにしたまえ。映画というものはね、その国の歴史と文化について、実に多くのことを教えてくれるものだが、さらに重要なのは、人々が日々をどのように生きているのかを、ごく自然な形で教えてくれることですよ」(227ページ)。アメリカの極東研究の父といわれたセルゲイ・エリセーエフ教授(1889~1975)が1955年、若き日のアキタ教授に与えた言葉だ。

「日韓次世代映画交流」を推進してきた僕にとつては、至言であると思える。客員教授として滞在した韓国外国語大学言論情報学部などで、若い韓国人学生に植民地時代の「親日映画」を紹介し、大分県立芸術文化短期大学の学生には韓国映画を幅広く見せてきた。

『日本の朝鮮統治』を検証する』の中では、1941年に公開された親日映画『志願兵』についての言及もある。この映画は別府の日韓次世代映画祭でも上映した。「映画を通して、地主と春浩(農村の青年)の家族は一貫して朝鮮の衣服を身に着けている。おまけに背景には伝統的な民族衣装を身にまとった朝鮮の人々が歩く姿が

見られる」(227ページ)。過去の映画を見ることによつて、1941年当時の「朝鮮の実相」を知ることができたのだ。

この映画祭は4年前から、日韓学生による短編映画制作りに発展した。イ・ミヨンセ監督(日韓次世代映画祭執行委員長)の母校であるソウル芸術大映画学科から7、8人の学生を招き、大分県立芸術文化短大の学生30~40人とともに、1週間の合宿生活をする。スマートフォンなどを駆使しながら、数本の短編映画を合同制作した。日韓共通の課題に取り組むことによつて、両国間の違いもわかる。日本側の「段取り重視」、韓国側の「即興性重視」。ふだんでは気づかない「行動様式の違い」にも遭遇することになる。

僕のパートナーになったのが、同学科のカン・ハンソプ教授である。カン教授は李明博政権時代に、韓国映画振興委員会(KOEFIC)常任委員長を務めた人物だ。韓国映画振興委員会は文化体育観光部から、映画への支援に関する業務を委任された専門機関だ。カン委員長はその鋭い舌鋒で韓国映画界でも定評があり、特に映画理論で卓越した才能を見せてきた。韓国映像派の巨匠イ・ミヨンセ監督の作品を高く評価してきた「盟友」でもあり、

私たちの映画祭顧問になってもらった由縁ゆえんでもある。

「パーソナルシネマ」。スマートフォンで映画を撮るという交流意義を、カン教授はこのフレーズに集約した。2回目の合作映画のタイトルに、「KISS ME DEADLY」という卓抜なネーミングを施したのも、この理論家教授だった。日韓合作映画は2012年、韓国政府主催の「スマートフォン映画祭」で金賞を受賞した。僕はいわば「実践型」。カン教授は「理論型」である。この両輪で映像交流を進展させてきた。

韓国認識のための映画鑑賞

日韓の若者による文化交流は、映像から音楽と幅を広げてきた。僕が芸短大に赴任した当時、東方神起のファンです。韓国語を勉強したい」という学生が次々と入学して来た。3年前だったか、成人式を迎えた学生の話聞いて驚いたこともある。ある女子学生が、成人式の日「チマチヨゴリ」を着て会場に現れ、周辺の度肝どぎんを抜いたのだ。親子ともに「韓流ファン」であるとは、聞き知っていた。ここまでやるとは。念のために言うと、彼女は在日韓国人ではない。「韓国が好き。チマチヨゴリ

CHEONGHAK

を着て、成人式に出たかった」という、それだけの理由からだった。「日韓新人類」が現れたのか、と驚いた。

大学の授業の「韓国の社会と文化」で、朝鮮戦争を背景にした映画『ブラザーフッド』を学生たちに見せた。目を真っ赤にした学生たちの顔を見ながら新鮮な感動を受けた。それは毎年のように繰り返されてきた。

「日韓映像交流」は、韓国研究の場でもある。

僕が韓国に関心を持ち始めたのも、韓国映画の影響が大きい。1980年代の初め、NHKテレビでイ・ジャンホ監督の名作『風吹く良き日』が放映された。全斗煥チェドファン政権の韓国。アン・ソングさんら演じる孤独な青年像にひどく心を揺り動かされた。

1970年代初めの大学時代は、学生運動が盛んだった。僕は1972年、大阪市役所の職員採用における民族差別を糾弾きつぱんするデモに参加し、1973年に毎日新聞社に入社後も、指紋押捺反対運動を取材するなど、在日韓国・朝鮮人の権利を守る運動に関心を持つてきた。

85年から1年間、ソウルの延世大学ヨンセに私費留学した。その時、最初に見た韓国映画がアン・ソングさん主演の『深く青い夜』（ペ・チャンホ監督）。現在、映画祭顧問になってくれる彼との因縁を感じないわけにいかない。

89年から5年間務めた毎日新聞ソウル特派員時代も、暇さえあれば映画館に通った。韓国の映画の特徴のひとつは、現実社会をよく反映しているということだ。どこかの国の映画もそうなのだが、韓国は社会の変化が激しいので、よけいにそれを感じる。

かつて、日本人の韓国への関心は政治・経済面に対しては強かったものの、韓国文化にはあまり興味がなかった。そんなところから相手国への認識にゆがみが生じてくる。映画は総合芸術だ。映画を見ることで、相手国への理解を深めることができる。映画を見ながら韓国人と話をしていると、韓国人が日本について誤解していることに気づく。韓国語で話していると、彼らの本音が出てくる。意見が合わないため、たまには喧嘩けんかしてもよい。喧嘩をしても日本人のような後腐れはない。むしろ日本人が本音を言わないことで、不信感が生まれると思っっている。

韓国の対日認識は「反日」(韓国の元気の素)気分をベースに、「反日」↓「知日」↓「克日」↓「侮日」(日本軽視)と変遷へんせんしてきた。ここにきて「用日」論が出てきたのは、韓国国民の成熟度を反映している。韓国のマスコミほど、一般の国民は浅薄ではない。

韓国で「用日」が登場したのは、2014年1月9日付「中央日報」の社説「政府は『用日』の世論に耳を傾けるべきだ」。韓国の世論調査で「中国の浮上などを考え日本との安保協力が必要」が64%、「大統領は対日関係改善に積極的に動くべきだ」が58%を占めたことなどを紹介し、国益のためには名分や原則にこだわらず「日本を活用する」『用日』でいくべきだと主張している。

一方、産経新聞社とFNNの合同世論調査によると、安倍首相の靖国神社参拝について、「評価しない」(53.0%)との回答が「評価する」(38.1%)を上回った。しかし、中韓両政府の日本政府への批判に対しては「納得できない」との声が67.7%に達し、「納得できる」(23.3%)を大きく上回った。米政府が「失望した」とする声明を出したことに、6割近くの日本人が不快感を示したという。両国民の反応はいずれも妥当なところだろう。

日本は戦後、「侮韓」(韓国軽視)をベースに、「親韓」(贖罪くわんざい)、「韓流」(嫌韓)、「反韓」と揺れ動いてきた。いま必要なのは「知韓」「克韓」「用韓」の戦略論だが、旗振り役が少ない。韓国映画を見ることは、隣国認識の第一歩であり、きっかけになると確信する。

ソウルで知った「靖国参拝」の衝撃

ソウル滞在中に、安倍首相が靖国神社を参拝したことを知った。日本のテレビ局はヘリを飛ばして、参拝の様を中継したという。「意外だ」という感情に襲われた。就任以来、多面的な外交を進めてきた安倍首相だが、「これはオウンゴールではないか」と直感した。今回の「靖国参拝」のキイポイントは、天皇家の「靖国参拝せず」と首相の「参拝断行」の間に、「国論の亀裂」が生じたことだと思う。安倍首相が天皇に「内奏」するとき、どういう会話が交わされるのだろうか。

「日韓関係を悪くするのは、政治家とマスコミ報道だ」。かつて毎日新聞ソウル特派員を経験した僕にとって、これはいまでも変わらぬ印象だ。一昨年以来の日韓関係の悪化は、まず李明博大統領の竹島上陸に端を発し、朴槿恵大統領の「告げ口外交」と韓国側の「オウンゴール」が続いたが、ここに来て日本側も手痛い失策を演じた。「大日本帝国と兵士たちとの間の約束は『戦死者は誰でも靖国神社にお祀りされる』『天皇陛下がお参りしてくださる』の2つだったはずで、これを実現する環境を整

CHEONGHAK

えるのが政治家の務めなのだと考えています。総理が参拝する、とか国会議員が参拝する、などというのはこの本質ではありません。これは自民党の石破茂幹事長がかつて田母神俊雄・元航空幕僚長の言説を批判したコラムの中にある一節だ。この批判は、いま安倍首相に向けられてもいいだろう。

ソウル在住30数年のジャーナリスト黒田勝弘さんが、最近のコラム（2014年1月12日『から（韓）国だより』）で「正月に日本に行ってきたが、反韓感情の広がり」に驚いた」と書いている。「恋人」みたいに持ち上げている朴槿恵大統領に裏切られたのだから、もう日本に帰って来たら」と、産経新聞本社で冷やかされているという。彼の肩書きが、いつのまにか「客員論説委員」になっている。産経の韓国報道も、長年の「黒田色」から「民族派」に変わりつつあるのだろうか。

SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の時代である。

安倍首相だけでなく、首相夫人もフェイスブックで発信する時代だ。年の瀬も押し詰まった2013年12月30日、すでに帰国していた僕は首相夫人・安倍昭恵さんのフェイスブック投稿を読んで、首をひねった。

それは別人のブログ記事を「シェア」したものであったが、「中国、韓国以外の国では、日本首相の靖国参拝を批判していない」との論拠として、台湾の李登輝元総統（リイテンズイ）ら10人近くの発言を網羅したものだ。この記事には、ソースが明記されていない」とすぐに気がついた。こういう記事は怪しい。安倍夫人の軽率さをフェイクブックで批判した。「ソースが明確でない。これだけたくさんの『非難しない反応』が出ているのなら、当然にも産経新聞が報道していいはずなのに、どうなっているのか!? 学者の『アンチ批判』発言は産経でも読んだことがあるけど……」。いま確認してみると、安倍夫人のシェア記事は、もともとのブログ記事ともども削除されていた。いわば、ガセネタだったのだ。首相夫人ですら引かかるフェイク記事。油断がならない。

産経新聞の黒田さんが、前述のコラムで嘆いていた。「最近の日本社会で驚くことは、韓国での反日嫌がらせ現象が実によく知られていることだ。これは近年、韓国のネットメディアが韓国情報を日本語でせっせと日本に送りこんでいるせいと思われる。その結果、ソウル在住の筆者も知らないささいな反日ネタまで多数、日本で流通している」

いや、ネットだけでなく、週刊誌まで加わって「韓国バッシング」に熱を上げているのが、最近の実情だ。韓国のマスコミの場合、その対日報道は「週刊誌並み」のことが少なくなかった。ともに「マスコミの商業主義」のなせる技だ。韓国では反日報道が商売になる。日本では反韓報道が商売になる。その傾向は最近、さらにエスカレートしてきた。

正月休みには、話題の日本映画『永遠の0』を見て驚いた。エンドロールに映画製作委員会の会社名が列記してある。その中に朝日新聞、中日新聞、西日本新聞など、「靖国参拝」反対論の新聞社が軒並み並んでいた。紙面では原作小説を「右翼エンタメ」と批判する記事を載せる一方、映画には投資して利益を図る。新聞の商業主義。その無神経さに社内から批判はないのだろうか。

映画は多様性を映し出す総合芸術

なぜ、我々は映画を見るのか？

新聞記者だった僕にとつて、韓国認識の第一歩は韓国に住み、韓国の水を飲み、韓国人と話をし、韓国人とともに、日本人として考えることである。しかし、それは

韓国在住者でなくては叶わぬことだ。だから映画を見る。映画は「他者の人生を生きる」ことだ。「他国の人生と社会を知る」ということだ。

作家・池波正太郎の文章（『映画を観ると得をする』新潮文庫）に、こんなくだりがある。

「映画を観るということは、いくつもの人生を見る、ということだ」「長く映画を観続けている人は、きまつてお洒落のセンスがよいものだよ」「総合芸術だからね、映画というのは。文学はもとより、絵画、彫刻、建築。さらに音楽が含まれている」。これ以上に、付け足す言葉はない。映画を見ることで、他国民に対する想像力が養成される。このうえない「メディア・リテラシー」が形成されるということだ。

日韓次世代映画祭では、韓国映画の感想文コンクールも行ってきた。そのすべての作品が、公式ブログ (<http://ameblo.jp/jk-nextfilm/theme-10048077620.html>) に掲載されている。その中から、任意に2本を紹介しよう。まず『私の友達、私の妻』（2006年シン・ドンイル監督）の感想だ。

「映画を観て、腰が抜けたのは初めてだった。エンドロールが終わっても、私はしばらく立ち上がることができな

CHEONGHAK

かった。韓流映画はロマンチックだとかベタだとか、そんな言葉が吹き飛ぶような作品。それがこの映画が私に与えた印象だ。生きていく中で出会う、かけがえのない人たち。心から愛することのできる恋人や友人。しかし、その感情はふとした事で狂気にも変わり得る。そんな人間の美しい部分と醜い部分を、ストレートに描いた作品。オブラートに包まれていない作品。観る者にも伝わってくるストレートな感情。この映画から、韓国と日本の違いをひしひしと感じた。建前なんてない。本音だけが人間を突き動かしている。ほのぼのした平和なんて東の間。誰もが生きるのに必死で自分のことで精一杯。醜い部分もある。だからこそ美しい」

これは中年の女性による感想文だったと記憶している。もう1本。今度は18歳の女子短大生だ。アン・ソングさん主演の『鯨とり』（ベ・チャンホ監督）だ。「1984年の作品であるにもかかわらず、観終わってすぐ思った言葉は『新しい』だった。80年代の開発途中のソウル、服装、言葉、文化…そのすべてが、現代の韓国しか知らない私には目新しく感じた。それはまた、この3人の珍道中にも同じ言葉が当てはまる。とにかく、さらさらしていた。確かにビョントは内気でネガティブ

な発言ばかりしていた。しかし、親分やチュンジャと出会いは、彼らとともに旅を続けていく中で思いやりのある男前に成長して行くビョンテの姿。そしてまた、ソウルという都市で絶望を感じ、言葉を失ったチュンジャも最後は自分の言葉を取り戻しただけでなく、自分自身の本来の姿も取り戻していた。それを暖かく見守り続ける親分の姿。すべてが眩しかった。彼らのそのきらきらした姿は未来への新しい希望であった。その希望こそきつと彼らにとつて〈鯨〉だったのではないだろうか。私もビョンテ同様、内気な大学生で、同じように大きな〈鯨〉を探している。しかし、そんな私にビョンテはこう言うのではないだろうか。〈鯨は自分の心の中にあるんだよ〉とどうだろうか。映画によつて喚起された隣国のイメージは、国境を越え、時代すら超えて、日本人に訴求する。それが映画の素晴らしさだ。

そして毎年のように「日韓次世代映画交流」を卒業研究のテーマに選ぶ学生がいる。映画祭でイム・グォンテク監督の映画に遭遇した女子学生Hさんは、ソウルまで出かけてイム監督にインタビューした。監督は彼女のために3時間も割いてくれた。そのほかにも、映画祭の学生代表を務めるような熱心な学生の多くは、その後、韓

国の大学に語学留学を果たし、韓国語の能力も向上した。韓国人の友人も増えた。今春、卒業予定の女子学生Sさんは、次のように短大2年間を振り返る。

「日韓の交流活動に多く参加したことで得たものは大きい。自分の中で大きく変わったものは2つある。1つ目は、将来の夢だ。韓国の映画界のトップスターと関わってみて、こんなに輝いている人たちと仕事したいと考えてるようになった。イベントを見に行く機会も多く、舞台照明に興味を持ち始めた。そばで支える仕事をする人がいて、ステージを作り上げる人がいることに気付いた。将来は韓国語も出来る舞台照明家になりたいと、勉強を続けている。2つ目は世界を見る目が変わったことだ。韓国と関わりながら交流していくことで、自分が隣の国のことすら知らないことに気付いた。日本の教育やマスメディアによつて作られているイメージに影響され、知った気だった。竹島問題などで、日韓の政治の雲行きが怪しくなつたころ、韓国の大学で語学実習中だった私は、携帯に入ってくる日本からのニュースの情報と現地状況のギャップに唖然とした。確かに一部デモがあつたが、ソウルは日本人観光客でにぎわい、歩いていて身に危険を感じるなど全くなかつた。しかし、日本の

青鶴5

2014年3月14日 発行

発行人 韓昌祐

編集人 芦崎治

事務局 金度亨

発行 (公財) 韓昌祐・哲文化財団

〒100-6228 東京都千代田区丸の内1-11-1

パシフィックセンチュリープレイス丸の内31階

電話03-5221-7973

ファクス03-5221-7984

<http://www.hanchangwoo-tetsu.or.jp>

DTP制作 株式会社センターメディア

電子ブック制作 株式会社ページワン

本文の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©2014 HANCHANGWOO-TETSU CALUTURAL FOUNDATION
Printed in Japan

青
5
鶴

1993 CHANGCHENG CULTURE FOUNDATION
公益財団法人 韓昌祐·哲文化財団